
2022年度 後期

2.0単位

医療教育学特論

岩井 信彦、秋川 陽一、大庭 潤平、大山 摩希子、
沖田 実、小嶋 功、中前 智通、日高 正巳、備酒
伸彦、藤原 瑞穂、古田 恒輔

< 授業の方法 >

「講義」遠隔授業 院生との討論と重視する

< 授業の目的 >

遠隔授業を基本とする。

本研究科では医療・福祉に関わる分野でリーダーとなる高度な専門職業人や、医療専門職養成機関での教育者の育成をその目的の一つに掲げている（DP）。

教育という意味のeducationのラテン語の語源は「引き出す」という意味がある。対象者の能力を引き出し、生活活動を自立させていくことを主眼とするリハビリテーション医学において、教育学に関する知見を活かすことで、効果的な帰結を得る可能性が高まる。

リハビリテーション医学を学ぶ上で、教育学に関することを体系的に学ぶ機会はあまり多くない。しかし臨床現場では後進の卒後教育や臨床実習生に対する卒前教育など教育にも関わることも多い。このような状況下、医療をベースにした教育学とその実践方法を学ぶことはリハビリテーション専門職にとって意義のあることと思われる。

本科目の講師陣は教育学の専門家と臨床実習指導、卒後教育に実績のある理学療法士、作業療法士で構成されている。具体的なテーマを設定し演習を中心にこの授業を進めていく。また、「医療教育学特論演習」と関連付けながら本科目を展開していく。

< 到達目標 >

1. 人と社会を見据える広く深い学識を備え、教育・研究職を担うための知識や技能を修得する。
2. 保健・医療・福祉領域の業務に係わる専門職種の育成教育に関して意見を述べるができる。
3. 保健・医療・福祉領域における現在の課題を分析し、展望することができる。
4. 『望ましい保健・医療・福祉教育学』に関する提言をまとめることができる。

< 授業のキーワード >

保健、医療、福祉、専門職教育

< 授業の進め方 >

専門分野の教員がそれぞれの課題と展望を呈示し、教員を交えて院生同士で討議し、討議内容を踏まえて、各院生が『望ましい保健・医療・福祉教育学』をレポートとしてまとめる。

< 履修するにあたって >

本人の所属する職場、業界での教育的活動について事前

にまとめて、授業に臨む。

< 授業時間外に必要な学修 >

今まで受けてきたリハビリテーション専門職教育やこれから実践していきたい医療教育について予習すること（1時間程度）。自分の考えをまとめてから授業に臨んで下さい

< 提出課題など >

授業での疑問や意見、課題に対する考えをレポートとして提出を求める。具体的な課題はそのつど指示する。

< 成績評価方法・基準 >

発言・討議への参加状況80%、レポート20%とし総合的に判断する。

< テキスト >

授業時に各教員が紹介する

< 参考図書 >

< 授業計画 >

第1回 秋川 教育学概論1

「教育」とは何か？ - その多角的考察

第2回 秋川 教育学概論2

「教育」の原理を踏まえた、教育実践事例の検討

第3回 大山 教育心理学1

学習理論のフレームワークから「ほめる」と「やる気」を考える

第4回 大山 教育心理学2

認知科学のフレームワークから「教育心理学」の役割を考える

第5回 備酒 教育と社会・制度

超高齢・縮小社会に対応する教育の考え方

第6回 藤原 教育方法論 教育方法の理論と実践1

省察的实践者の教育と方法について学修する

第7回 沖田 リカレント教育

医療専門職のリカレント教育について学ぶ。

第8回 古田 教育方法論 設計・計画（シラバス）

シラバスに求められる要素と盛り込むべき内容

第9回 小嶋 臨床教育論 臨床実習前の評価と指導 0
SCEなど

OSCEの目的・課題・評定方法について例示し、模擬症例報告レポート添削と学生へのフィードバック方法について演習を通じて理解する。

第10回 日高 臨床教育論 臨床実習指導の理論と実践
;計画とプログラム1

診療参加型臨床実習における指導時のポイントと留意点

第11回 日高 臨床教育論 臨床実習指導の理論と実践
;計画とプログラム2

診療参加型臨床実習における認知スキル（臨床推論）指導時のポイント

第12回 岩井

臨床教育論 臨床実習指導の理論と実践;実習評価
ポートフォリオ評価とパフォーマンス評価にみる臨床実

習評価の利点と限界

第13回 中前 コーチングやアクティブラーニングに関する概要を学びます。

作業療法学教育の展望

第14回 大庭 医療専門職の生涯教育 1

生涯教育の目的と意義について学び、各種の生涯教育制度を理解する

第15回 大庭 医療専門職の生涯教育 2

生涯教育の課題と展望について議論する

2022年度 後期

2.0単位

医療教育学特論演習/リハビリテーション科学総合実習

岩井 信彦、大庭 潤平、沖田 実、小嶋 功、中前

智通、日高 正巳、藤原 瑞穂、古田 恒輔

< 授業の方法 >

「講義」「演習」遠隔授業を基本とする。

本研究科では医療・福祉に関わる分野でリーダーとなる高度な専門職業人や、医療専門職養成機関での教育者の育成をその目的の一つに掲げている（DP）。

教育という意味のeducationのラテン語の語源は「引き出す」という意味がある。対象者の能力を引き出し、生活活動を自立させていくことを主眼としているリハビリテーション医学において、教育学に関する知見を活かすことによって、効果的な帰結を得る可能性が高まる。

リハビリテーション医学を学ぶ上で、教育学に関することを体系的に学ぶ機会はありません。しかし臨床現場では後進の卒後教育や臨床実習生に対する卒前教育など教育にも関わることも多い。このような状況下、医療をベースにした教育学とその実践方法を学ぶことはリハビリテーション専門職にとって意義のあることと思われる。

本科目の講師陣は教育学の専門家と臨床実習指導、卒後教育に実績のある理学療法士、作業療法士で構成されている。具体的なテーマを設定し演習を中心にこの授業を進めていく。また、「医療教育学特論」と関連付けながら本科目を展開していく。

< 授業の目的 >

本科目は1 高度な職業人、教育・研究者を目指す人。（関心・意欲）、（知識・理解）3 本研究科の理念・目的に沿って自ら学修・論考を進めることのできる人。（思考・判断・表現）に則ったものである。本科目では医療教育学（教育学、教育方法、教育カリキュラム、臨床実習教育評価など）に関し、教育原理、教育心理学等を基礎としながら、養成校教育、臨床実習教育、リカレント教育に焦点をあて、効果的な教育法の実践に関する技能を培い、知見を広めることを目的とする。

< 到達目標 >

1 保健・医療・福祉領域の業務にかかわる専門職種の育成教育に関し、自らの意見を述べることができる。

2 臨床実習教育の指導、評価について実践できる。

3 生涯教育の指導、評価について実践できる。

< 授業のキーワード >

リハビリテーション専門職教育 臨床実習教育 生涯教育

< 授業の進め方 >

講義を中心としながら、院生との質疑応答、院生同士の討議を交えながらこの授業を進めていく。

< 授業時間外に必要な学修 >

今まで受けてきたリハビリテーション専門職教育やこれから実践していきたい医療教育について予習すること（1時間程度）。自分の考えをまとめてから授業に臨んで下さい。

< 成績評価方法・基準 >

演習への取り組み状況80%、レポート20% とし総合的に判断する。

< テキスト >

各教員が授業時に紹介または配布

< 授業計画 >

第1回 藤原 教育方法の理論と実践 1

成人教育理論と医療教育

第2回 藤原 教育方法の理論と実践2

省察的实践に関する理論と実践

第3回 沖田 リカレント教育 1

医療専門職のリカレント教育とその展開 1

第4回 沖田 リカレント教育 2

医療専門職のリカレント教育とその展開 2

第5回 古田 設計・計画（シラバス）1

シラバスの比較 講義、演習、実習のシラバス比較

第6回 古田 設計・計画（シラバス）2

具体的なシラバスを作成する。講義する側に立っての作成演習

第7回 小嶋 臨床実習前の評価と指導；OSCEなど1

OSCEの課題項目（医療面接、リスク管理、整形外科疾患の検査・測定）に関する評価と学生へのフィードバック方法について演習を通じて理解する。

第8回 小嶋 臨床実習前の評価と指導；OSCEなど2

OSCEの課題項目（中枢疾患の検査・測定、動作分析等検査・測定）に関する評価と学生へのフィードバック方法について演習を通じて理解する。

第9回 日高 臨床実習指導の理論と実践；計画とプログラム1

運動スキルの指導計画と形成的評価ポイント

第10回 日高 臨床実習指導の理論と実践；計画とプログラム2

認知スキルの指導計画と形成的評価ポイント

第11回 岩井 臨床実習指導の理論と実践；実習評価1

ルーブリック評価 作成のポイント

第12回 岩井 臨床実習指導の理論と実践；実習評価2
ルーブリック評価 その評定の解釈
第13回 中前 臨床実習指導の理論と実践；コーチング
など1
コーチングやアクティブラーニングを模擬的体験により
学びぬ。
第14回 中前 臨床実習指導の理論と実践；コーチング
など2
模擬的体験から，実施上の方法や留意点を振り返り学び
を深めます。
第15回 大庭 生涯教育実践
生涯教育とその制度を基に自らのキャリアマネジメント
について演習する

2022年度 前期

1.0単位

英語科学論文の構成と書き方

野口 ジュディー 津多江

< 授業の方法 >

インタラクティブなりモート授業です。リアルタイムで
の参加型のワークショップ授業を4回実施します： 5月
14日、21日と6月11日、18日の土曜日、1&2限
Google Driveを利用してファイル（ワード、エクセルや
PowerPointなど）の提出をします。このGoogle Driveの
使用にはgmail住所が必要です。あらかじめ取得してく
ださい。

< 授業の目的 >

この授業では、ディプロマポリシーの中でも、1.「研
究者として自立して研究活動を行い、または高度な専門
性を必要とする職業を担うため高度な専門知識や技能を
身につけている。」と4.「独創的な研究課題について、
柔軟な思考や研究方法をもとに、優れた研究論文を作成
することができる。」を目標とします。研究者として研
究成果を公表し、専門知識の構築に貢献する義務を果た
すためには科学コミュニケーションの在り方を理解する
必要があります。また、研究論文作成のために英文ジャン
ルの学び方を身につけます。

< 到達目標 >

自分の研究を英文論文としてまとめて、専門誌へ投稿す
る準備をするが、修士課程の学生等、自分の研究がまだ
決まっていない場合も、関心があれば歓迎します。

< 授業のキーワード >

ESP（English for specific purposes、専門英語の学
び方）、ジャンル（文書の種類）、ディスコースコミュ
ニティ（目標オーディエンスの集合体）

< 授業の進め方 >

レクチャー、テキスト分析、専門文書の作成

< 履修するにあたって >

積極的に参加すること。自分の研究が進んでいない場合、

出版済みのものを利用はOKその場合、（引用文献を明示
する）。

< 授業時間外に必要な学修 >

講義の対象となる教科書の箇所を読み込んで、授業中に
説明のあった課題に取り組む（目安として1時間）

< 提出課題など >

授業中に説明

< 成績評価方法・基準 >

授業参加（QA, discussion等）30%、課題提出 30%、ポ
ートフォリオ提出 40%

< テキスト >

Judy先生の英語科学論文の書き方 野口ジュディー
・松浦克美・春田伸（著） 講談社 ISBN 978-4-06-15
3156-7

< 授業計画 >

第1回 Orientation

Self-introduction

Start corpus collection

オリエンテーション：ESP（English for specific purp
oses）

自己紹介

パーソナルコーパスの構築

第2回 Analyze title and abstract

Learn how to use concordance software

英語論文のタイトルと要旨のジャンル分析

コンコーダンスソフトの使い方

第3回 Make a corpus discovery and share it

コーパスディスカバリーと応用

第4回 Analyze Introduction and write own with ref
erences

イントロダクションのジャンル分析と応用

引用文献の書き方

第5回 Examine Materials and Methods and prepare o
wn

研究方法の書き方

第6回 Prepare one section of Results

Examine figures, tables and other visuals

Examine and prepare cover letter to Editor

結果の書き方

図表の作成

Editorへの手紙の書き方

第7回 Examine Discussion and Conclusion

Examine Acknowledgments

ディスカッションと結論の構造

謝辞の情報

第8回 Share your work and learning experience

Turn in Portfolios

自分の研究テーマ（興味のあること）の紹介

ポートフォリオの提出（作成した論文と授業内のタス
クのまとめ）

2022年度 前期

1.0単位

基礎生体機能・病態解析学特論

松原 貴子、春藤 久人

< 授業の方法 >

「講義」遠隔授業（リアルタイム授業，時にオンデマンド授業のことあり）

< 授業の目的 >

生体を構成する細胞・組織・器官がもつ形態や構造は、それらの機能と密接に関連している。本特論では、人体の解剖・生理学の基礎から学修し、薬理学及び疼痛学について学修する。このような視点から、人体の器官系の構造と機能、これらの機能障害の発症機序と病態、それに対する生体反応と治療過程が理解できることを目的とする。また、薬理学では単に薬物の知識を扱うのではなく、薬物と生体の相互反応を理解できることを目的とする。この科目は、研究科修士課程DP1及びDP2に掲げる知識・技能、思考・判断・表現を修得することを目指している。

また、この科目の担当者は、医師または理学療法士として30年以上の経験があり、大学教員となった後もいろいろな形で臨床に携わる、実務経験のある教員であるため、講義では様々な病態及びその解析法に関連付けて解説し研究へ活かす知識の幅と深さを増す。

< 到達目標 >

講義で得られた知識をもって、基礎的研究から臨床的応用へと幅広い研究に対応する研究デザインを構築できるようにする。

< 授業のキーワード >

薬理学、ゲノム科学、疼痛学

< 授業の進め方 >

生体の構造と機能からその病態と解析法、および薬と生体との相互反応について、講義および対話形式で講義する。

< 履修するにあたって >

講義は、双方向に討論を展開しながら進めるため、従来の常識にとらわれず柔軟な発想をもって授業に臨み、活発に質疑、発言することを期待する。

< 授業時間外に必要な学修 >

参考論文や関連資料等を配布・指定するので、その内容について予習が必要となる。講義前には、事前に配布・指定された論文、資料等の該当部分に通すこと（60分程度）。講義後は、授業の内容を整理し、他の科目との関連も含めて整理しておくこと（60分程度）。

< 提出課題など >

講義中に課題レポートを課す。

レポートは添削の上返却時に個別指導を行い、または授業中の討議事項について各講義の最後で総括しフィード

バックを行う。

< 成績評価方法・基準 >

講義への出席、講義中の討論参加の積極性、課題レポート等により総合的に評価する。

< テキスト >

必要に応じて資料を配布する。

< 参考図書 >

講義中に紹介する。

< 授業計画 >

第1回 第1回～第4回

（担当：春藤久人）

薬理学1

リハビリテーション領域に必要とされる薬物の作用と作用機序、薬物動態等を学修する。

第2回 薬理学2

リハビリテーション領域に必要とされる個々の薬物の作用と作用機序、治療上の注意すべき点等を学修する。

第3回 薬理学3

遺伝子多型性と病気の成因及びゲノム科学から見た薬理学について学修する。

第4回 薬理学4

オーダーメイド医療（薬物治療）について学修する。

第5回 第5回～第8回

（担当：松原貴子）

疼痛学1

疼痛の定義・分類，疫学について学修する。

第6回 疼痛学2

疼痛の病態と神経メカニズムについて学修する。

第7回 疼痛学3

疼痛の診断と治療について学修する。

第8回 疼痛学4

疼痛リハビリテーションについて学修する。

2022年度 後期

1.0単位

居住福祉特論

糟谷 佐紀、KHAN MD MEHEDI HASAN

< 授業の方法 >

講義（対面授業）

< 授業の目的 >

総合リハ学部研究科DP1にある「人と社会を見据える広く深い学識を備え、教育・研究・職を担うための知識や技能を身につける」ことを目的としたかもくである。

住宅は、人間の生活の基盤であり、広い意味で福祉を支える柱である。本講義では、現代社会にある様々な課題を、住まいの視点から議論する。

福祉分野において、あまり着目されてこなかった「住まい」は、些末な問題ではなく、社会に埋め込まれた重要かつ複雑な問題であることを認識する。

ディスカッションを行うなど、実践的教育から構成される授業科目である。

本科目の担当者は、リハビリテーションセンターにおいて障害者の生活環境等の改善に関わってきた実務経験のある教員である。事例としてかかわった障害者の状況に言及し、具体的なイメージの把握に努める。

<到達目標>

人々の生活実態を、住まいという視点から把握できるようになる。

<授業のキーワード>

住宅、住宅政策、ホームレス、グループホーム、親亡き後、ひきこもり

<授業の進め方>

講義の後、各回のテーマについてディスカッションを行い、理解を深めていく。

<履修するにあたって>

国内外の居住に関する話題（ニュースなど）を意識して見るようにしておく。

<授業時間外に必要な学修>

各回の講義で実施される内容について、予習と復習行うこと（各60分程度）。

毎回の講義分野が異なるので、講義後は、授業の内容を整理して理解するとともに、他の回で学んだ内容との関連についても整理し理解を深めること。

<成績評価方法・基準>

講義の後のディスカッションの内容によって、前回までと当日の講義内容に対する理解度を評価する。

ただし、出席回数が講義回数の3分の2に満たない場合は、成績評価の対象から外す。

<授業計画>

第1回 居住福祉の概念

住宅が、人々の生活において、いかに重要な役割を果たしているかについて考える。現代社会にある様々な問題を「居住」という視点でみると、どのようなことがみえるか、について考える。

第2回 居住の貧困

安定した住宅を確保できない場合に起こる、ホームレス問題、ネットカフェ難民、脱法シェアハウス、貧困ビジネスなど住まいに関する課題を理解する。

第3回 高齢者の居住

高齢期に住まいに対する課題、それに対する居住支援について学ぶ。

第4回 障害者の居住

障害者を取り巻く居住に関する課題について考える。

第5回 若者・ひきこもり・シングルマザーなどの居住
非正規雇用や若年層など、自身で持家を取得できない者たちが増加している。居住の貧困についても考える。

第6回 災害と居住

自宅を失った被災者の生活を居住から考える。避難所や仮設住宅での生活から、自力再建、復興住宅などの恒久

住宅への住まいの選択と、それに対する課題を考える。また、コロナ禍で住まいを失った人の状況、それを支援する方策についても考える。

第7回 居住の国際比較

スウェーデンやデンマークなど公営住宅だけでなく社会住宅を供給する国々と、日本をはじめとする市場による住宅供給を中心とする国々との違いを、福祉国家の違いから捉える。

第8回 コミュニティと居住

地域共生社会の実現において、コミュニティの強化は重要である。居住の場におけるコミュニティの創出のために、住宅計画、住環境によってできることについて考える。

2022年度 前期

2.0単位

研究法特論

阪井 一雄、坂本 年将、春藤 久人、備酒 伸彦、古田 恒輔

<授業の方法>

講義及び演習

阪井担当分の最初の3回の講義はon demand の遠隔講義として行う。

阪井の担当分を含め、土曜日に時間割を張り付けているが、その時間に登校しても対面の講義はないので注意するように。

演習部分は、各指導教員と担当教員の指導の下に研究計画書を制作する作業となる。

<授業の目的>

本科目は、本研究科のディプロマポリシーの一つである「高い倫理性と責任感をもって研究に取り組む意欲と態度を身につける。」ことを目指している。

主題：理学療法と作業療法を根拠に基づいて実施(evidence-based practices)するにあたって、「エビデンスを探す」、「探したエビデンスを評価する。」、「現在のエビデンスに基づいて、自ら新しいエビデンスを作り出す。」、「エビデンスを実際の治療に有効に利用する」ことができるようになる。

目標：生物学的な研究における実験結果の評価に始まり、臨床研究において留意しなければならないバイアス（偏倚）について理解し、二重盲検化無作為割付比較対象試験（Double Blinded Randomized Controlled Trial RCT）の意義や、RCTであっても、存在する可能性があるバイアスや、それを最小化するための方法論について、理解する。その上で、自らの実験計画を策定する上で、科学的な手法を用いて、最適な研究計画を立てることができ、また自分の立てた研究計画から得られる結論の限界についての考察できるようになる。

なお、この講義の主担当者は、医学博士であり、精神保健指定医、精神科専門医、老年精神医学会専門医、臨床心理士、公認心理師の資格を持っており、臨床医として34年の経験を持っている。その経験を活かした講義を行う。

<到達目標>

研究、特に臨床研究の基本的な方法論を学び理学療法、作業療法、リハビリテーション工学、精神科領域の各分野での研究の実際を学ぶことによって、各分野での研究方法、特に研究方法の妥当性や研究結果のから得られる結論の限界を理解することができるようになると共に、その中で、各自の研究内容と目的に最適な研究計画を検討することができるようになる。

<授業のキーワード>

実験計画 二重盲検無作為割付対照比較試験 バイアス

<授業の進め方>

講義、グループディスカッション、実験等により様々な研究方法を実地で学習する。

各論では、入試出願書類の「研究計画書」をもとに、研究指導教員および本科目担当教員（各自の研究領域と関連する、または当該領域のコメントを得たい教員）とともに、各自の研究計画を見直し、夏季中間発表会に向け、研究計画書・進捗状況報告書を仕上げていく。

<履修するにあたって>

積極的な参加を望むとともに、他の分野での研究やその方法についても興味を持って学ぶことを希望する

<授業時間外に必要な学修>

課題として研究計画書の見直し・作成または研究進捗報告書の作成課題を課すため、下記の間接発表会に向け、講義時間外の学習が必要である。このため、講義以外に週2時間程度の自習時間が必要となる。

<提出課題など>

課題として研究計画書または研究進捗報告書の作成を課す。

研究進捗報告書については、研究進捗状況発表会において、担当教員を含む大学院教員からの意見を受け、指導教員と担当教員が評価する。

<成績評価方法・基準>

研究計画書案または研究進捗報告書等の作成課題(8割)ならびに学習記録(2割)をもとに総合的に評価する。

<テキスト>

特にテキストは定めない。講義に必要な資料は講義の際に配付する

<授業計画>

第1回 臨床研究の意義と理論、研究倫理

第1回から第3回 担当：阪井 一雄

臨床研究の目的、臨床研究にあっても必要な基礎研究の知識について学習する。

第2回 研究デザイン(量的研究と質的研究)

研究計画を立てるにあたって、研究で問題となるバイア

スや、そのバイアスを避けるために必要な対策について検討します。

第3回 文献の検索と批判的吟味

研究においてどのようにしてバイアスが出てしまうかといった点について、実際の例を見ながら考察します。

第4回 各論

関連領域の研究例の紹介と各自の研究計画の見直し。(春藤 阪井 備酒 古田 坂本)

第5回 各論

関連領域の研究例の紹介と各自の研究計画の見直し。(春藤 阪井 備酒 古田 坂本)

第6回 各論

関連領域の研究例の紹介と各自の研究計画の見直し。(春藤 阪井 備酒 古田 坂本)

第7回 各論

関連領域の文献検索。(春藤 阪井 備酒 古田 坂本)

第8回 各論

関連領域の文献検索と批判的吟味。(春藤 阪井 備酒 古田 坂本)

第9回 各論

関連領域の文献検索と批判的吟味。(春藤 阪井 備酒 古田 坂本)

第10回 各論

各自の研究プロトコル作成。(春藤 阪井 備酒 古田 坂本)

第11回 各論

各自の研究プロトコル作成。(春藤 阪井 備酒 古田 坂本)

第12回 各論

各自の研究プロトコル作成。(春藤 阪井 備酒 古田 坂本)

第13回 各論

各自の研究計画・進捗状況報告書作成。(春藤 阪井 備酒 古田 坂本)

第14回 各論

各自の研究計画・進捗状況報告書作成。(春藤 阪井 備酒 古田 坂本)

第15回 各論

各自の研究計画・進捗状況報告書仕上げ。(春藤 阪井 備酒 古田 坂本)

2022年度 後期

2.0単位

研究倫理学特論/医療・福祉倫理学特論

村尾 浩、佐野 光彦、西尾 久英、松原 貴子

<授業の方法>

講義、演習、オンデマンド形式

<授業の目的>

人を対象とする医学系研究は、医学・健康科学及び医療技術の進展を通じて、国民の健康の保持増進並びに患者の傷病からの回復及び生活の質の向上に大きく貢献し、人類の健康及び福祉発展の基盤である。また、学問の自由の下に、研究者が適正かつ円滑に研究を行うことのできる環境整備が必要である。その一方で、人を対象とする医学系研究は、研究対象者の身体及び精神に加えて、社会に対して大きな影響を与える場合があり、多様な倫理的、法的又は社会的問題を招くリスクが存在する。研究対象者の福利は、科学的及び社会的な成果よりも優先されなければならない。また、人間の尊厳及び人権が守られなければならない。

本科目は、研究対象者の福利を優先させつつ、人を対象とする研究を進展させる際に必要な研究倫理の視点を身につけることを目的とする。

本科目は、本研究科のディプロマポリシーの一つである「高い倫理性と責任感をもって研究に取り組む意欲と態度を身につける。」ことを目指している。

<到達目標>

1. 研究倫理の視点を説明できる。
2. 研究者の責務を説明できる。
3. 研究計画書の必要性を説明できる。
4. 研究計画書を作成できる。
5. 倫理審査委員会の役割を説明できる。
6. インフォームド・コンセントを説明できる。
7. 個人情報の適切な取り扱いを説明できる。
8. 重篤な有害事象の対応について説明できる。
9. 研究の信頼性確保について説明できる。
10. 研究不正行為について説明できる。

<授業のキーワード>

研究倫理、研究計画書、インフォームド・コンセント、個人情報、研究不正行為

<授業の進め方>

4名の教員によるオムニバス形式であり、教員との交流等で進める。

<履修するにあたって>

研究倫理の基礎を身につけること。

<授業時間外に必要な学修>

倫理審査に必要な研究課題についての研究計画書の作成課題が課せられる場合がある。

課題の達成には履修期間および履修期間以外の学習が必要である(60分程度/回)。

<提出課題など>

適宜、教員がコメントする。

課題として、倫理審査用の研究計画書の作成および総合リハビリテーション学部人を対象とする研究等倫理審査委員会への提出(神戸学院大学総合リハビリテーション学部学部長補佐室が受付窓口です)、ならびに日本学術振興会が提供する研究倫理eラーニングまたは本学主催の研修会への受講等を課す。

後期終了後 学習記録(指導教員または副指導教員の印鑑必要)を提出してください。

学習記録は one drive にアップします。

<成績評価方法・基準>

倫理審査用の研究計画書等の申請文書や研修会の受講証明等の課題の達成状況、ならびに学習記録により総合的に評価する。

<テキスト>

特になし。

<参考図書>

人を対象とする医学系研究に関する倫理指針(平成29年2月28日一部改正版)

科学の健全な発展のために-誠実な科学者の心得-日本学術振興会「科学の健全な発展のために」編集委員会編丸善出版平成30年第8版

<授業計画>

第1回 医学系研究の倫理指針と倫理審査

人を対象とする医学系研究倫理指針(目的・用語等)、研究者・研究機関長の責務、倫理審査委員会の意義・役割・責務を理解する。【村尾】

第2回 研究の信頼性、不正行為

研究の信頼性確保と研究不正行為を理解する。【村尾】

第3回 個人情報保護

個人情報および匿名加工情報の取り扱い・安全管理、保有する個人情報の開示を理解する。【村尾】

第4回 研究計画書

研究計画書の作成意義・記載事項、インフォームド・コンセント、有害事象への対応を理解する。【村尾】

第5回 研究倫理研修会

研究倫理e-learningコースまたは本学研修会の受講。【村尾、松原、西尾、佐野】

第6回 倫理審査：研究計画書

各論：倫理審査申請のための研究計画書作成。【村尾、松原、西尾、佐野】

第7回 倫理審査：研究計画書

各論：倫理審査申請のための研究計画書作成。【村尾、松原、西尾、佐野】

第8回 倫理審査：研究計画書

各論：倫理審査申請のための研究計画書作成。【村尾、松原、西尾、佐野】

第9回 倫理審査：研究計画書

各論：倫理審査申請のための研究計画書作成。【村尾、松原、西尾、佐野】

第10回 倫理審査：情報公開

各論：倫理審査申請のための研究情報公開(公開データベースへの登録)方法。【村尾、松原、西尾、佐野】

第11回 倫理審査：説明同意書

各論：倫理審査申請のための説明同意書作成。【村尾、松原、西尾、佐野】

第12回 倫理審査：説明同意書

各論：倫理審査申請のための説明同意書作成。【村尾、松原、西尾、佐野】

第13回 倫理審査：インフォームド・コンセント

各論：インフォームド・コンセントの手続きと受け方の実践。【村尾、松原、西尾、佐野】

第14回 倫理審査：研究計画書修正

各論：倫理審査再申請のための研究計画書修正。【村尾、松原、西尾、佐野】

第15回 倫理審査：研究計画書修正

各論：倫理審査再申請のための研究計画書修正。【村尾、松原、西尾、佐野】

2022年度 前期

1.0単位

更生保護特論

脇田 吉隆

< 授業の方法 >

講義(原則としては対面授業。遠隔授業が必要になればオンライン授業)

< 授業の目的 >

この科目は、学部DP2に掲げる社会福祉士・精神保健福祉士の国家資格を取得できる知識・技術を身につけることを目指します。社会リハビリテーション学科の学生として「更生保護制度」についての基礎知識を習得し、実践現場に生かせる応用力を身につけることができることを目的とする。

< 到達目標 >

専門職種者である社会福祉士・精神保健福祉士をめざす者として、日常社会におこるさまざまな社会問題に関心を示し、生活者の視点に立って人権感覚を身につけ、問題の解決方法を見つけることができることを目標とする。

< 授業のキーワード >

更生保護制度、社会復帰、生活者の視点、人権感覚。

< 授業の進め方 >

講義を中心に進める。

< 履修するにあたって >

無断遅刻・無断早退・中途退室・無断欠席は認めない。

< 授業時間外に必要な学修 >

次の講義についてのテーマを知らせるので、事前学習として該当するテキストの範囲を30分の予習し講義には必ず出席すること。講義終了後は配布資料等の内容を再確認して課題レポートに取り組むために60分の事後学習を行うこと。

< 提出課題など >

講義の最初に前回の確認作業を行う。講義中に提示する課題について毎回課題レポートを書いてもらう。

< 成績評価方法・基準 >

毎回の課題レポート(50%) 最終課題レポート(5

0%)

< テキスト >

社会福祉士養成講座編集委員編『更生保護制度』第4版
中央法規 1,600円+税

< 参考図書 >

清水義新恵・若穂井透編著『更生保護』第2版 ミネル
ヴァ書房 2,400円+税

その他については講義中に指示する。

< 授業計画 >

第1回 本講義の目的

講義の進め方について説明するのでそれを理解する。更生保護制度とは何かについて解説するのでそれを理解することができる。

第2回 更生保護制度の概要

更生保護制度の概要を理解することができる。

第3回 更生保護制度の担い手

更生保護制度の担い手について理解することができる。

第4回 更生保護制度における関係機関と団体

更生保護制度における関係機関・団体との連携を理解することができる。

第5回 医療観察制度の概要

医療観察制度を理解することができる。

第6回 更生保護の実態と今後の展望

更生保護の実態と今後の展望を具体的事例を挙げて理解することができる。

第7回 社会リハビリテーションと更生保護制度

社会リハビリテーションと更生保護制度の関係を理解することができる。

第8回 更生保護制度の理解の点検と確認

課題レポートを返却するので、その点検と確認作業を行い、更生保護制度の理解を高めることができる。

2022年度 後期

1.0単位

高齢者福祉特論

水上 然

< 授業の方法 >

テキスト、論文、行政資料などをまとめ理解を深めると共に、ディスカッションを行う。対面の演習形式の授業となる。

< 授業の目的 >

本講義は、高齢者の福祉の施策の流れと、高齢者の地域支援について学ぶ科目である。

本科目では、日本における高齢者施策の流れを理解すると共に、高齢者福祉の現状と課題について考察することを目的とする(DP2)。この科目の担当者は高齢者支援領域で10年間の業務経験を有している。実務経験のある教員であるので、より実践的な観点から高齢者福祉について解説をする。

<到達目標>

本講義の目的は下記の通りである。

高齢者福祉の発展について、時代背景を含め理解し、説明できる。

介護保険法の導入の背景を理解し、課題を含め、説明できる。

介護保険法の改正について理解し、問題点について、整理できる。

地域包括ケアと地域支援事業の概要を理解し、説明できる。

認知症施策について理解し、説明できる。

高齢者の権利擁護施策について理解し、説明できる。

今後の高齢者社会について考えを述べることができる。

<授業のキーワード>

高齢者福祉、地域包括ケア、地域支援事業、権利擁護、認知症

<授業の進め方>

テーマに沿った課題を提出する。教員が指定した行政資料、論文、テキストなどを読みまとめる。それらをもとに演習を行う。

<履修するにあたって>

大学院の講義であるため、教員とのディスカッションを重視する。制度施策に関する問題意識を持って授業にのぞんで欲しい。

<授業時間外に必要な学修>

講義の他、課題作成に1時間、復習に1時間程度。

<提出課題など>

講義の最初に課題を提出する。

<成績評価方法・基準>

課題レポート50%。ディスカッションの内容50%。

<テキスト>

適宜指示する。

<参考図書>

「よくわかる地域包括ケア」

隅田 好美/藤井 博志/黒田 研二【編著】

ミネルヴァ書房(2018)

<授業計画>

第1回 高齢者福祉の発展

老人福祉法の成立から基礎構造改革までを学ぶ

第2回 介護保険導入の背景

介護保険導入の背景と意義を学ぶ

第3回 介護保険導入後の展開

介護保険導入後の高齢者福祉の変化を学ぶ

第4回 地域包括ケアと地域支援事業

地域支援事業について学ぶ

第5回 認知症施策の流れ

国の認知症施策と「認知症にやさしいまちづくり」について学ぶ

第6回 高齢者の権利擁護施策

高齢者の権利擁護施策全般について学ぶ

第7回 高齢者虐待の防止について

高齢者虐待防止について学ぶ

第8回 高齢者福祉の今後の展開について

高齢者社会を支える仕組みについて考える

2022年度 前期

1.0単位

社会起業特論

川本 健太郎

<授業の方法>

対面講義

<授業の目的>

地域福祉の新しい局面であるの社会起業の多様な広がりについて触れ、その社会的機能やマネジメントのあり方について基本的な理解を得る。今日、社会起業は、自らオルタナティブを提示し、事業体として実践するという新しい市民参加の形態を提起している。本講義では、ビデオ等の視聴覚教材なども用いながら、そうした社会起業の実践内容について触れ、現代社会で社会起業が果たしている機能(とりわけコミュニティ形成)やマネジメントのあり方について、欧米の事例にも触れながら、考察する。

<到達目標>

諸外国における社会起業の潮流を理解し、理論的理解を深める。

日本における社会起業理論について理解を深める。

<授業のキーワード>

社会起業・コミュニティワーク

<授業の進め方>

原則対面による講義

<履修するにあたって>

社会起業、ソーシャルビジネス、社会的企業にまつわる論文のレビューを行うこと

<授業時間外に必要な学修>

テキストの該当箇所を読んで講義を受ける。また、レポート作成など、講義の他に、事前学習としておおむね1時間、事後学習としておおむね1時間の学習が必要。

<提出課題など>

授業中にレポート課題を指示する。

<成績評価方法・基準>

講義ごとに提示する課題提出による評価

<テキスト>

必要に応じて適宜説明する。

<参考図書>

必要に応じて適宜説明する。

<授業計画>

第1回 社会起業とは何か

地域福祉における社会起業の系譜および理論的位置付け

第2回 欧州における社会的企業論

欧州の社会的企業論の理解

第3回 英米における社会的企業論

英米の社会的企業論の理解

第4回 事例研究

欧州モデルの検討

第5回 事例研究

英米モデルの検討

第6回 事例研究

日本の社会起業実践（ビジネスモデル）

第7回 事例研究

日本お社会起業実践（コミュニティモデル）

第8回 社会起業研究の展望

社会起業研究の今後の展望

2022年度 後期

2.0単位

社会福祉調査研究

九十九 綾子、植村 仁、糟谷 佐紀、橋本 力、古井
克憲

< 授業の方法 >

講義、演習

< 授業の目的 >

この科目は総合リハビリテーション学部のDPIに掲げる、人と社会を見据える広く深い学識を備え、教育・研究・高度な専門職を担うための知識と技能を身につけることを目指す。

社会福祉領域の調査では、援助技術としての調査法であることを念頭に、調査の趣旨と適切性を判断する能力が必要とされる。

本講義では社会福祉領域の調査であることを意識しながら、受講生各自の研究テーマの下に実証研究の研究法として、社会福祉調査を実施するための調査の企画・設計方法や知識を学び、調査で得られたデータ分析として統計的手法を身に付けること、並びに質的研究方法の理解を深め、基礎的なデータ分析のスキルを獲得することを目的とする。

< 到達目標 >

1.さまざまな調査報告に関心を持ち、統計資料を収集できる。（態度・習慣、技能）

2.官庁統計などの統計データを読み取ることができる。（技能）

3.量的・質的調査の基礎的作業について説明できる。（知識）

4.量的・質的調査の基礎的作業ができる。（技能）

5.ExcelやSPSSを用いて、アンケート調査の分析ができる。（知識、技能）

< 授業のキーワード >

社会調査、量的調査、質的調査

< 授業の進め方 >

講義形式で説明するとともに、パソコンを用いた演習形式で行う。

< 履修するにあたって >

Excelの簡単な操作を習得しておくことが望ましい。

< 授業時間外に必要な学修 >

事前学習として、関連書籍や資料を読んでキーワードを確認し、レポートにまとめてください。（60分程度）

事後学習として、授業の内容を整理し、知識が定着するよう復習してください。技術面については反復練習をしてください。（60分程度）

< 提出課題など >

毎回の授業時に、レポート提出を求めます。提出されたレポートに対して、総評などを行います。

社会調査の基礎に関して、小テストを数回行います。各自の点数を通知し、解説、講評を行います。

< 成績評価方法・基準 >

レポート50%、小テスト50%で、総合的に評価します。

< 参考図書 >

「SPSSでやさしく学ぶアンケート処理 第5版」東京図書 石村友二郎、加藤千恵子、他

< 授業計画 >

第1回 オリエンテーション

援助技術としての社会福祉調査、実証研究の研究法としての調査、両者の共通点と相違点を整理し、調査の倫理的な面での配慮について理解する。

第2回 データの集計と分析

データの集計・分析における基本としての記述統計を理解する。

第3回 推定と検定の考え方

記述統計の次に集計・分析の際の前提となる推定と検定の考え方を理解する。

第4回 帰無仮説の棄却

仮説検証の際に用いる帰無仮説とその棄却の手続きについて理解する。

第5回 社会福祉調査の設計 問題設定と仮説の構築

社会福祉調査の設計における問題（テーマ）設定と仮説の構築について理解を深める。

第6回 調査対象の選定とデータの収集

調査の目的と分析にとって適切な調査対象の選定方法とデータの収集について理解する。

第7回 尺度と尺度の開発 測定の妥当性と信頼性

社会調査で用いられる尺度について学び、尺度の開発に必要な「測定の妥当性と信頼性」を理解する。

第8回 調査票の作成方法 質問文の作成と選択肢の設定

質問文の作成と選択肢の設定について理解する。また、調査対象者が回答しやすく、回答、回収率の改善につながる工夫を学ぶ。

第9回 量的調査におけるデータ分析

データの入力、コーディング、矛盾データの確認など、

データ分析までの準備について学ぶ。

第10回 調査の分析方法

アンケート調査の内容に応じた分析方法を学ぶ。(主にクロス集計表、独立性の検定)

第11回 調査結果のプレゼンテーション

アンケートデータの分析で得られた結果を、どのようなグラフで表現することが有効であるかを学ぶ。

第12回 質的研究とは

質的研究について量的研究との対比によって理解する。

第13回 質的研究の方法

インタビュー、参与観察など、質的研究が採用された論文を通して、質的研究の方法について理解する。

第14回 質的研究の練習 データ分析の方法

質的データを実際に分析することを通して、データ分析の方法について学ぶ。

第15回 質的研究の練習 結果のまとめ方

データ分析の結果のまとめ方を知る。

2022年度 前期

2.0単位

社会リハビリテーション学

小坂 享子、KHAN MD MEHEDI HASAN、佐野 光彦、西垣 千春、宮崎 清恵、脇田 吉隆

< 授業の方法 >

講義を中心とする。

< 授業の目的 >

この講義は、大学院DP1の人と社会を見据える広く深い学識を備え、教育・研究・職を担うための知識や技能を身につける、DP2の自ら課題を発見し、その解決方法を見出すことができることを目指している。生活の全体状況を視野に入れ、社会生活を営むことに困難が生じている人たちと環境との間の調整、さらには環境そのものの整備・改善を図るという社会リハビリテーションの基本的な概念の理解を深め、その取り組みと関係職種間の連携のあり方について考察し、社会生活力を高めるための支援方法を学修する。

< 到達目標 >

- ・社会リハビリテーションの概念について、論理的に説明することができる。
- ・社会リハビリテーションを障がい者支援の視点からコメントできる。
- ・人が生活困難に陥る原因、現在行われている対策と課題を説明することができる。
- ・社会リハビリテーションを社会福祉・ソーシャルワークの視点からコメントできる。
- ・人権や平和主義の視点で社会リハビリテーションを説明することができる。

< 授業のキーワード >

生活困難 社会生活力 ソーシャルワーク 人権

< 授業の進め方 >

5名の教員が、オムニバス形式により、パワーポイント・文献紹介・ディスカッションなど、多様な方法で講義する。

< 履修するにあたって >

問題意識を持って積極的な姿勢で臨むことが望まれる。講義では必要に応じてノートを取り、配布資料を含めて、復習すること。

< 授業時間外に必要な学修 >

各担当教員からの指導および助言により、各講義の内容を深める学習時間を、毎回1時間程度確保する。

< 提出課題など >

各教員より授業中に課題についての指示がある。提出課題については各教員より講評を行う。

< 成績評価方法・基準 >

各教員の評価(講義における討論内容[60%]、課題の内容[40%])の合計で評価する。

< テキスト >

講義時に資料を配布する。

< 授業計画 >

第1回 (小坂) オリエンテーション

講義全体の流れを理解する。

第2回 (小坂) 社会リハビリテーションとは(1)

社会リハビリテーションの概念整理を行う。

第3回 (小坂) 社会リハビリテーションとは(2)

社会リハビリテーションの展開課題について検討する。

第4回 (佐野) 発展途上国と社会リハビリテーション(1)

発展途上国の障がい者の現状(社会的排除)を学ぶ。

第5回 (佐野) 発展途上国と社会リハビリテーション(2)

発展途上国の障がい者と社会的包摂を学ぶ。

第6回 (佐野) 障がい学生支援と社会リハビリテーション

大学における障がい学生支援を学ぶ。

第7回 (西垣) 健康と生活

WHOが示す健康の考え方を知り、健康と生活の関連について理解する。

第8回 (西垣) 高齢期の健康問題

我が国の高齢者の健康状況を知り、保健・医療対策についての概要を学ぶ。

第9回 (西垣) 高齢期の生活困窮の原因と対策

高齢期に陥りやすい生活困窮の原因を知り、現在行われている対策と課題を知る。

第10回 (宮崎) 社会リハビリテーションとソーシャルワーク

社会リハビリテーションと社会福祉・ソーシャルワークの概念を学ぶ。

第11回 (宮崎) 保健医療サービス利用者の生活課題

現代社会における保健医療サービス利用者の生活課題に

ついて学ぶ。

第12回 (宮崎) 社会リハビリテーションと保健医療
ソーシャルワーク

保健医療ソーシャルワークを社会リハビリテーションの
視点から学ぶ。

第13回 (脇田) 憲法と社会リハビリテーション(1)
人権規定(個人の尊重・平等権・生存権)を社会リハビ
リテーションの視点で再構成することの重要性を学ぶ。

第14回 (脇田) 憲法と社会リハビリテーション(2)
統治機構を社会リハビリテーションの視点で再構成す
ることの重要性を学ぶ。

第15回 (脇田) 憲法と社会リハビリテーション(3)
平和主義を社会リハビリテーションの視点で再構成す
ることの重要性を学ぶ。

2022年度 後期

1.0単位

障害福祉特論

糟谷 佐紀

<授業の方法>

講義と演習

<授業の目的>

[主題]

本科目は、DP2を目指している。障害者福祉分野では様
々な制度改革が続いている。そのことが、実践現場にも
大きな影響を与えている。そこで、基本理念を踏まえな
がら、障害福祉サービスの現実について研究する。

<到達目標>

ノーマライゼーションの基本理念について説明できる。

障害者福祉のサービスの課題について分析できる。

<授業のキーワード>

ノーマライゼーション、自立生活、実践現場

<授業の進め方>

障害者福祉の文献から基本的理念を理解し、障害者から
直接話を聞くことを通して、より理解を深めていく。

<履修するにあたって>

国内外の障害者に関する話題(ニュースなど)を意識し
てみるようにしておく。

<授業時間外に必要な学修>

各回のテーマの基本的文献の事前学習として1時間必要
である。

<提出課題など>

随時、課題を提供する。課題に対してコメントを付し、
返却する。

<成績評価方法・基準>

各テーマに関する討議内容の総合評価

<授業計画>

第1回 障害者福祉の基本理念

ノーマライゼーションの意味と実際を学ぶ。

第2回 障害者福祉の基本理念

自立生活の理念の実際を学ぶ。

第3回 障害者を取り巻く社会問題

現代社会において起こっている障害者を取り巻く問題に
ついて議論する。

第4回 身体障害者の在宅生活

身体障害者の在宅生活の様子を、障害当事者や支援者か
ら話を聞いて理解する。

第5回 知的障害者の在宅生活

知的障害者の在宅生活の様子を、障害当事者や支援者か
ら話を聞いて理解する。

第6回 精神障害者の在宅生活

精神障害者の在宅生活の様子を、障害当事者や支援者か
ら話を聞いて理解する。

第7回 障害者の生活を支える環境

在宅生活を送る障害者の環境(住宅、街、交通など)の
実態と問題点を把握する。

第8回 全体を通じた議論

これまでの議論を通して、自身の考えを伝え、履修生同
士で議論する。

2022年度 前期

2.0単位

神経・運動機能リハビリテーション学特別研究

岩井 信彦

<授業の方法>

オンライン授業

神経・運動機能リハビリテーションに関連した研究課題
について、修士課程に相応しい水準の論文作成を指導す
る。特に機能障害レベルの診断や日常生活動作の評価、
参加レベルの評価に関連した内容を指導する。

特別研究 では、計測したデータの解析を中心に指導す
る。

<授業の目的>

神経・運動機能リハビリテーションに関連した研究課題
について、修士課程に相応しい水準の論文作成を指導す
る。とくに、循環器疾患、脳血管障害、スポーツ医学、
姿勢調節、神経系疾患、小児運動器疾患、廃用症候群、
褥瘡などの診断学・評価学に関係した内容を理解する。

<到達目標>

医療・福祉に関わる分野の高度専門職業人として活躍で
きるよう、日常生活活動の評価をはじめとしたリハビリ
テーション領域の評価指標について課題を設定し、研究
を行う。

<授業の進め方>

研究テーマに関する文献の探索や読み込みを演習形式(
オンライン、メール等)で行う。

<履修するにあたって>

(受講生に対する希望等) 修士論文の提出期限の厳守

と進行状況の報告と確認および申請書類の期限厳守

< 授業時間外に必要な学修 >

予復習60分間

< 提出課題など >

必要に応じ大学院生が検索し、同時に指導教員が紹介する。

< 成績評価方法・基準 >

修士課程に相応しい水準の研究課題と論文の仕上がりを評価する。

< テキスト >

その都度、紹介する。

< 授業計画 >

第1回 研究計画

特別研究 = 研究テーマを決め、方法、分析の対象の特定、タイムスケジュール等を決める。1年目前半。

第2回 研究計画書の作成

特別研究 = 研究計画に沿って、研究計画書を作成する。倫理委員会に提出する。1年目後半。

第3回 データの収集、類似研究、先行研究の探索

特別研究 = 研究計画に沿って、データを収集する。先行研究や類似研究に関する文献を読み、研究テーマに関連した研究がどこまで分かっているか、何が明らかにされていないのかを知る。2年目前半。この時期に今までの進捗状況の確認も含め、研究中間報告を行う。

第4回 論文の執筆

特別研究 = 収集したデータの結果をまとめる。修士論文の執筆を始める。担当教員のアドバイスを受けながら、修正を重ねていく。2年目後半。

2022年度 後期

2.0単位

神経・運動機能リハビリテーション学特別研究

岩井 信彦

< 授業の方法 >

「講義」「演習」 対面授業と遠隔授業を適宜判断し行う。

神経・運動機能リハビリテーションに関連した研究課題について、修士課程に相応しい水準の論文作成を指導する。特に機能障害レベルの診断や日常生活動作の評価、参加レベルの評価に関連した内容を指導する。

特別研究 では収集したデータの結果をまとめる。修士論文の執筆を始める。担当教員のアドバイスを受けながら、修正を重ねていく。2年目後半。

< 授業の目的 >

本科目は、DPの1 高度な職業人、教育・研究者を目指す人。(関心・意欲)、2 本研究科の理念・目的に沿って自ら学修・論考を進めることのできる人。(思考・判断・表現)に則ったものである。神経・運動機能リハビリテーションに関連した研究課題について、修士課程に相

応しい水準の論文作成を指導する。とくに、循環器疾患、脳血管障害、スポーツ医学、姿勢調節、神経系疾患、小児運動器疾患、廃用症候群、褥瘡などの診断学・評価学に関連した内容を理解する。

< 到達目標 >

医療・福祉に関わる分野の高度専門職業人として活躍できる。日常生活活動の評価をはじめとしたりハビリテーション領域の評価指標について課題を設定し、研究を行うことが出来る。

< 授業の進め方 >

研究テーマに関する文献の探索や読み込みを演習形式(オンライン、メール等)で行う。

< 履修するにあたって >

(受講生に対する希望等) 修士論文の提出期限の厳守と進行状況の報告と確認および申請書類の期限厳守

< 授業時間外に必要な学修 >

予復習60分間

< 提出課題など >

大学院生の問題意識に沿って、指導教員が課題(レポート等)を指示する。

< 成績評価方法・基準 >

修士課程に相応しい水準の研究課題の達成度(70%)と論文の仕上がり(30%)を評価する。

< テキスト >

その都度、紹介する。

< 授業計画 >

第1回 研究計画

特別研究 = 研究テーマを決め、方法、分析の対象の特定、タイムスケジュール等を決める。1年目前半。

第2回 研究計画書の作成

特別研究 = 研究計画に沿って、研究計画書を作成する。倫理委員会に提出する。1年目後半。

第3回 データの収集、類似研究、先行研究の探索

特別研究 = 研究計画に沿って、データを収集する。先行研究や類似研究に関する文献を読み、研究テーマに関連した研究がどこまで分かっているか、何が明らかにされていないのかを知る。2年目前半。この時期に今までの進捗状況の確認も含め、研究中間報告を行う。

第4回 論文の執筆

特別研究 = 収集したデータの結果をまとめる。修士論文の執筆を始める。担当教員のアドバイスを受けながら、修正を重ねていく。2年目後半。

2022年度 前期

1.0単位

身体機能・運動解析学特論A

村尾 浩、岩井 信彦、森本 陽介

< 授業の方法 >

講義、演習、オンライン授業もしくはオンデマンド配信

< 授業の目的 >

< 主題 > リハビリテーションの理念自体も歴史の流れと社会的要請の変化によって変革してきている。WHOによる国際障害分類 (ICIDH) から国際生活機能分類 (ICF) への改訂により、リハビリテーションの理念が見直されたといえる。しかし、その理念をそれぞれのフィールドにおいて各専門職種が医療的リハビリテーションとしていかに実践出来るかが課題となる。ここでは、主に身体機能・運動機能障害のある対象者に対して、それぞれの専門分野でいかに対応をすべきかについて、現状と課題・展望の概要を学修する。

身体機能・運動機能障害のリハビリテーションの現状と展望について理解することを目的とする。

この科目は、研究科修士課程DP1に掲げる知識を修得することを目指している。

< 到達目標 >

身体機能・運動機能の解析学の現状と展望の概要を説明できる。

< 授業のキーワード >

身体機能・運動機能

< 授業の進め方 >

各教員の専門分野における現状、課題および展望について、講義および対話形式で授業を行う。担当教員はどれも医療機関等での医療、理学療法の実務経験があり、臨床で遭遇する様々な病態や障害像の紹介も含めて進める。

< 履修するにあたって >

授業での議論を期待します。

< 授業時間外に必要な学修 >

講読する論文等を配布する場合があります、その内容について予習が必要となる。

事前に配布された論文、資料等の該当部分を読んでから授業に臨むこと (60分程度)。

授業後は、授業の内容を整理し、他の科目との関連も含めて整理しておくこと (60分程度)。

< 成績評価方法・基準 >

100%レポート課題。

< 授業計画 >

第1回 運動器障害

上肢の障害について理解する。(担当: 村尾 浩)

第2回 運動器障害

上肢の障害について理解する。(担当: 村尾 浩)

第3回 運動器障害

体幹の障害について理解する。(担当: 村尾 浩)

第4回 身体機能、生活機能評価学

身体機能評価、生活機能評価の現状について講義する。

(担当: 岩井信彦)

第5回 身体機能、生活機能評価学

身体機能評価、生活機能評価の課題について講義する。

(担当: 岩井信彦)

第6回 身体機能、生活機能評価学

身体機能評価、生活機能評価の展望について講義する。

(担当: 岩井信彦)

第7回 内部障害

呼吸器リハビリテーションの現状と課題について講義する。(担当: 森本陽介)

第8回 内部障害

循環器リハビリテーションの現状と課題について講義する。(担当: 森本陽介)

2022年度 前期

1.0単位

身体機能・運動解析学特論B

西尾 久英、加藤 雅子、南 哲

< 授業の方法 >

現時点で、対面授業を考えている。しかし、dotCampusを利用したオンデマンド授業、遠隔授業(リアルタイム授業)の可能性も残っている。

担当教員のメールアドレスは、nishio@reha.kobegakuin.ac.jpである。

< 授業の目的 >

カリキュラム・ポリシー 1、2、3 またディプロマ・ポリシー 1 に基づき、身体機能・運動解析に関する知識を習得することを目指す。特論Bは「小児の発達」を取り扱う。人間は生涯発達し続ける存在であるが、小児期の発達は、他の時期の発達とは比較できないくらいダイナミックだ。そのうえ、何らかの要因で小児期の発達が阻害されると、その後の人生を変えてしまうことがある。特論Bでは、学生が(1)小児の発達過程と、それに応じた日常生活の活動を学び、(2)種々の小児疾患の特性、治療原則を理解し、(3)家庭あるいは地域社会が小児の健康に与える影響を十分に理解することを目的とする。

なお、特論Bを担当する3人の講師は、いずれも、発達支援の現場に立つ医師であり、作業療法士であり、理学療法士である。それぞれが、自らの専門領域を中心に、基礎知識から臨床応用までを講義する予定である。

< 到達目標 >

(1) 通常の小児の発達過程を説明できる。(2) 種々の疾患について、その特性や治療原則を説明できる。(3) 支援が必要な児について、その児の状況を評価し、支援計画を立てることができる。

< 授業のキーワード >

(1) 運動発達 (2) 脳性麻痺 (3) 筋ジストロフィー症 (4) 脊髄性筋萎縮症

< 授業の進め方 >

教員は、dotCampusに資料と課題を掲示する。

学生は、資料を用いて学習を進め、課題に対してレポー

トを提出することになる。

学生は、疑問点や感想、意見を、dotCampusにアップロードする。

<履修するにあたって>

特別な履修要件はない。

<授業時間外に必要な学修>

授業の前に、シラバスの授業計画に目を通しておくこと。

そして、各回の授業講義で学習した内容について、約1時間程度の復習を行うこと。

<提出課題など>

各教員が1つずつ課題を出し(合計3つの課題となる)、学生にレポート提出を求める。

学生はレポートをdotCampusにアップロードする。

なお、課題に対するフィードバックはdotCampusを通して行う。

<成績評価方法・基準>

3回の課題レポートの成績と、授業に対する積極性(質問、感想、意見の回数)で評価する。評価結果は100点満点で採点するものとし、合計点で60点以上あれば合格とする。

<テキスト>

なし。

<参考図書>

授業中に、指定図書を挙げることもある。

<授業計画>

第1回 小児の成長・発達(1)

担当教員 西尾

小児の体重と身長の変化、思春期について説明し、議論できるようにする。

第2回 小児の成長・発達(2)

担当教員 西尾

ピアジェ、エリクソンの発達理論について説明し、議論できるようにする。

第3回 疾患論(1)

担当教員 西尾

脊髄性筋萎縮症の治療について説明し、議論できるようにする。

第4回 小児の成長・発達(3)

担当教員 加藤

運動マイルストーンからみた定型発達を説明し、議論できるようにする。

第5回 小児の成長・発達(4)

担当教員 加藤

原始反射、姿勢反射、立ち直り反射について説明し、議論できるようにする。

第6回 疾患論(2)

担当教員 加藤

作業療法の立場から脳性麻痺を理解し、議論できるようにする。

第7回 疾患論(3)

担当教員 南

理学療法の立場から脳性麻痺を理解し、議論できるようにする。

第8回 疾患論(4)

担当教員 南

筋ジストロフィー症の治療について説明し、議論できるようにする。

2022年度 前期

1.0単位

生活・環境支援学特論A

備酒 伸彦、塚原 正志

<授業の方法>

遠隔オンデマンドで講義する。

<授業の目的>

主題：身体障害者及び高齢者のリハビリテーションを機能障害の軽減と能力補完の側面から行う支援技術を理解できるようにする。また、生活支援を行うための制度や規格などについても理解できるようにする。(知識・技能)

目標：福祉用具の選択技術、使用環境の把握方法、使用方法、用具の調整技術、制度、規格などを実例を参考に理解する。理学療法や作業療法における日常生活技術に加えて、総合的な援助方法に関して疾患、障害ごとに理解できるようにする。(知識・技能・意欲・態度)

なお、この講義は、兵庫県但馬長寿の郷で高齢者ケアを実践してきた実務経験のある教員である理学療法士と、兵庫県立リハビリテーションセンターで幅広く臨床に携わった実務家教員である作業療法士が担当する。

本研究科が養成しようとする研究者像にとって必要な、「生活・環境支援に関する概念」を知ることにより、有為な研究者としての発想と態度を獲得する。これはDPにおける「チーム医療や総合的福祉、地域社会開発の担い手となることができる」を担保する一つとなる。

<到達目標>

心身機能、住環境などの観点から生活支援の現状を理解すると共に、受講生の経験と照らし合わせて、各自の分野でのあるべき姿を考えることができるようになる

<授業の進め方>

オムニバスによる各講師の講義、パワーポイント、ビデオ、実物などによる解説や実習などによって理解する

<授業時間外に必要な学修>

各回の講義で実施される内容について、予習と復習行うこと(各60分程度)。

<提出課題など>

講義ごとにテーマを設定しにレポートを課す。

レポートの内容については電子メールによりフィードバックを行う。この際、学生からの質問などについては随

時受け付ける。

<成績評価方法・基準>

平常点50%、レポート50%で評価する

<テキスト>

テキストは使用しない。授業時に担当教員が紹介する。

<授業計画>

第1回 障害のある高齢者に必要なケアサービス論について

担当：塚原正志

第2回 障害のある高齢者に必要なケアサービス論について

担当：塚原正志

第3回 障害のある高齢者に必要なケアサービス論について

担当：塚原正志

第4回 障害のある高齢者に必要なケアサービス論について

担当：塚原正志

第5回 障害者、高齢者の生活支援と環境整備について

担当：備酒伸彦

第6回 障害者、高齢者の生活支援と環境整備について

担当：備酒伸彦

第7回 障害者、高齢者の生活支援と環境整備について

担当：備酒伸彦

第8回 障害者、高齢者の生活支援と環境整備について

担当：備酒伸彦

2022年度 前期

1.0単位

生活・環境支援学特論B

古田 恒輔、大庭 潤平、小嶋 功

<授業の方法>

新カリキュラム オムニバス講義 2020以降入学者対応
オムニバスによる講義

研究者の今までの研究内容と今後の課題について講義する。

<授業の目的>

生活や環境変化を支援材料に、高齢者、障害者の支援技術について、治療技術以外のアプローチの重要性に関して講義する。また、受講者の研究内容との関連性を図りながら、この分野の教員が支援できることに関して議論し、それぞれの論文作成手法や研究者としての資質を高めることを目標とする。

<到達目標>

支援技術の理解と、受講者の研究内容との対比ができること。

<授業の進め方>

受講者の要望には添うが、授業日程の変更はオムニバス故困難である。

受講者には、授業参加日程の調整をお願いする。

開講日程は、6/4~7/30までの金曜日8回

講義時間は19:00~20:30

6/3, 6/10, 6/17日(古田)

6/24, 7/1, 7/8日(小嶋)

7/15, 7/22日(大庭)の予定である。

<履修するにあたって>

受講希望者は、3教員に連絡の上受講を行うこと。

<授業時間外に必要な学修>

授業前後に60分程度必要

<成績評価方法・基準>

受講者の研究内容に関する発表や支援技術との比較レポートを持って評価とする。

<授業計画>

第1回 福祉用具選定の考え方

福祉用具による生活支援の考え方に関する講義と支援手法に関する検討(古田)

第2回 具体的な生活支援用具の利用

対面形式で実習を考えている。ベッドの特性に関する比較検討(古田)

第3回 具体的な福祉用具の特性について

対面形式での実習を考えている。車椅子の適合と特性変更の効果について(古田)

第4回 義肢装具使用者の生活実態とトピックス

QOLと最新の義肢装具(小嶋)

第5回 エビデンスに基づく理学療法

評価(小嶋)

第6回 エビデンスに基づく理学療法

理学療法(小嶋)

第7回 義手に関する最新研究

義手に関するトピックスについて(大庭)

第8回 義手に関する最新研究

論文を通じて研究内容を吟味する(大庭)

2022年度 後期

1.0単位

生活困窮予防学特論

西垣 千春、KHAN MD MEHEDI HASAN

<授業の方法>

各回のテーマに沿って、前半は講義を行い、後半は配布する資料や新聞記事、生活困窮者の支援事例を読み、意見を交換しながら、生活困窮原因とその予防への視点を広げていく。

対面授業を行う予定であるが、履修者と相談しながら方法を決定する。

<授業の目的>

現在、社会の中で生活困窮に直面する人は少なくない。病気やケガ、家族の問題、倒産による解雇、詐欺など、

その理由も様々である。困った人に会い、支援を行うということは、同じように困る人を増やさない、生み出さない支援の開発につながなければならない。

この授業では、生活困窮に直面している人々の実情を知り、困窮に至る要因とプロセスについて考える機会を提供し、どうすれば防ぐことができるかについて、考えをまとめられる力をつけることが目的である。(DP1, 2, 3)

<到達目標>

- 1 生活困窮にいたる要因を見いだせる
- 2 生活困窮を防ぐための方法を考えだせる
- 3 社会問題への視野を広め、人々の生活にどのような影響があるか常に考える習慣を身につける

<授業のキーワード>

生活 困窮 原因 予防

<授業の進め方>

各回のテーマに沿って、前半は講義を行い、後半には新聞記事や生活困窮支援の実例を通して、生活困窮に至る要因と支援介入のポイントを把握する。さらには、さらには生活困窮に至らずにすむ方法はなかったかについて議論を通して考える。

最終回は、自らが生活困窮の実例を通して、その要因と予防方法について考えたことを発表する。

<履修するにあたって>

現在、様々な理由から生活困窮に陥る人がいる。その実情を学ぶためには、社会での様々な出来事に敏感になってもらいたい。ニュースに積極的に触れる時間をふやしてもらいたい。

<授業時間外に必要な学修>

社会問題への関心を高めてもらうことが前提となるため、ニュースに触れる時間を毎日1時間程度は確保してもらいたい。さらに、各回のテーマについて自らさらに情報を集めて理解を深めてもらうことを期待する。

<成績評価方法・基準>

毎回の積極的な参加を前提に、最終回の発表の内容(作成資料とプレゼンテーション)を評価の対象とする。毎回の文献の読み込み状況、発言など、授業への取り組み姿勢 50%、最終プレゼンテーション 50% で評価を行う。

<授業計画>

第1回 オリエンテーション

生活困窮とは

授業をどのように進めていくかについて理解する。

生活困窮は、貧困とは同義ではなく、どのような状態を困窮ととらえるかについて考える。

第2回 生活困窮の実情

生活困窮支援の取り組みから見える生活困窮に陥った人々の生活実態、困窮原因について学ぶ。

第3回 生活困窮と家族

困窮にある個人に目を向けるだけでなく、その人がおか

れている環境にも視野を広げることにより、解決への糸口は広がる。人が生活する上での最も近いつながりの家族にかかわる原因を知る。

第4回 生活困窮と働き方

働けなくなることにより、生計を維持できなくなり困窮に陥ることは多い。働き方との関係について知る。

第5回 生活困窮と病気

(生活習慣病)

健康を害することにより、日常の生活が回らなくなる。特に生活習慣が病を進行させ、困窮を引き起こす場合が増えている。その実情を知る。

第6回 生活困窮と病気

(精神疾患)

精神疾患は周りの理解を含め、対策は十分に進んでいるとは言えず、疾患に気づかないまま、生活が成り立たなくなる場合は多い。その実情について知る。

第7回 支援策の実情と課題

福祉施策による支援は行われながらも、どこにもつながらずに、あるいはつながっていても生活困窮に至る人は少なくない。支援の現状を知り、課題を考える。

第8回 生活困窮予防への視点

授業を通して、自らが関心を深めた分野について調べ、生活困窮の原因と予防方法について発表を行う。

2022年度 後期

1.0単位

精神障害者支援特論

阪田 憲二郎

<授業の方法>

講義

<授業の目的>

本科目は総合リハビリテーション学研究科のDPに掲げる、人と社会を見据える広く深い学識を備え、教育・研究・高度な専門職を担うための知識と技能を身につけることを目指す。

専門科目である「総合福祉実践特論演習」「総合福祉実践特別研究」への関連科目として位置づけられる。

精神障害者は障害特性のために医療と福祉にまたがる支援を必要としている。そのため支援者は精神医療、精神保健福祉における幅広い知識となる。そこで本講義の目的は、ソーシャルワークの視点からひきこもりにおける支援を説明できるようになることである。

<到達目標>

1. 我が国のひきこもりの定義を説明することができる。
2. 支援者が果たすべき役割を説明することができる。
3. ひきこもりの家族しえんについて説明することができる。

<授業のキーワード>

ひきこもり、家族支援、8050問題

< 授業の進め方 >

講義と課題の発表とディスカッションにより進める。

< 履修するにあたって >

厚生労働省にひきこもりガイドラインの概要を理解しておくこと。

< 授業時間外に必要な学修 >

担当教員の指示に従い、指定した文献を読みレポートにまとめるなどの課題が課せられる。課題の達成に3時間程度の学習が必要である。

< 提出課題など >

課題レポートを課すが、その評価については授業中にコメントを行う

< 成績評価方法・基準 >

授業への取り組みの姿勢50%、課題レポートの内容50%により総合的に評価する。レポート課題の講評は授業中に行う。グループディスカッションを行うので学生の主体的な参加が求められる。

< テキスト >

必要に応じて授業中に紹介、あるいは資料を配布する

< 授業計画 >

第1回 ひきこもりの定義

厚生労働省の定義などからひきこもりの定義を検討する。

第2回 ひきこもりの社会からの捉え方の変遷

ひきこもりが社会からどのような捉え方をされてきたのかを心理学や精神医学の立場から概観する

第3回 ひきこもりの支援機関

行政の支援機関を概観しながら民間の支援について言及する。

第4回 ひきこもりの家族支援

家族支援の実際を概観し家族支援の必要性を考える。

第5回 ひきこもりの家族支援

家族のインタビュー調査の結果から家族が抱える問題を理解する。

第6回 ひきこもりと8050問題

社会問題となっている8050問題とひきこもりの関連を検討する。

第7回 ひきこもりの居場所支援

主に民間が行っているひきこもりの居場所支援について考える。

第8回 ひきこもりとソーシャルワーク

ひきこもりとソーシャルワークの関係を検討する。

2022年度 前期

2.0単位

総合福祉実習

宮崎 清恵、糟谷 佐紀、川本 健太郎、小坂 享子、
阪田 憲二郎、佐野 光彦、九十九 綾子、西垣 千春、
橋本 力、水上 然、脇田 吉隆

< 授業の方法 >

様々な広義の福祉現場において「実習」を実施する。

< 授業の目的 >

本科目はDP1とDP2を目指している。地域における様々な福祉現場において実習を行い、ミクロ・メゾ・マクロの支援対象を理解することを目指すとともに、課題を含めてその実際を主体的に学習する。

なお、本科目の担当教員は、福祉現場や地域活動において実践経験のある教員が担当する。

< 到達目標 >

問題意識を明確にするために必要となる専門知識や情報を的確に習得できる。

②実習現場において、的確に情報収集を行い、アセスメントを的確に行い、実践できる。

< 授業のキーワード >

問題意識、情報収集、アセスメント、ミクロ・メゾ・マクロ横断的な視野

< 授業の進め方 >

学生と十分話し合い、その二ードと課題をつかみ、事前準備、実習、事後指導の流れで行う。

< 授業時間外に必要な学修 >

実習先の状況調べや環境調べに5時間程度の学修が必要である。

実習中は、毎日の実習日誌の記載と振り返りに、2時間程度の時間が必要である。

事後学習では、振り返りレポートの作成に3時間程度の学修が必要である。

< 提出課題など >

実習計画書、実習個人票、実習日誌、事後の実習総括レポートの提出が課せられる。

< 成績評価方法・基準 >

提出物、授業中の発表内容、実習先の評価などから総合的に評価する。

< 授業計画 >

第1回 事前学習

実習先の理念、機能、地域における役割等を学習する。

第2回 事前学習②

実習先で実習生の学びのために必要な知識を確認し学習する。

第3回 事前学習

実習先で実習生の学びのために必要な知識を確認し学習する。

第4回 事前学習
個人票の作成を行う。

第5回 事前学習
計画書の作成を行う。

第6回 事前学習
事前訪問に行き実習先と実習内容のすり合わせを行う。

第7回 事前学習
事前訪問の振り返りを行う実習計画書の練り直しを行う。

第8回 実習
実習先での実習を行う。

第9回 実習②
実習先での実習を行う。

第10回 実習
実習先での実習を行う。

第11回 実習
実習先での実習を行う。

第12回 実習
実習先での実習を行う。

第13回 実習
実習先での実習を行う。

第14回 実習
実習先での実習を行う。

第15回 実習
実習先での実習を行う。

第16回 実習
実習先での実習を行う。

第17回 実習
実習先での実習を行う。

第18回 実習
実習先での実習を行う。

第19回 実習
実習先での実習を行う。

第20回 実習
実習先での実習を行う。

第21回 実習
実習先での実習を行う。

第22回 実習
実習先での実習を行う。

第23回 実習
実習先での実習を行う。

第24回 実習
実習先での実習を行う。

第25回 実習
実習先での実習を行う。

第26回 実習
実習先での実習を行う。

第27回 実習
実習先での実習を行う。

第28回 事後指導
実習ふりかえりレポートを作成し前半の実習を振り返る。

第29回 事後指導②
実習ふりかえりレポートを作成し後半の実習を振り返る。

第30回 事後指導
実習を総合的に振り返り、自己評価と実習指導者の評価を突き合わせて自身の今後の課題を明確化する。

2022年度 後期

2.0単位

総合福祉実習

宮崎 清恵、糟谷 佐紀、川本 健太郎、小坂 享子、
阪田 憲二郎、佐野 光彦、九十九 綾子、西垣 千春、
橋本 力、水上 然、脇田 吉隆

<授業の方法>

様々な広義の福祉現場において「実習」を実施する。

<授業の目的>

本科目はDP1とDP2を目指している。地域における様々な福祉現場において実習を行い、ミクロ・メゾ・マクロの支援対象を理解することを目指すとともに、課題を含めてその実際を主体的に学習する。

なお、本科目の担当教員は、福祉現場や地域活動において実践経験のある教員が担当する。

<到達目標>

問題意識を明確にするために必要となる専門知識や情報的確に習得できる。

②実習現場において、的確に情報収集を行い、アセスメントを的確に行い、実践できる。

<授業のキーワード>

問題意識、情報収集、アセスメント、ミクロ・メゾ・マクロ横断的な視野

<授業の進め方>

学生と十分話し合い、そのニードと課題をつかみ、事前準備、実習、事後指導の流れで行う。

<授業時間外に必要な学修>

実習先の状況調べや環境調べに5時間程度の学修が必要である。

実習中は、毎日の実習日誌の記載と振り返りに、2時間程度の時間が必要である。

事後学習では、振り返りレポートの作成に3時間程度の学修が必要である。

<提出課題など>

実習計画書、実習個人票、実習日誌、事後の実習総括レポートの提出が課せられる。

<成績評価方法・基準>

提出物、授業中の発表内容、実習先の評価などから総合的に評価する。

<授業計画>

第1回 事前学習

実習先の理念、機能、地域における役割等を学習する。

第2回 事前学習②

実習先で実習生の学びのために必要な知識を確認し学習する。

第3回 事前学習

実習先で実習生の学びのために必要な知識を確認し学習する。

第4回 事前学習

個人票の作成を行う。

第5回 事前学習

計画書の作成を行う。

第6回 事前学習

事前訪問に行き実習先と実習内容のすり合わせを行う。

第7回 事前学習

事前訪問の振り返りを行う実習計画書の練り直しを行う。

第8回 実習

実習先での実習を行う。

第9回 実習②

実習先での実習を行う。

第10回 実習

実習先での実習を行う。

第11回 実習

実習先での実習を行う。

第12回 実習

実習先での実習を行う。

第13回 実習

実習先での実習を行う。

第14回 実習

実習先での実習を行う。

第15回 実習

実習先での実習を行う。

第16回 実習

実習先での実習を行う。

第17回 実習

実習先での実習を行う。

第18回 実習

実習先での実習を行う。

第19回 実習

実習先での実習を行う。

第20回 実習

実習先での実習を行う。

第21回 実習

実習先での実習を行う。

第22回 実習

実習先での実習を行う。

第23回 実習

実習先での実習を行う。

第24回 実習

実習先での実習を行う。

第25回 実習

実習先での実習を行う。

第26回 実習

実習先での実習を行う。

第27回 実習

実習先での実習を行う。

第28回 事後指導

実習ふりかえりレポートを作成し前半の実習を振り返る。

第29回 事後指導②

実習ふりかえりレポートを作成し後半の実習を振り返る。

第30回 事後指導

実習を総合的に振り返り、自己評価と実習指導者の評価を突き合わせて自身の今後の課題を明確化する。

2022年度 前期

2.0単位

総合福祉実践特別研究

川本 健太郎

<授業の方法>

講義・演習（対面またはオンライン授業）

<授業の目的>

リハビリテーション分野を中心に医療・保健・福祉に関する研究・論文について理解し、研究方法の習得を目指す。

DP1：人と社会を見据える広く深い学識を備え、教育・研究・職を担うための知識や技能を身につけている。（知識・技能）

DP2：1で示した学識をもとに、自ら課題を発見し、その解決方法を見出すことができる。（思考・判断・表現）

DP3：1と2を実現するための基礎的能力として、先行研究や文献を広く学び、その上で考察を進めるという研究方法を身につけている。（思考・判断・表現）

<到達目標>

研究テーマを検討し、研究デザインを作成する

<授業のキーワード>

研究

<授業の進め方>

興味関心のある論文を講読しながら議論する

<授業時間外に必要な学修>

研究テーマに関する論文等を読む（90分）

<成績評価方法・基準>

研究への取り組みと課題遂行を100%で判断する

<授業計画>

第1 - 15回 研究について

究論文を講読し、自身の研究テーマをみつける。また研究デザインについて議論する

2022年度 前期

2.0単位

総合福祉実践特別研究

佐野 光彦

< 授業の方法 >

講義・演習（対面またはオンライン授業）

< 授業の目的 >

リハビリテーション分野を中心に医療・保健・福祉に関する研究・論文について理解し、研究方法の習得を目指す。

DP1：人と社会を見据える広く深い学識を備え、教育・研究・職を担うための知識や技能を身につけている。（知識・技能）

DP2：1で示した学識をもとに、自ら課題を発見し、その解決方法を見出すことができる。（思考・判断・表現）

DP3：1と2を実現するための基礎的能力として、先行研究や文献を広く学び、その上で考察を進めるといった研究方法を身につけている。（思考・判断・表現）

< 到達目標 >

研究テーマを検討し、研究デザインを作成する

< 授業のキーワード >

研究

< 授業の進め方 >

興味関心のある論文を講読しながら議論する

< 授業時間外に必要な学修 >

研究テーマに関する論文等を読む（90分）

< 成績評価方法・基準 >

研究への取り組みと課題遂行を100%で判断する

< 授業計画 >

第1回～15回 研究について

研究論文を講読し、自身の研究テーマをみつける。また研究デザインについて議論する

2022年度 後期

2.0単位

総合福祉実践特別研究

川本 健太郎

< 授業の方法 >

この授業は、演習授業である。教員と学生が双方向に議論を行いながら進める。修士論文の完成を目指す。

授業の詳細は相談して決定する。

< 授業の目的 >

この授業では、これまで進めてきた研究の意義を再確認し、それが伝わる論文を仕上げることを目的とする。（DP1、2、3,4）社会リハビリテーション学修士にふさわ

しい内容、つまり、人々の抱える生活課題の解決に貢献するものであり、倫理的にも優れており、今後の研究の発展にもつながるものであることが求められる

< 到達目標 >

到達目標

1 これまで行われてきた関連研究と自らの研究の差異を説明できる。

2 適切な研究分析を行い、研究結果の表現ができる。

3 自らの研究について説明できる。

4 論文をまとめることができる

< 授業の進め方 >

論文完成に向けて、執筆ポイントの確認を行いながら、進捗管理を行う。可能な限り早い段階で書き上げ、より完成度の高いものにしていく。

授業中の議論を踏まえ、翌週には書き進めたものについても発表、改善点の確認を行っていく。

< 履修するにあたって >

研究に関する自身の課題と目標を明確にすることを心がける

< 授業時間外に必要な学修 >

研究テーマに関する論文等を読む（90分程度）

< 成績評価方法・基準 >

研究への取り組みと課題遂行を100%で判断する

< 授業計画 >

第1-15回 研究について

関連研究論文を講読し、自身の研究テーマに活かす。また研究デザインについて議論する

2022年度 後期

2.0単位

総合福祉実践特別研究

佐野 光彦

< 授業の方法 >

この授業は、演習授業である。教員と学生が双方向に議論を行いながら進める。修士論文の完成を目指す。

授業の詳細は相談して決定する。

< 授業の目的 >

この授業では、これまで進めてきた研究の意義を再確認し、それが伝わる論文を仕上げることを目的とする。（DP1、2、3,4）社会リハビリテーション学修士にふさわしい内容、つまり、人々の抱える生活課題の解決に貢献するものであり、倫理的にも優れており、今後の研究の発展にもつながるものであることが求められる

< 到達目標 >

到達目標

1 これまで行われてきた関連研究と自らの研究の差異を説明できる。

2 適切な研究分析を行い、研究結果の表現ができる。

3 自らの研究について説明できる。

4 論文をまとめることができる

< 授業の進め方 >

論文完成に向けて、執筆ポイントの確認を行いながら、進捗管理を行う。可能な限り早い段階で書き上げ、より完成度の高いものにしていく。

授業中の議論を踏まえ、翌週には書き進めたものについても発表、改善点の確認を行っていく。

< 履修するにあたって >

研究に関する自身の課題と目標を明確にすることを心がける

< 授業時間外に必要な学修 >

研究テーマに関する論文等を読む (90分程度)

< 成績評価方法・基準 >

研究への取り組みと課題遂行を100%で判断する

< 授業計画 >

第1回～15回 研究について

関連研究論文を講読し、自身の研究テーマに活かす。また研究デザインについて議論する

2022年度 前期

3.0単位

総合福祉実践特別研究

西垣 千春

< 授業の方法 >

この授業は、演習授業である。教員と学生が双方向に議論を行いながら進める。修士論文のより高い質の完成を目指す。

授業の詳細は相談して決定する。

< 授業の目的 >

この授業では、これまで得た知見を活かし、論文を仕上げることを目的とする。社会リハビリテーション学修士にふさわしい内容、つまり、人々の抱える生活課題の解決に貢献するものであり、倫理的にも優れており、今後の研究の発展にもつながるものであることが求められる。(DPすべての総括として位置づけ)

< 到達目標 >

- 1 これまで行われてきた関連研究と自らの研究の差異を説明できる。
- 2 適切な研究分析を行い、研究結果の表現ができる。
- 3 自らの研究について説明できる。
- 4 論文をまとめることができる。

< 授業のキーワード >

研究の意義 社会リハビリテーション

< 授業の進め方 >

これまでに得た知見をどのように研究成果としてまとめあげるかを意識して、毎回の議論を展開し、論文の完成度をたかめていく。

特別演習 では議論、特別研究 では文章のまとめ方を中心に授業運営を行う。

< 授業時間外に必要な学修 >

執筆した修士論文を毎回のテーマごとに読み返して授業に臨んでもらいたい。授業の冒頭にどこをブラッシュアップしたいかを提示する。

進捗状況によるが、目安としては週に3～5時間程度確保してもらいたい。

< 提出課題など >

必要に応じて指示する。

< 成績評価方法・基準 >

毎回の授業に臨む際の準備状況(30%)、参加態度(30%)、最終発表(40%)

により評価を行う。

< 授業計画 >

第1回 オリエンテーション

特別演習 では議論、特別研究 では文章のまとめ方を中心として行うことを確認。

第2回 修士論文の検証

研究目的の検証を行う。

第3回 修士論文の検証

同上

第4回 修士論文の検証

研究背景の検証を行う。

第5回 修士論文の検証

研究方法の検証を行う。

第6回 修士論文の検証

同上

第7回 修士論文の検証

研究成果の検証を行う。

第8回 修士論文の検証

同上

第9回 修士論文の検証

考察の検証を行う。

第10回 修士論文の検証

全体の体裁等の検証を行う。

第11回 論文発表準備

論文発表会に向けてパワーポイント、および抄録の準備を行う。

第12回 論文発表準備

同上

第13回 論文発表準備

発表予行をし、準備を完成させる。

第14回 論文発表準備

Q&Aに備えて準備を行う。

第15回 論文発表準備

同上

2022年度 後期

3.0単位

総合福祉実践特別研究

西垣 千春

< 授業の方法 >

この授業は、演習授業である。教員と学生が双方向に議論を行いながら進める。修士論文のより高い質の完成を目指す。

授業の詳細は相談して決定する。

< 授業の目的 >

この授業では、これまで得た知見を活かし、論文を仕上げることを目的とする。社会リハビリテーション学修士にふさわしい内容、つまり、人々の抱える生活課題の解決に貢献するものであり、倫理的にも優れており、今後の研究の発展にもつながるものであることが求められる。(DPすべての総括として位置づけ)

< 到達目標 >

1 これまで行われてきた関連研究と自らの研究の差異を説明できる。

2 適切な研究分析を行い、研究結果の表現ができる。

3 自らの研究について説明できる。

4 論文をまとめることができる。

< 授業のキーワード >

研究の意義 社会リハビリテーション

< 授業の進め方 >

これまでに得た知見をどのように研究成果としてまとめあげるかを意識して、毎回の議論を展開し、論文の完成度をたかめていく。

特別演習 では議論、特別研究 では文章のまとめ方を中心に授業運営を行う。

< 授業時間外に必要な学修 >

執筆した修士論文を毎回のテーマごとに読み返して授業に臨んでもらいたい。授業の冒頭にどこをブラッシュアップしたいかを提示する。

進捗状況によるが、目安としては週に3~5時間程度確保してもらいたい。

< 提出課題など >

必要に応じて指示する。

< 成績評価方法・基準 >

毎回の授業に臨む際の準備状況(30%)、参加態度(30%)、最終発表(40%)

により評価を行う。

< 授業計画 >

第1回 オリエンテーション

特別演習 では議論、特別研究 では文章のまとめ方を中心として行うことを確認。

第2回 修士論文の検証

研究目的の検証を行う。

第3回 修士論文の検証

同上

第4回 修士論文の検証

研究背景の検証を行う。

第5回 修士論文の検証

研究方法の検証を行う。

第6回 修士論文の検証

同上

第7回 修士論文の検証

研究成果の検証を行う。

第8回 修士論文の検証

同上

第9回 修士論文の検証

考察の検証を行う。

第10回 修士論文の検証

全体の体裁等の検証を行う。

第11回 論文発表準備

論文発表会に向けてパワーポイント、および抄録の準備を行う。

第12回 論文発表準備

同上

第13回 論文発表準備

発表予行をし、準備を完成させる。

第14回 論文発表準備

Q&Aに備えて準備を行う。

第15回 論文発表準備

同上

2022年度 前期

2.0単位

総合福祉実践特論演習

川本 健太郎

< 授業の方法 >

この授業は、演習授業である。教員と学生が双方向に議論を行いながら進める。修士論文の完成を目指す。

授業の詳細は相談して決定する。

< 授業の目的 >

この授業では、これまで進めてきた研究の意義を再確認し、それが伝わる論文を仕上げることを目的とする。(DP1、2、3、4) 社会リハビリテーション学修士にふさわしい内容、つまり、人々の抱える生活課題の解決に貢献するものであり、倫理的にも優れており、今後の研究の発展にもつながるものであることが求められる。

< 到達目標 >

1 これまで行われてきた関連研究と自らの研究の差異を説明できる。

2 適切な研究分析を行い、研究結果の表現ができる。

3 自らの研究について説明できる。

4 論文をまとめることができる。

< 授業のキーワード >

分析 結果 考察 研究論文

< 授業の進め方 >

論文完成に向けて、執筆ポイントの確認を行いながら、進捗管理を行う。可能な限り早い段階で書き上げ、より完成度の高いものにしていく。

授業中の議論を踏まえ、翌週には書き進めたものについても発表、改善点の確認を行っていく。

< 履修するにあたって >

研究に関する自身の課題と目標を明確にすることを心がける

< 授業時間外に必要な学修 >

研究テーマに関する論文等を読む (90分程度)

< 成績評価方法・基準 >

研究への取り組みと課題遂行を100%で判断する

< 授業計画 >

第1-15回 研究について

関連研究論文を講読し、自身の研究テーマに活かす。また研究デザインについて議論する

2022年度 前期

2.0単位

総合福祉実践特論演習

佐野 光彦

< 授業の方法 >

この授業は、演習授業である。教員と学生が双方向に議論を行いながら進める。修士論文の完成を目指す。

授業の詳細は相談して決定する。

< 授業の目的 >

この授業では、これまで進めてきた研究の意義を再確認し、それが伝わる論文を仕上げることを目的とする。(DP1、2、3,4) 社会リハビリテーション学修士にふさわしい内容、つまり、人々の抱える生活課題の解決に貢献するものであり、倫理的にも優れており、今後の研究の発展にもつながるものであることが求められる。

< 到達目標 >

1 これまで行われてきた関連研究と自らの研究の差異を説明できる。

2 適切な研究分析を行い、研究結果の表現ができる。

3 自らの研究について説明できる。

4 論文をまとめることができる。

< 授業のキーワード >

分析 結果 考察 研究論文

< 授業の進め方 >

論文完成に向けて、執筆ポイントの確認を行いながら、進捗管理を行う。可能な限り早い段階で書き上げ、より完成度の高いものにしていく。

授業中の議論を踏まえ、翌週には書き進めたものについ

ても発表、改善点の確認を行っていく。

< 履修するにあたって >

研究に関する自身の課題と目標を明確にすることを心がける

< 授業時間外に必要な学修 >

研究テーマに関する論文等を読む (90分程度)

< 成績評価方法・基準 >

研究への取り組みと課題遂行を100%で判断する

< 授業計画 >

第1回~15回 研究について

関連研究論文を講読し、自身の研究テーマに活かす。また研究デザインについて議論する

2022年度 後期

2.0単位

総合福祉実践特論演習

川本 健太郎

< 授業の方法 >

この授業は、演習授業である。教員と学生が双方向に議論を行いながら進める。修士論文の完成を目指す。

授業の詳細は相談して決定する。

< 授業の目的 >

この授業では、これまで進めてきた研究の意義を再確認し、それが伝わる論文を仕上げることを目的とする。(DP1、2、3,4) 社会リハビリテーション学修士にふさわしい内容、つまり、人々の抱える生活課題の解決に貢献するものであり、倫理的にも優れており、今後の研究の発展にもつながるものであることが求められる。

< 到達目標 >

1 これまで行われてきた関連研究と自らの研究の差異を説明できる。

2 適切な研究分析を行い、研究結果の表現ができる。

3 自らの研究について説明できる。

4 論文をまとめることができる。

< 授業の進め方 >

論文完成に向けて、執筆ポイントの確認を行いながら、進捗管理を行う。可能な限り早い段階で書き上げ、より完成度の高いものにしていく。

授業中の議論を踏まえ、翌週には書き進めたものについても発表、改善点の確認を行っていく。

< 履修するにあたって >

研究に関する自身の課題と目標を明確にすることを心がける

< 授業時間外に必要な学修 >

研究テーマに関する論文等を読む (90分程度)

< 成績評価方法・基準 >

研究への取り組みと課題遂行を100%で判断する

< 授業計画 >

第1回~15回

関連研究論文を講読し、自身の研究テーマに活かす。また研究デザインについて議論する

2022年度 後期

2.0単位

総合福祉実践特論演習

佐野 光彦

< 授業の方法 >

この授業は、演習授業である。教員と学生が双方向に議論を行いながら進める。修士論文の完成を目指す。

授業の詳細は相談して決定する。

< 授業の目的 >

この授業では、これまで進めてきた研究の意義を再確認し、それが伝わる論文を仕上げることを目的とする。(DP1、2、3,4) 社会リハビリテーション学修士にふさわしい内容、つまり、人々の抱える生活課題の解決に貢献するものであり、倫理的にも優れており、今後の研究の発展にもつながるものであることが求められる。

< 到達目標 >

- 1 これまで行われてきた関連研究と自らの研究の差異を説明できる。
- 2 適切な研究分析を行い、研究結果の表現ができる。
- 3 自らの研究について説明できる。
- 4 論文をまとめることができる。

< 授業のキーワード >

分析 結果 考察 研究論文

< 授業の進め方 >

論文完成に向けて、執筆ポイントの確認を行いながら、進捗管理を行う。可能な限り早い段階で書き上げ、より完成度の高いものにしていく。

授業中の議論を踏まえ、翌週には書き進めたものについても発表、改善点の確認を行っていく。

< 履修するにあたって >

研究に関する自身の課題と目標を明確にすることを心がける

< 授業時間外に必要な学修 >

研究テーマに関する論文等を読む (90分程度)

< 成績評価方法・基準 >

研究への取り組みと課題遂行を100%で判断する

< 授業計画 >

第1回～15回

関連研究論文を講読し、自身の研究テーマに活かす。また研究デザインについて議論する

2022年度 前期

2.0単位

総合福祉実践特論演習

西垣 千春

< 授業の方法 >

対面またはZoomでの授業を行う。学生と相談しながら集中講義の携帯をとる。

論文テーマに関する文献についての議論を行う。

< 授業の目的 >

この講義では、文献を読み、自らが研究課題への取り組みの視点を広げることを目的としている。

社会課題に向き合う研究においては、人と社会を見据える広く深い学識を備え、今後自ら活動していくために必要な知識と技能の獲得(DP1)は、研究を行う者にとってとても重要である。本講座では文献を選び、読み込み、意見交換を通じ、研究方法の幅を広げ(DP3)、確実に遂行できる責任感、計画力、実行力も培っていく(DP2, 4)

< 到達目標 >

修士論文のテーマはすでに決定している段階であるため、文献をどのように活用していくかをしっかり考えてもらいたい。以下の4点を目標とする。

- 1 関連する文献を参照に研究の背景、考察を深められる。
- 2 健康課題と生活課題の関連性を意識して研究を進められる。
- 3 批判的な課題分析ができる。
- 4 研究計画に沿った論文執筆を遂行できる。

< 授業の進め方 >

研究背景、研究方法、考察において、それぞれ参考になる文献を学生自ら用意し、毎回その紹介を行う。議論を通して、どのように参照、引用していくかを考える。

< 履修するにあたって >

最新の文献にも注意しながら、収集した文献を読み込んで授業に臨む必要がある。

文献整理と活用のための資料整理を行う必要がある。

< 授業時間外に必要な学修 >

毎回文献紹介を行うために、2時間から5時間程度の予習及び復習の時間が必要と思われる。

< 提出課題など >

作成した文献リストの提出を求める。

< 成績評価方法・基準 >

文献紹介を行うため、準備状況(30%)授業への参加状況(30%)提出物(40%)で総合的に評価する。

< 授業計画 >

第1回、第2回 文献研究の進め方

文献研究を深めるために、収集した文献のリストを作成する。さらに各文献の概要を自らの研究テーマと関連付

けてまとめる。

第3回、第4回 文献研究

研究テーマの背景となる社会の動向を把握するための文献について議論を行う。

第5回、第6回 文献研究

研究の動機に関連した文献について議論を深める。

第7回、第8回 文献研究

先行研究の整理を行い、自らの研究のどの部分にどの文献が活用できるかを明確にする。

第9回、第10回 文献研究

研究方法の課題や展開につながる文献についての議論を行う。

第11回、第12回 文献研究

自らの結果の意義を深めるために活用できる文献についての議論を行う。

第13回、第14回 文献研究

自らの研究結果の課題を導くために役立つ文献について議論を行う。

第15回 まとめ

授業を振り返り、文献リストを参考にしながら収支論文にどのように文献活用するかを確認する。

2022年度 後期

2.0単位

総合福祉実践特論演習

西垣 千春

< 授業の方法 >

この授業では、教員と学生が双方向に議論を行いながら進める。後期は、修士論文を仕上げるための議論を中心に進める。授業の詳細は相談して決定する。

< 授業の目的 >

この授業では、広く学んできた知見を確認し、自らの研究の意義を明確にする。さらに議論を深め、細部への検証と質の高い論文作成を目指す。(DPのすべての総括として位置づけ)

< 到達目標 >

- 1 関連する文献を参照に研究の背景、考察を深められる。
- 2 健康課題と生活課題の関連性を意識して研究を進められる。
- 3 批判的な課題分析ができる。
- 4 研究計画に沿った論文執筆を遂行できる。

< 授業のキーワード >

研究の意義

< 授業の進め方 >

これまでに得た知見をどのように研究成果としてまとめあげるかを意識して、毎回の議論を展開し、論文の完成度をたかめていく。

特別演習 では議論、特別研究 では文章のまとめ方を

中心に授業運営を行う。

< 授業時間外に必要な学修 >

授業にあたっては、執筆した論文を振り返ることが必要であり、各回のテーマに沿って議論を深めたいことを整理して臨む必ことが求められる。進捗状況にもよるが、目安としては週3~5時間を確保してもらいたい。

< 提出課題など >

より質の高い論文にすることが大切であり、必要に応じて課題を指示する。

< 成績評価方法・基準 >

毎回の授業に臨む際の準備状況(30%)、参加態度(20%)、および課題提出(20%)と最終の発表(30%)により評価を行う。

< 授業計画 >

第1回 オリエンテーション

特別演習 と特別研究 とは連動して運営する。演習においては議論、研究においては文章のまとめ方を中心に授業を行うことを確認。

第2回 修士論文検証

研究目的の検証を行う。

第3回 修士論文検証

同上

第4回 修士論文検証

研究の背景の検証を行う。

第5回 修士論文検証

同上

第6回 修士論文検証

研究方法の検証を行う。

第7回 修士論文検証

研究成果の検証を行う。

第8回 修士論文検証

考察の検証を行う。

第9回 修士論文検証

同上

第10回 修士論文仕上げ

研究成果を論じるうえで参考になる文献の論点を整理する。

第11回 修士論文仕上げ

研究成果を論じるうえで参考になる文献の論点を整理する。

第12回 修士論文仕上げ

研究成果を論じるうえで参考になる文献の論点を整理する。

第13回 研究成果発表準備

研究発表に向けてパワーポイント、抄録を完成させる。

第14回 研究成果発表準備

同上

第15回 発表Q&Aの準備

論文発表会でのQ&Aに備え、準備を行う。

2022年度 前期

2.0単位

総合リハビリテーション学特別研究

大庭 潤平

< 授業の方法 >

講義・演習（対面またはオンライン授業）

< 授業の目的 >

リハビリテーション分野を中心に医療・保健・福祉に関する研究・論文について理解し、研究方法の習得を目指す。

この講義の担当者は、リハビリテーションセンターや大学病院、在宅リハビリテーション分野での作業療法士として、作業療法の実務を25年経験している。その経験を活かした講義を行う。

DP1：人と社会を見据える広く深い学識を備え、教育・研究・職を担うための知識や技能を身につけている。（知識・技能）

DP2：1で示した学識をもとに、自ら課題を発見し、その解決方法を見出すことができる。（思考・判断・表現）

DP3：1と2を実現するための基礎的能力として、先行研究や文献を広く学び、その上で考察を進めるという研究方法を身につけている。（思考・判断・表現）

< 到達目標 >

研究テーマを検討し、研究デザインを作成する

< 授業のキーワード >

研究

< 授業の進め方 >

興味関心のある論文を講読しながら議論する

< 履修するにあたって >

研究に関する自身の課題と目標を明確にすることを心がける

< 授業時間外に必要な学修 >

研究テーマに関する論文等を読む（90分）

< 成績評価方法・基準 >

研究への取り組みと課題遂行を100%で判断する

< テキスト >

適時、資料を配布する

< 授業計画 >

第1-15回 研究について

研究論文を講読し、自身の研究テーマをみつける。また研究デザインについて議論する

2022年度 前期

2.0単位

総合リハビリテーション学特別研究

松原 貴子

< 授業の方法 >

実験・研究

< 授業の目的 >

生体の構造と機能、さらにそれらの障害や疾病、特に疼痛に関して、基礎的事項からup-to-dateな最近の進歩までを、個体レベルから組織・細胞レベル、さらに分子レベルに至る種々の段階で評価・解析する研究課題について、その課題の妥当性の検討、倫理的配慮、研究計画の立案、実験ならびに得られた結果に対する考察を行う（論文作成に関する指導も含む）。この科目は、研究科修士課程DP1、DP2、DP3及びDP4に掲げる知識・技能、思考・判断・表現及び意欲・態度を修得することを目指している。

また、この科目の担当者は、理学療法士として30年以上の経験があり、大学教員となった後も非常勤で定期的臨床に携わる、実務経験のある教員であるため、生体の正常機能だけでなく病態の解析手法や知見についても言及しながら、研究の幅と深さを広げる。

< 到達目標 >

1. 研究倫理を身につける。

2. 当該研究分野の論文を読み、論文の主旨を説明できる。

3. 上記論文の新規性、問題点、さらに必要・参考となる実験を指摘できる。

4. 修士論文を作成できる。

5. 修士論文発表会（学内）及び学会にて口述発表を行い、質疑応答に答えることができる。

6. 修士論文審査委員会で論文内容について説明し、質疑応答に答えることができる。

< 授業のキーワード >

疼痛学、研究倫理、論文抄読、研究計画、修士論文、口述発表

< 授業の進め方 >

1. 研究倫理、2. 論文抄読、3. 研究テーマ・デザインの検討・決定、4. 研究計画書の作成、5. 実験およびデータ収集・解析、6. 修士論文作成、7. 学会や学内研究発表会での口述発表、等を研究の進捗状況に合わせて指導する。定期的（週1～2回）に研究室のミーティングに出席・討論し、他の教員や大学院生、及び研究員、学部生らとの質疑応答を繰り返してブラッシュアップするとともに、データの透明性を担保する。

< 履修するにあたって >

定期的開催する研究室のプログレスレポート・ミーティング以外にも、指導教員との報告・連絡・相談を適宜

行うこと。修士論文及び各種報告書や書類の提出期限を厳守すること。

< 授業時間外に必要な学修 >

先行研究調査や関連する分野の英語論文抄読に努め、事前に配布された論文や参考資料等の該当部分に目を通してから講義に臨むこと(60分程度)。講義後は、講義内容を整理し、他の科目との関連も含めて整理しておくこと(60分程度)。

< 提出課題など >

適時指示する。

提出された課題やデータ報告に対しては、対面またはWebを通して個別にフィードバックを行う。

< 成績評価方法・基準 >

修士課程に相応しい水準の研究活動および成果公表を評価する。

< テキスト >

特に指定しない。

< 参考図書 >

個別に指導・紹介する。

2022年度 前期

2.0単位

総合リハビリテーション学特別研究

森本 陽介

< 授業の方法 >

実験・研究

< 授業の目的 >

生体の構造と機能、さらにそれらの障害や疾病、特に循環機能と身体機能に関して、基礎的事項からup-to-dateな最近の進歩までを、個体レベルから組織・細胞レベル、さらに分子レベルに至る種々の段階で評価・解析する研究課題について、その課題の妥当性の検討、倫理的配慮、研究計画の立案、実験ならびに得られた結果に対する考察を行う(論文作成に関する指導も含む)。この科目は、研究科修士課程DP2、DP3及びDP4に掲げる思考・判断・表現及び意欲・態度を修得することを目指している。また、この科目の担当者は、理学療法士として15年の経験があり、大学教員となった後も非常勤で定期的に臨床に携わる、実務経験のある教員であるため、生体の正常機能だけでなく病態の解析手法や知見についても言及しながら、研究の幅と深さを拡げる。

< 到達目標 >

1. 研究倫理を身につける。
2. 当該研究分野の論文を読み、論文の主旨を説明できる。
3. 上記論文の新規性、問題点、さらに必要・参考となる実験を指摘できる。
4. 修士論文を作成できる。
5. 修士論文発表会(学内)及び学会にて口述発表を行う

い、質疑応答に答えることができる。

6. 修士論文審査委員会で論文内容について説明し、質疑応答に答えることができる。

< 授業のキーワード >

心臓リハビリテーション、研究倫理、論文抄読、研究計画、修士論文、口述発表

< 授業の進め方 >

1. 研究倫理、2. 論文抄読、3. 研究テーマ・デザインの検討・決定、4. 研究計画書の作成、5. 実験およびデータ収集・解析、6. 修士論文作成、7. 学会や学内研究発表会での口述発表、等を研究の進捗状況に合わせて指導する。定期的(週1~2回)に研究室のミーティングに出席・討論し、他の教員や大学院生、及び研究員、学部生らとの質疑応答を繰り返してブラッシュアップするとともに、データの透明性を担保する。

< 履修するにあたって >

定期的開催する研究室のプログレスレポート・ミーティング以外にも、指導教員との報告・連絡・相談を適宜行うこと。修士論文及び各種報告書や書類の提出期限を厳守すること。

< 授業時間外に必要な学修 >

先行研究調査や関連する分野の英語論文抄読に努め、事前に配布された論文や参考資料等の該当部分に目を通してから講義に臨むこと(60分程度)。講義後は、講義内容を整理し、他の科目との関連も含めて整理しておくこと(60分程度)。

< 提出課題など >

適時指示する。

提出された課題やデータ報告に対しては、対面またはWebを通して個別にフィードバックを行う。

< 成績評価方法・基準 >

修士課程に相応しい水準の研究活動および成果公表を評価する。

< テキスト >

特に指定しない。

< 参考図書 >

個別に指導・紹介する。

2022年度 後期

2.0単位

総合リハビリテーション学特別研究

大庭 潤平

< 授業の方法 >

講義・演習

< 授業の目的 >

リハビリテーション分野を中心に医療・保健・福祉に関する研究・論文について理解し、研究方法の習得を目指す。

この講義の担当者は、リハビリテーションセンターや大

学病院、在宅リハビリテーション分野での作業療法士として、作業療法の実務を25年経験している。その経験を活かした講義を行う。

DP1：人と社会を見据える広く深い学識を備え、教育・研究・職を担うための知識や技能を身につけている。（知識・技能）

DP2：1で示した学識をもとに、自ら課題を発見し、その解決方法を見出すことができる。（思考・判断・表現）

DP3：1と2を実現するための基礎的能力として、先行研究や文献を広く学び、その上で考察を進めるといった研究方法を身につけている。（思考・判断・表現）

<到達目標>

研究テーマを検討し、研究デザインを作成する。

倫理審査関連の申請書資料を作成する

<授業のキーワード>

研究

<授業の進め方>

興味関心のある論文を講読しながら議論する

<履修するにあたって>

研究に関する自身の課題と目標を明確にすることを心がける

<授業時間外に必要な学修>

研究テーマに関する論文等を読む（90分）

<成績評価方法・基準>

研究への取り組みと課題遂行を100%で判断する

<テキスト>

適時、資料を配布する

<授業計画>

第1-15回 研究について

研究論文を講読し、自身の研究テーマをみつける。また研究デザインについて議論する

2022年度 後期

2.0単位

総合リハビリテーション学特別研究

松原 貴子

<授業の方法>

実験・研究（対面授業および遠隔授業併用）

<授業の目的>

生体の構造と機能、さらにそれらの障害や疾病、特に疼痛に関して、基礎的事項からup-to-dataな最近の進歩までを、個体レベルから組織・細胞レベル、さらに分子レベルに至る種々の段階で評価・解析する研究課題について、その課題の妥当性の検討、倫理的配慮、研究計画の立案、実験ならびに得られた結果に対する考察を行う（論文作成に関する指導も含む）。この科目は、研究科修士課程DP1、DP2、DP3及びDP4に掲げる知識・技能、思考・判断・表現及び意欲・態度を修得することを目指して

いる。

また、この科目の担当者は、理学療法士として30年以上の経験があり、大学教員となった後も非常勤で定期的に臨床に携わる、実務経験のある教員であるため、生体の正常機能だけでなく病態の解析手法や知見についても言及しながら、研究の幅と深さを広げる。

<到達目標>

1. 研究倫理を身につける。

2. 当該研究分野の論文を読み、論文の主旨を説明できる。

3. 上記論文の新規性、問題点、さらに必要・参考となる実験を指摘できる。

4. 修士論文を作成できる。

5. 修士論文発表会（学内）及び学会にて口述発表を行い、質疑応答に答えることができる。

6. 修士論文審査委員会で論文内容について説明し、質疑応答に答えることができる。

<授業のキーワード>

疼痛学、研究倫理、論文抄読、研究計画、修士論文、口述発表

<授業の進め方>

1. 研究倫理、2. 論文抄読、3. 研究テーマ・デザインの検討・決定、4. 研究計画書の作成、5. 実験およびデータ収集・解析、6. 修士論文作成、7. 学会や学内研究発表会での口述発表、等を研究の進捗状況に合わせて指導する。定期的（週1～2回）に研究室のミーティングに出席・討論し、他の教員や大学院生、及び研究員、学部生らとの質疑応答を繰り返してブラッシュアップするとともに、データの透明性を担保する。

<履修するにあたって>

定期的開催する研究室のプログレスレポート・ミーティング以外にも、指導教員との報告・連絡・相談を適宜行うこと。修士論文及び各種報告書や書類の提出期限を厳守すること。

<授業時間外に必要な学修>

先行研究調査や関連する分野の英語論文抄読に努め、事前に配布された論文や参考資料等の該当部分に目を通してからミーティングに臨むこと（60分程度）。ミーティング後は、指摘された内容について調べ、他の科目との関連も含めて整理しておくこと（60分程度）。また、必要に応じ各自、学会発表の準備、学術誌へ投稿する論文の執筆を進める。

<提出課題など>

適時指示する。

提出された課題やデータ報告に対しては、対面またはWebを通して、プログレスミーティング時または個別にフィードバックを行う。

<成績評価方法・基準>

修士課程に相応しい水準の研究活動および成果公表を評価する。

<テキスト>

特に指定しない。

<参考図書>

個別に指導・紹介する。

2022年度 後期

2.0単位

総合リハビリテーション学特別研究

森本 陽介

<授業の方法>

実験・研究（対面授業および遠隔授業併用）

<授業の目的>

生体の構造と機能、さらにそれらの障害や疾病、特に循環機能と身体機能に関して、基礎的事項からup-to-dataな最近の進歩までを、個体レベルから組織・細胞レベル、さらに分子レベルに至る種々の段階で評価・解析する研究課題について、その課題の妥当性の検討、倫理的配慮、研究計画の立案、実験ならびに得られた結果に対する考察を行う（論文作成に関する指導も含む）。この科目は、研究科修士課程DP2、DP3及びDP4に掲げる思考・判断・表現及び意欲・態度を修得することを目指している。また、この科目の担当者は、理学療法士として15年の経験があり、大学教員となった後も非常勤で定期的に臨床に携わる、実務経験のある教員であるため、生体の正常機能だけでなく病態の解析手法や知見についても言及しながら、研究の幅と深さを拡げる。

<到達目標>

1. 研究倫理を身につける。
2. 当該研究分野の論文を読み、論文の主旨を説明できる。
3. 上記論文の新規性、問題点、さらに必要・参考となる実験を指摘できる。
4. 修士論文を作成できる。
5. 修士論文発表会（学内）及び学会にて口述発表を行い、質疑応答に答えることができる。
6. 修士論文審査委員会で論文内容について説明し、質疑応答に答えることができる。

<授業のキーワード>

心臓リハビリテーション、研究倫理、論文抄読、研究計画、修士論文、口述発表

<授業の進め方>

1. 研究倫理、2. 論文抄読、3. 研究テーマ・デザインの検討・決定、4. 研究計画書の作成、5. 実験およびデータ収集・解析、6. 修士論文作成、7. 学会や学内研究発表会での口述発表、等を研究の進捗状況に合わせて指導する。定期的（週1～2回）に研究室のミーティングに出席・討論し、他の教員や大学院生、及び研究員、学部生らとの質疑応答を繰り返してブラッシュアップするとともに、データの透明性を担保する。

<履修するにあたって>

定期的開催する研究室のプログレスレポート・ミーティング以外にも、指導教員との報告・連絡・相談を適宜行うこと。修士論文及び各種報告書や書類の提出期限を厳守すること。

<授業時間外に必要な学修>

先行研究調査や関連する分野の英語論文抄読に努め、事前に配布された論文や参考資料等の該当部分に目を通してからミーティングに臨むこと（60分程度）。ミーティング後は、指摘された内容について調べ、他の科目との関連も含めて整理しておくこと（60分程度）。また、必要に応じ各自、学会発表の準備、学術誌へ投稿する論文の執筆を進める。

<提出課題など>

適時指示する。

提出された課題やデータ報告に対しては、対面またはWebを通して、プログレスミーティング時または個別にフィードバックを行う。

<成績評価方法・基準>

修士課程に相応しい水準の研究活動および成果公表を評価する。

<テキスト>

特に指定しない。

<参考図書>

個別に指導・紹介する。

2022年度 前期

3.0単位

総合リハビリテーション学特別研究

松原 貴子

<授業の方法>

実験・研究

<授業の目的>

生体の構造と機能、さらにそれらの障害や疾病、特に疼痛に関して、基礎的事項からup-to-dataな最近の進歩までを、個体レベルから組織・細胞レベル、さらに分子レベルに至る種々の段階で評価・解析する研究課題について、その課題の妥当性の検討、倫理的配慮、研究計画の立案、実験ならびに得られた結果に対する考察を行う（論文作成に関する指導も含む）。この科目は、研究科修士課程DP1、DP2、DP3及びDP4に掲げる知識・技能、思考・判断・表現及び意欲・態度を修得することを目指している。

また、この科目の担当者は、理学療法士として30年以上の経験があり、大学教員となった後も非常勤で定期的に臨床に携わる、実務経験のある教員であるため、生体の正常機能だけでなく病態の解析手法や知見についても言及しながら、研究の幅と深さを拡げる。

<到達目標>

1. 研究倫理を身につける。
2. 当該研究分野の論文を読み、論文の主旨を説明できる。
3. 上記論文の新規性、問題点、さらに必要・参考となる実験を指摘できる。
4. 修士論文を作成できる。
5. 修士論文発表会（学内）及び学会にて口述発表を行い、質疑応答に答えることができる。
6. 修士論文審査委員会で論文内容について説明し、質疑応答に答えることができる。

< 授業のキーワード >

疼痛学、研究倫理、論文抄読、研究計画、修士論文、口述発表

< 授業の進め方 >

1. 研究倫理、2. 論文抄読、3. 研究テーマ・デザインの検討・決定、4. 研究計画書の作成、5. 実験およびデータ収集・解析、6. 修士論文作成、7. 学会や学内研究発表会での口述発表、等を研究の進捗状況に合わせて指導する。定期的（週1～2回）に研究室のミーティングに出席・討論し、他の教員や大学院生、及び研究員、学部生らとの質疑応答を繰り返してブラッシュアップするとともに、データの透明性を担保する。

< 履修するにあたって >

定期的で開催する研究室のプログレスレポート・ミーティング以外にも、指導教員との報告・連絡・相談を適宜行うこと。修士論文及び各種報告書や書類の提出期限を厳守すること。

< 授業時間外に必要な学修 >

先行研究調査や関連する分野の英語論文抄読に努め、事前に配布された論文や参考資料等の該当部分に目を通してからミーティングに臨むこと（60分程度）。ミーティング後は、指摘された内容について調べ、他の科目との関連も含めて整理しておくこと（60分程度）。また、必要に応じ各自、学会発表の準備、学術誌へ投稿する論文の執筆を進める。

< 提出課題など >

適時指示する。

提出された課題やデータ報告に対しては、対面またはWebを通して個別にフィードバックを行う。

< 成績評価方法・基準 >

修士課程に相応しい水準の研究活動および成果公表を評価する。

< テキスト >

特に指定しない。

< 参考図書 >

個別に指導・紹介する。

2022年度 前期

3.0単位

総合リハビリテーション学特別研究

備酒 伸彦

< 授業の方法 >

遠隔オンデマンドで講義する。

< 授業の目的 >

「地域リハビリテーションの概念」と「ケアに関わる者が果たすべき役割」を知ることにより、有為な理学療法士としての発想と態度を獲得し「チーム医療や総合的福祉、地域社会開発の担い手となることができる」能力を担保する。

本科目は、本研究科が養成しようとする研究者像にとって必須な、「地域リハビリテーションの概念」と「ケアに関わる者が果たすべき役割」を知ることにより、有為な研究者としての発想と態度を獲得する。これはDPにおける「チーム医療や総合的福祉、地域社会開発の担い手となることができる」を担保する一つとなる。

この科目の担当者は病院でのリハビリテーション11年の臨床経験、地域リハビリテーション11年の現場経験を有し、現在も地域リハビリテーションに関わっている実務経験のある教員であることから、実際に役立つ発想と態度を伝え、教員・学生の討論により一層のその理解を深める。

< 到達目標 >

地域リハビリテーションにかかる歴史、発展過程について理解している。

地域リハビリテーションの現状について理解している。上記2点を通じて、将来の地域リハビリテーションを展望できる。

< 授業の進め方 >

地域リハビリテーションにかかる文献購読、その他情報収集。

教員・学生による討論。

< 授業時間外に必要な学修 >

地域リハビリテーションにかかる課題に関する考察。

< 成績評価方法・基準 >

文献、情報収集の進捗とその成果、教員・学生間討論の成果により評価する。

2022年度 後期

3.0単位

総合リハビリテーション学特別研究

松原 貴子

< 授業の方法 >

実験・研究（対面授業および遠隔授業併用）

< 授業の目的 >

生体の構造と機能、さらにそれらの障害や疾病、特に疼痛に関して、基礎的事項からup-to-dataな最近の進歩までを、個体レベルから組織・細胞レベル、さらに分子レベルに至る種々の段階で評価・解析する研究課題について、その課題の妥当性の検討、倫理的配慮、研究計画の立案、実験ならびに得られた結果に対する考察を行う(論文作成に関する指導も含む)。この科目は、研究科修士課程DP1、DP2、DP3及びDP4に掲げる知識・技能、思考・判断・表現及び意欲・態度を修得することを目指している。

また、この科目の担当者は、理学療法士として30年以上の経験があり、大学教員となった後も非常勤で定期的に臨床に携わる、実務経験のある教員であるため、生体の正常機能だけでなく病態の解析手法や知見についても言及しながら、研究の幅と深さを拡げる。

<到達目標>

1. 研究倫理を身につける。
2. 当該研究分野の論文を読み、論文の主旨を説明できる。
3. 上記論文の新規性、問題点、さらに必要・参考となる実験を指摘できる。
4. 修士論文を作成できる。
5. 修士論文発表会(学内)及び学会にて口述発表を行い、質疑応答に答えることができる。
6. 修士論文審査委員会で論文内容について説明し、質疑応答に答えることができる。

<授業のキーワード>

疼痛学、研究倫理、論文抄読、研究計画、修士論文、口述発表

<授業の進め方>

1. 研究倫理、2. 論文抄読、3. 研究テーマ・デザインの検討・決定、4. 研究計画書の作成、5. 実験およびデータ収集・解析、6. 修士論文作成、7. 学会や学内研究発表会での口述発表、等を研究の進捗状況に合わせて指導する。定期的(週1~2回)に研究室のミーティングに出席・討論し、他の教員や大学院生、及び研究員、学部生らとの質疑応答を繰り返してブラッシュアップするとともに、データの透明性を担保する。

<履修するにあたって>

定期的に開催する研究室のプログレスレポート・ミーティング以外にも、指導教員との報告・連絡・相談を適宜行うこと。修士論文及び各種報告書や書類の提出期限を厳守すること。

<授業時間外に必要な学修>

先行研究調査や関連する分野の英語論文抄読に努め、事前に配布された論文や参考資料等の該当部分に通してからミーティングに臨むこと(60分程度)。ミーティング後は、指摘された内容について調べ、他の科目との関連も含めて整理しておくこと(60分程度)。また、必要に応じ各自、学会発表の準備、学術誌へ投稿する論文

の執筆を進める。

<提出課題など>

適時指示する。

提出された課題やデータ報告に対しては、対面またはWebを通して、プログレスミーティング時または個別にフィードバックを行う。

<成績評価方法・基準>

修士課程に相応しい水準の研究活動および成果公表を評価する。

<テキスト>

特に指定しない。

<参考図書>

個別に指導・紹介する。

2022年度 後期

3.0単位

総合リハビリテーション学特別研究

備酒 伸彦

<授業の方法>

遠隔オンデマンドで講義する。

<授業の目的>

「地域リハビリテーションの概念」と「ケアに関わる者が果たすべき役割」を知ることにより、有為な理学療法士としての発想と態度を獲得し「チーム医療や総合的福祉、地域社会開発の担い手となることができる」能力を担保する。

本科目は、本研究科が養成しようとする研究者像にとって必須な、「地域リハビリテーションの概念」と「ケアに関わる者が果たすべき役割」を知ることにより、有為な研究者としての発想と態度を獲得する。これはDPにおける「チーム医療や総合的福祉、地域社会開発の担い手となることができる」を担保する一つとなる。

この科目の担当者は病院でのリハビリテーション11年の臨床経験、地域リハビリテーション11年の現場経験を有し、現在も地域リハビリテーションに関わっている実務経験のある教員であることから、実際に役立つ発想と態度を伝え、教員・学生の討論により一層のその理解を深める。

<到達目標>

地域リハビリテーションにかかる歴史、発展過程について理解している。

地域リハビリテーションの現状について理解している。

上記2点を通じて、将来の地域リハビリテーションを展望できる。

<授業の進め方>

地域リハビリテーションにかかる文献購読、その他情報収集。

教員・学生による討論。

< 授業時間外に必要な学修 >

地域リハビリテーションにかかる課題に関する考察。

< 成績評価方法・基準 >

文献、情報収集の進捗とその成果、教員・学生間討論の成果により評価する。

2022年度 前期

2.0単位

総合リハビリテーション学特論 A

備酒 伸彦、岩井 信彦、大庭 潤平、小川 真寛、小坂 享子、阪田 憲二郎、佐野 光彦、春藤 久人、中前 智通、西尾 久英、橋本 力、藤原 瑞穂、松原 貴子、水上 然、南 哲

< 授業の方法 >

○この講義はオンデマンドで開講します。

○シラバスの講義番号とは関係なく、時間割に記載された教員名の期日までにオンデマンド教材

を配信する予定です。

○オンデマンド教材は下記フォルダーにアップします。

○受講後は担当教員の指示に従ってレポート等を提出してください。

総合リハビリテーション学特論 A (修士) 【土曜集中】フォルダ

不明な点、不安なことがあれば下記までメールをください。

< 授業の目的 >

本講義は、受講生が自らの専門領域の仕事により深い学識を備え、社会や人を見る力 (DP 1) を身につけ、自ら課題を見つけ、その解決方法を見出せるよう (DP 2) オムニバス方式で行う。人々のニーズは年齢や性別、家族構成、収入、健康状態などにより異なり、さらには生活している地域により生活環境に差異があり、活用できる社会資源も同じではない。身心機能や生活環境の立て直し (リハビリテーション) を必要とする人々のニーズを的確にとらえ、ニーズに沿ったサービスを展開していく方法を組み立てる力を習得する。なお、この科目の担当者は地域において健康や生活の課題を抱えた方が生活するための支援の実務 (福祉、医療、リハビリテーション、ケア) に携わった経験のある教員がその後の活動も踏まえて、実践に役立つ視点を取り入れながら講義を行う。

< 到達目標 >

目的に挙げた学識を備え、課題解決に立ち向かえるよう以下の目標に到達することを目指す。

1 サービスの特性を理解し、活用する方法を提案できるようになる

2 サービス活用の効果を検証し、説明できる

3 専門職・関連機関の連携について知見を深め、地域リハビリテーション活動の理念を説明できる

4 人々の生活を支える活動を包括的・継続的に展開できる方法を考えることができる

< 授業のキーワード >

地域リハビリテーション活動、ニーズ把握、サービス、社会資源

< 授業の進め方 >

15名の教員によるオムニバス講義である。

必要資料は各教員が配布し、課題についても指示する。

< 履修するにあたって >

知識の獲得にとどまらず自ら考える姿勢で履修に臨みたい。

< 授業時間外に必要な学修 >

オムニバス方式であるため、担当教員からの助言により、授業内容を整理する学習時間 (1 時間 ~ 2 時間) を確保し、理解を深めてもらいたい。

< 提出課題など >

全体の講義を通しての最終レポート、および各教員の指示により課題あり。課題については各教員より講評を行う。

< 成績評価方法・基準 >

各教員からの評価 (講義時の討論の状況により評価する)、最終レポートなどを総合的に判断して成績評価を行う。

各教員の評価 75% 最終レポート 25%

< 授業計画 >

松原 疼痛リハビリテーション

疼痛は老若男女や疾病を問わず誰もが経験する感覚・情動体験であり、生体内で生じた危険を知らせる生理的反応 = 警告信号である一方、長引けば慢性疼痛という新たな疾病として捉えられるようになった。本項では、疼痛の定義、疫学、病態メカニズム、診療のうち特にリハビリテーション評価・治療について学修する。

西尾 ヒトの進化史

ヒトの進化史をたどることで、ヒトをヒトたらしめる要件 (直立歩行、道具使用、言語発達、社会形成等) を理解し、我々の福祉、医療、リハビリテーション、ケアの起源を概説できるようにする。

大庭 生活行為と代償的リハビリテーション

生活行為について理解し、生活行為の向上のための代償的リハビリテーションの意義と効果について議論する

阪田 精神障害者へのソーシャルワーク

精神障害者へのソーシャルワーク (社会福祉の援助技術) を概観し地域における連携について解説する。

岩井 日常生活活動と障害構造

日常生活活動の多面性やその構造について学ぶ。

藤原 高齢者の生活経験

個別具体的な高齢者の生活経験を捉える意味と方法について議論する。

小川 認知症高齢者の活動の質

認知症高齢者の活動の質を定量的に評価する意義と方法について議論する。

南 小児領域の理学療法とリハビリテーション

小児領域の主な対象疾患となる、脳性麻痺に対する現在に至るまでの理学療法の実践を学び、最近のトピックスを踏まえながら、今後の小児領域の理学療法およびリハビリテーションの方向性について考察する。

備酒 変遷するリハビリテーションとケア

人口構造の変化、制度の変遷、市民意識の変遷に対応できるリハビリテーションとケアについて検討するための基礎的な知識と考え方を醸成する。

中前 精神疾患のある人のためのリハビリテーション
統合失調症や認知症、うつ病、不安障がいなどの精神疾患の概要やそれら疾患のある人々へのリハビリテーションの一部を最近の新たな研究報告を含めて学ぶ。

春藤 リハビリテーション領域における薬物療法

リハビリテーション領域において使用される主な薬物について、薬物の作用機序、薬理作用（主作用と副作用）、適応、臨床上、注意すべき点等について学び、薬物療法の基礎知識を身につける。

小坂 当事者性を高めあう場としての地域

当事者と非当事者が対峙する場として地域を捉えるのではないことを確認したうえで、地域住民が当事者性を高めるための支援システムについて考える。

水上 高齢者福祉の動向と課題

高齢者福祉の動向と課題について、権利擁護の視点に触れつつ解説を行う。

佐野 オールドニュータウンのリハビリテーション

明舞団地などの高度成長期に形成されたニュータウンをいかに再生させるか、その答えを社会福祉を通じて考えてみる。

橋本 地域福祉における福祉ニーズとその支援

地域福祉の視座から捉えた多様な福祉ニーズおよびその支援方法について講義する。

2022年度 前期

2.0単位

総合リハビリテーション学特論演習

大庭 潤平

< 授業の方法 >

対面またはオンライン授業での講義

< 授業の目的 >

リハビリテーションにおける代償学は、心身機能障害の軽減のみでなく活動や参加の補完ならびに代償を通じて実生活の支援を行うことであり、その理念を理解できるようになる。

この講義の担当者は、リハビリテーションセンターや大学病院、在宅リハビリテーション分野での作業療法士として、作業療法の実務を25年経験している。その経験を

活かした講義を行う。

DP1：人と社会を見据える広く深い学識を備え、教育・研究・職を担うための知識や技能を身につけている。（知識・技能）

DP2：1で示した学識をもとに、自ら課題を発見し、その解決方法を見出すことができる。（思考・判断・表現）

DP3：1と2を実現するための基礎的能力として、先行研究や文献を広く学び、その上で考察を進めるという研究方法を身につけている。（思考・判断・表現）

< 到達目標 >

生活機能代償学として、福祉用具、工学、サービス、義肢装具、環境調整などの観点からの現状を理解すると共に、受講生の経験と照らし合わせて、各自の分野でのあるべき姿を考えることができるようになる

< 授業のキーワード >

リハビリテーション 代償学

< 授業の進め方 >

興味関心のある論文を講読しながら議論する

< 履修するにあたって >

研究に関する自身の課題と目標を明確にすることを心がける

< 授業時間外に必要な学修 >

研究テーマに関する論文等を読む（90分程度）

< 成績評価方法・基準 >

研究への取り組みと課題遂行を100%で判断する

< テキスト >

適時、資料を配布する

< 授業計画 >

第1-15回 研究について

代償学について情報を共有しながら、関連研究論文を講読し、自身の研究テーマに活かす。また研究デザインについて議論する

2022年度 前期

2.0単位

総合リハビリテーション学特論演習

松原 貴子

< 授業の方法 >

演習（対面授業および遠隔授業併用）

< 授業の目的 >

生体の構造と機能、さらにそれらの障害や疾病、特に疼痛に関して、基礎的事項からup-to-dateな最近の進歩までを、個体レベルから組織・細胞レベル、さらに分子レベルに至る種々の段階で評価・解析する研究課題について、その課題の妥当性の検討及び倫理的配慮を踏まえ、研究計画の立案ならびに実験の準備を進める。その過程を基盤にして、基礎研究から臨床応用へと幅広い研究に対応できるような知識を得ることを目標とする。この科

目は、研究科修士課程DP1、DP3及びDP4に掲げる知識・技能、思考・判断・表現及び意欲・態度を修得することを目指している。

また、この科目の担当者は、理学療法士として30年以上の経験があり、大学教員となった後も非常勤で定期的に臨床に携わる、実務経験のある教員であるため、生体の正常機能だけでなく病態の解析手法や知見についても言及しながら、研究の幅と深さを広げる。

<到達目標>

「基礎生体機能・病態解析学特論」で得られた知識及び疼痛学の基礎をもとに、基礎研究から臨床応用へと幅広い研究に対応できるように知識を深め説明することができる。

<授業のキーワード>

疼痛学、研究倫理、論文抄読、研究計画

<授業の進め方>

研究倫理の研修と論文抄読と並行し、研究テーマ・デザインの検討を進め、そのために必要な予備的実験を含めながら、実験について指導・準備を進める。定期的（週1～2回）に研究室のミーティングに出席し、論文抄読を通して、他の教員や大学院生、及び研究員、学部生らとの質疑応答のなかで、研究計画をブラッシュアップする。

<履修するにあたって>

定期的で開催する研究室のプログレスレポート・ミーティング以外にも、指導教員との報告・連絡・相談を適宜行うこと。論文抄読レジュメ等の課題の提出期限を厳守すること。

<授業時間外に必要な学修>

先行研究調査や関連する分野にて必要な論文を検索しその論文抄読に努め、さらに事前に配布された参考資料等について十分に理解してから演習に臨むこと（60分程度）。演習後は、指摘や質問を受けた内容について調べ、取りまとめて重要事項を整理しておくこと（60分程度）。

<提出課題など>

適時指示する。

提出された課題に対しては、対面またはWebを通して個別にフィードバックを行う。

<成績評価方法・基準>

提出された課題及び演習・ミーティング時のプレゼンテーション、質疑応答を評価する。

<テキスト>

特に指定しない。

<参考図書>

個別に指導・紹介する。

2022年度 前期

2.0単位

総合リハビリテーション学特論演習

森本 陽介

<授業の方法>

演習（対面授業および遠隔授業併用）

<授業の目的>

生体の構造と機能、さらにそれらの障害や疾病、特に循環機能と身体機能に関して、基礎的事項からup-to-dateな最近の進歩までを、個体レベルから組織・細胞レベル、さらに分子レベルに至る種々の段階で評価・解析する研究課題について、その課題の妥当性の検討及び倫理的配慮を踏まえ、研究計画の立案ならびに実験の準備を進める。その過程を基盤にして、基礎研究から臨床応用へと幅広い研究に対応できるような知識を得ることを目標とする。この科目は、研究科修士課程DP3及びDP4に掲げる思考・判断・表現及び意欲・態度を修得することを目指している。

また、この科目の担当者は、理学療法士として15年の経験があり、大学教員となった後も非常勤で定期的に臨床に携わる、実務経験のある教員であるため、生体の正常機能だけでなく病態の解析手法や知見についても言及しながら、研究の幅と深さを広げる。

<到達目標>

「基礎生体機能・病態解析学特論」で得られた知識及び心臓リハビリテーションの基礎をもとに、基礎研究から臨床応用へと幅広い研究に対応できるように知識を深め説明することができる。

<授業のキーワード>

心臓リハビリテーション、研究倫理、論文抄読、研究計画

<授業の進め方>

研究倫理の研修と論文抄読と並行し、研究テーマ・デザインの検討を進め、そのために必要な予備的実験を含めながら、実験について指導・準備を進める。定期的（週1～2回）に研究室のミーティングに出席し、論文抄読を通して、他の教員や大学院生、及び研究員、学部生らとの質疑応答のなかで、研究計画をブラッシュアップする。

<履修するにあたって>

定期的で開催する研究室のプログレスレポート・ミーティング以外にも、指導教員との報告・連絡・相談を適宜行うこと。論文抄読レジュメ等の課題の提出期限を厳守すること。

<授業時間外に必要な学修>

先行研究調査や関連する分野にて必要な論文を検索しその論文抄読に努め、さらに事前に配布された参考資料等について十分に理解してから演習に臨むこと（60分程度）。演習後は、指摘や質問を受けた内容について調べ、

取りまとめて重要事項を整理しておくこと（60分程度）。
<提出課題など>
適時指示する。
提出された課題に対しては、対面またはWebを通して個別にフィードバックを行う。
<成績評価方法・基準>
提出された課題及び演習・ミーティング時のプレゼンテーション，質疑応答を評価する。
<テキスト>
特に指定しない。
<参考図書>
個別に指導・紹介する。

2022年度 後期

2.0単位

総合リハビリテーション学特論演習

大庭 潤平

<授業の方法>

講義・演習

<授業の目的>

リハビリテーションにおける代償学は、心身機能障害の軽減のみでなく活動や参加の補完ならびに代償を通じて実生活の支援を行うことであり、その理念を理解できるようになる。

この講義の担当者は、リハビリテーションセンターや大学病院、在宅リハビリテーション分野での作業療法士として、作業療法の実務を25年経験している。その経験を活かした講義を行う。

DP1：人と社会を見据える広く深い学識を備え、教育・研究・職を担うための知識や技能を身につけている。（知識・技能）

DP2：1で示した学識をもとに、自ら課題を発見し、その解決方法を見出すことができる。（思考・判断・表現）

DP3：1と2を実現するための基礎的能力として、先行研究や文献を広く学び、その上で考察を進めるといった研究方法を身につけている。（思考・判断・表現）

<到達目標>

生活機能代償学として、福祉用具、工学、サービス、義肢装具、環境調整などの観点からの現状を理解すると共に、受講生の経験と照らし合わせて、各自の分野のあるべき姿を考えることができるようになる。

さらに自身の研究テーマに関連させて、研究デザイン等について議論ができるようになる。

<授業のキーワード>

リハビリテーション 代償学

<授業の進め方>

興味関心のある論文を講読しながら議論する

<履修するにあたって>

研究に関する自身の課題と目標を明確にすることを心がける

<授業時間外に必要な学修>

研究テーマに関する論文等を読む（90分程度）

<成績評価方法・基準>

研究への取り組みと課題遂行を100%で判断する

<テキスト>

適時、資料を配布する

<授業計画>

第1-15回 研究について

代償学について情報を共有しながら、関連研究論文を講読し、自身の研究テーマに活かす。また研究デザインについて議論する

2022年度 後期

2.0単位

総合リハビリテーション学特論演習

松原 貴子

<授業の方法>

演習（対面授業および遠隔授業併用）

<授業の目的>

生体の構造と機能、さらにそれらの障害や疾病、特に疼痛に関して、基礎的事項からup-to-dateな最近の進歩までを、個体レベルから組織・細胞レベル、さらに分子レベルに至る種々の段階で評価・解析する研究課題について、その課題の妥当性の検討及び倫理的配慮を踏まえ、研究計画の立案、実験ならびに得られた結果の解析と考察について指導する。その過程を基盤にして、基礎研究から臨床応用へと幅広い研究に対応できるような知識を得ることを目標とする。この科目は、研究科修士課程DP1、DP3及びDP4に掲げる知識・技能、思考・判断・表現及び意欲・態度を修得することを目指している。

また、この科目の担当者は、理学療法士として30年の経験があり、大学教員となった後も非常勤で定期的に臨床及び臨床研究に携わる、実務経験のある教員であるため、生体の正常機能だけでなく病態の解析手法や知見についても言及しながら、研究の幅と深さを拡げる。

<到達目標>

「基礎生体機能・病態解析学特論」、「総合リハビリテーション学特論演習」で修得した知識及び疼痛学の基礎・研究知見をもとに、基礎研究から臨床応用へと幅広い研究に対応できるように知識を深め説明することができる。

<授業のキーワード>

疼痛学、研究倫理、論文抄読、研究計画、データ解析

<授業の進め方>

研究倫理の研修と論文抄読と並行し、研究テーマ・デザインの検討を繰り返し、個々の実験・調査研究を指導する。定期的（週1～2回）に研究室のミーティングに出席

し、論文抄読を通して、他の教員や大学院生、及び研究員、学部生らとの質疑応答のなかで、研究計画をブラッシュアップする。

<履修するにあたって>

定期的開催する研究室のプログレスレポート・ミーティング以外にも、指導教員との報告・連絡・相談を適宜行うこと。論文抄読レジュメ等の課題の提出期限を厳守すること。

<授業時間外に必要な学修>

先行研究調査や関連する分野にて必要な論文を検索しその論文抄読に努め、さらに事前に配布された参考資料等について十分に理解してから演習に臨むこと(60分程度)。演習後は、指摘や質問を受けた内容について調べ、取りまとめて重要事項を整理しておくこと(60分程度)。

<提出課題など>

適時指示する。

提出された課題やデータ報告に対しては、対面またはWebを通して、プログレスミーティング時または個別にフィードバックを行う。

<成績評価方法・基準>

提出された課題及び演習・ミーティング時のプレゼンテーション、質疑応答を評価する。

<テキスト>

特に指定しない。

<参考図書>

個別に指導・紹介する。

2022年度 後期

2.0単位

総合リハビリテーション学特論演習

森本 陽介

<授業の方法>

演習(対面授業および遠隔授業併用)

<授業の目的>

生体の構造と機能、さらにそれらの障害や疾病、特に循環機能と身体機能に関して、基礎的事項からup-to-dateな最近の進歩までを、個体レベルから組織・細胞レベル、さらに分子レベルに至る種々の段階で評価・解析する研究課題について、その課題の妥当性の検討及び倫理的配慮を踏まえ、研究計画の立案ならびに実験の準備を進める。その過程を基盤にして、基礎研究から臨床応用へと幅広い研究に対応できるような知識を得ることを目標とする。この科目は、研究科修士課程DP3及びDP4に掲げる思考・判断・表現及び意欲・態度を修得することを目指している。

また、この科目の担当者は、理学療法士として15年の経験があり、大学教員となった後も非常勤で定期的に臨床に携わる、実務経験のある教員であるため、生体の正常機能だけでなく病態の解析手法や知見についても言及し

ながら、研究の幅と深さを広げる。

<到達目標>

「基礎生体機能・病態解析学特論」、「総合リハビリテーション学特論演習」で修得した知識及び心臓リハビリテーションの基礎・研究知見をもとに、基礎研究から臨床応用へと幅広い研究に対応できるように知識を深く説明することができる。

<授業のキーワード>

心臓リハビリテーション、研究倫理、論文抄読、研究計画、データ解析

<授業の進め方>

研究倫理の研修と論文抄読と並行し、研究テーマ・デザインの検討を繰り返し、個々の実験・調査研究を指導する。定期的(週1~2回)に研究室のミーティングに出席し、論文抄読を通して、他の教員や大学院生、及び研究員、学部生らとの質疑応答のなかで、研究計画をブラッシュアップする。

<履修するにあたって>

定期的開催する研究室のプログレスレポート・ミーティング以外にも、指導教員との報告・連絡・相談を適宜行うこと。論文抄読レジュメ等の課題の提出期限を厳守すること。

<授業時間外に必要な学修>

先行研究調査や関連する分野にて必要な論文を検索しその論文抄読に努め、さらに事前に配布された参考資料等について十分に理解してから演習に臨むこと(60分程度)。演習後は、指摘や質問を受けた内容について調べ、取りまとめて重要事項を整理しておくこと(60分程度)。

<提出課題など>

適時指示する。

提出された課題やデータ報告に対しては、対面またはWebを通して、プログレスミーティング時または個別にフィードバックを行う。

<成績評価方法・基準>

提出された課題及び演習・ミーティング時のプレゼンテーション、質疑応答を評価する。

<テキスト>

特に指定しない。

<参考図書>

個別に指導・紹介する。

2022年度 前期

2.0単位

総合リハビリテーション学特論演習

松原 貴子

<授業の方法>

演習(対面授業および遠隔授業併用)

<授業の目的>

生体の構造と機能、さらにそれらの障害や疾病、特に疼

痛に関して、基礎的事項からup-to-dataな最近の進歩までを、個体レベルから組織・細胞レベル、さらに分子レベルに至る種々の段階で評価・解析する研究課題について、その課題の妥当性の検討及び倫理的配慮を踏まえ、研究計画の立案、実験ならびに得られた結果の解析と考察について指導する。その過程を基盤にして、基礎研究から臨床応用へと幅広い研究に対応できるような知識を得ることを目標とする。この科目は、研究科修士課程DP1、DP3及びDP4に掲げる知識・技能、思考・判断・表現及び意欲・態度を修得することを目指している。

また、この科目の担当者は、理学療法士として30年以上の経験があり、大学教員となった後も非常勤で定期的に臨床及び臨床研究に携わる、実務経験のある教員であるため、生体の正常機能だけでなく病態の解析手法や知見についても言及しながら、研究の幅と深さを広げる。

<到達目標>

「基礎生体機能・病態解析学特論」、「総合リハビリテーション学特論演習」、「総合リハビリテーション学特論演習」で修得した知識及び疼痛学の基礎・研究知見をもとに、基礎研究から臨床応用へと幅広い研究に対応できるように知識を深め説明することができる。

<授業のキーワード>

疼痛学、研究倫理、論文抄読、研究計画、データ解析

<授業の進め方>

研究倫理の研修と論文抄読と並行し、研究テーマ・デザインの検討を繰り返し、個々の実験・調査研究を指導する。定期的（週1～2回）に研究室のミーティングに出席し、論文抄読を通して、他の教員や大学院生、及び研究員、学部生らとの質疑応答のなかで、研究計画をブラッシュアップする。

<履修するにあたって>

定期的に開催する研究室のプログレスレポート・ミーティング以外にも、指導教員との報告・連絡・相談を適宜行うこと。論文抄読レジュメ等の課題の提出期限を厳守すること。

<授業時間外に必要な学修>

先行研究調査や関連する分野にて必要な論文を検索しその論文抄読に努め、さらに事前に配布された参考資料等について十分に理解してから演習に臨むこと（60分程度）。演習後は、指摘や質問を受けた内容について調べ、取りまとめて重要事項を整理しておくこと（60分程度）。

<提出課題など>

適時指示する。

提出された課題やデータ報告に対しては、対面またはWebを通して、プログレスミーティング時または個別にフィードバックを行う。

<成績評価方法・基準>

提出された課題及び演習・ミーティング時のプレゼンテーション、質疑応答を評価する。

<テキスト>

特に指定しない。

<参考図書>

個別に指導・紹介する。

2022年度 前期

2.0単位

総合リハビリテーション学特論演習

備酒 伸彦

<授業の方法>

遠隔オンデマンドで講義する。

<授業の目的>

「地域リハビリテーションの概念」と「ケアに関わる者が果たすべき役割」を知ることにより、有為な理学療法士としての発想と態度を獲得し「チーム医療や総合的福祉、地域社会開発の担い手となることができる」能力を担保する。

本科目は、本研究科が養成しようとする研究者像にとって必須な、「地域リハビリテーションの概念」と「ケアに関わる者が果たすべき役割」を知ることにより、有為な研究者としての発想と態度を獲得する。これはDPにおける「チーム医療や総合的福祉、地域社会開発の担い手となることができる」を担保する一つとなる。

この科目の担当者は病院でのリハビリテーション11年の臨床経験、地域リハビリテーション11年の現場経験を有し、現在も地域リハビリテーションに関わっている実務経験のある教員であることから、実際に役立つ発想と態度を伝え、教員・学生の討論により一層のその理解を深める。

<到達目標>

地域リハビリテーションにかかる歴史、発展過程について理解している。

地域リハビリテーションの現状について理解している。上記2点を通じて、将来の地域リハビリテーションを展望できる。

<授業の進め方>

地域リハビリテーションにかかる文献購読、その他情報収集。

教員・学生による討論。

<授業時間外に必要な学修>

地域リハビリテーションにかかる課題に関する考察。

<成績評価方法・基準>

文献、情報収集の進捗とその成果、教員・学生間討論の成果により評価する。

2022年度 後期

2.0単位

総合リハビリテーション学特論演習

松原 貴子

< 授業の方法 >

演習（対面授業および遠隔授業併用）

< 授業の目的 >

生体の構造と機能、さらにそれらの障害や疾病、特に疼痛に関して、基礎的事項からup-to-dateな最近の進歩までを、個体レベルから組織・細胞レベル、さらに分子レベルに至る種々の段階で評価・解析する研究課題について、その課題の妥当性の検討及び倫理的配慮を踏まえ、研究計画の立案、実験ならびに得られた結果の解析と考察について指導する。その過程を基盤にして、基礎研究から臨床応用へと幅広い研究に対応できるような知識を得ることを目標とする。この科目は、研究科修士課程DP1、DP3及びDP4に掲げる知識・技能、思考・判断・表現及び意欲・態度を修得することを目指している。また、この科目の担当者は、理学療法士として30年以上の経験があり、大学教員となった後も非常勤で定期的に臨床及び臨床研究に携わる、実務経験のある教員であるため、生体の正常機能だけでなく病態の解析手法や知見についても言及しながら、研究の幅と深さを拡げる。

< 到達目標 >

「基礎生体機能・病態解析学特論」、「総合リハビリテーション学特論演習」、「総合リハビリテーション学特論演習」、「総合リハビリテーション学特論演習」で修得した知識及び疼痛学の基礎・研究知見をもとに、基礎研究から臨床応用へと幅広い研究に対応できるように知識を深め説明することができる。

< 授業のキーワード >

疼痛学、研究倫理、論文抄読、研究計画、データ解析、論文構成

< 授業の進め方 >

研究倫理の研修と論文抄読と並行し、研究テーマ・デザインの検討を繰り返し、個々の実験・調査研究を指導する。定期的（週1～2回）に研究室のミーティングに出席し、論文抄読を通して、他の教員や大学院生、及び研究員、学部生らとの質疑応答のなかで、研究計画をブラッシュアップする。

< 履修するにあたって >

定期的に開催する研究室のプログレスレポート・ミーティング以外にも、指導教員との報告・連絡・相談を適宜行うこと。論文抄読レジュメ等の課題の提出期限を厳守すること。

< 授業時間外に必要な学修 >

先行研究調査や関連する分野にて必要な論文を検索しその論文抄読に努め、さらに事前に配布された参考資料等

について十分に理解してから演習に臨むこと（60分程度）。演習後は、指摘や質問を受けた内容について調べ、取りまとめて重要事項を整理しておくこと（60分程度）。

< 提出課題など >

適時指示する。

提出された課題やデータ報告に対しては、対面またはWebを通して、プログレスミーティング時または個別にフィードバックを行う。

< 成績評価方法・基準 >

提出された課題及び演習・ミーティング時のプレゼンテーション、質疑応答を評価する。

< テキスト >

特に指定しない。

< 参考図書 >

個別に指導・紹介する。

2022年度 後期

2.0単位

総合リハビリテーション学特論演習

備酒 伸彦

< 授業の方法 >

遠隔オンデマンドで講義する。

< 授業の目的 >

「地域リハビリテーションの概念」と「ケアに関わる者が果たすべき役割」を知ることにより、有為な理学療法士としての発想と態度を獲得し「チーム医療や総合的福祉、地域社会開発の担い手となることができる」能力を担保する。

本科目は、本研究科が養成しようとする研究者像にとって必須な、「地域リハビリテーションの概念」と「ケアに関わる者が果たすべき役割」を知ることにより、有為な研究者としての発想と態度を獲得する。これはDPにおける「チーム医療や総合的福祉、地域社会開発の担い手となることができる」を担保する一つとなる。

この科目の担当者は病院でのリハビリテーション11年の臨床経験、地域リハビリテーション11年の現場経験を有し、現在も地域リハビリテーションに関わっている実務経験のある教員であることから、実際に役立つ発想と態度を伝え、教員・学生の討論により一層のその理解を深める。

< 到達目標 >

地域リハビリテーションにかかる歴史、発展過程について理解している。

地域リハビリテーションの現状について理解している。上記2点を通じて、将来の地域リハビリテーションを展望できる。

< 授業の進め方 >

地域リハビリテーションにかかる文献購読、その他情報収集。

教員・学生による討論。

< 授業時間外に必要な学修 >

地域リハビリテーションにかかる課題に関する考察。

< 成績評価方法・基準 >

文献、情報収集の進捗とその成果、教員・学生間討論の成果により評価する。

2022年度 前期

1.0単位

ソーシャルワーク方法特論

九十九 綾子

< 授業の方法 >

講義、演習

< 授業の目的 >

この科目は総合リハビリテーション学部のDPに掲げる、人と社会を見据える広く深い学識を備え、教育・研究・高度な専門職を担うための知識と技能を身につけることを目指す。

ソーシャルワーク実践について概観し、特に行動変容アプローチと解決志向アプローチに焦点を当て、その理論と実践について理解することを目的とする。

< 到達目標 >

1. ソーシャルワーク実践に関心を持ち、支援過程を考えることができる。(態度・習慣、技能)
2. 行動変容アプローチの理論と実際について理解することができる。(知識)
3. 解決志向アプローチの理論と実際について理解することができる。(知識)
4. 実践事例について各理論から考察することができる。(技能)

< 授業のキーワード >

ソーシャルワーク実践、行動変容アプローチ、解決志向アプローチ

< 授業の進め方 >

講義形式で説明するとともに、演習形式で事例を検討する。

< 履修するにあたって >

事前に配布された資料を熟読してから講義に臨んでいただきたい。

< 授業時間外に必要な学修 >

事前学習として、関連書籍や資料を読んでキーワードを確認し、レポートにまとめてください。(60分程度)

事後学習として、授業の内容を整理し、知識が定着するように復習してください。(60分程度)

< 提出課題など >

毎回の授業時に、レポート提出を求めます。提出されたレポートに対して、総評などを行います。

< 成績評価方法・基準 >

講義における討論内容(40%)、課題提出(30%)、課題

の内容(30%)で評価する。

< テキスト >

講義時に資料を配布する。

< 授業計画 >

第1回 ソーシャルワーク実践

オリエンテーションを行う。

ソーシャルワーク実践の発展について概観する。

第2回 行動変容アプローチの理論

行動変容アプローチの理論を理解する。

第3回 行動変容アプローチの実際

行動変容アプローチの実際を理解する。

第4回 解決志向アプローチの理論

解決志向アプローチの理論を理解する。

第5回 解決志向アプローチの実際

解決志向アプローチの実際を理解する。

第6回 実践事例の考察

実践事例について各理論から考察する。

第7回 行動変容アプローチの発展

行動変容アプローチの発展として認知行動療法を取り上げ、マインドフルネスを体験する。

第8回 総括と課題の検討

ソーシャルワーク実践について総括し、課題・展望を考える。

2022年度 前期

2.0単位

ソーシャルワーク論

宮崎 清恵、KHAN MD MEHEDI HASAN、阪田 憲二郎、九十九 綾子、水上 然

< 授業の方法 >

原則対面での講義とディスカッションで行う

< 授業の目的 >

この科目は総合リハビリテーション学研究科のDPに掲げる、人と社会を見据える広く深い学識を備え、教育・研究・高度な専門職を担うための知識と技能を身につけることを目指す。

専門基礎科目に属し、専門科目である「総合福祉実践特論演習」「総合福祉実践特別研究」への導入科目として位置づけられる。

幅広いソーシャルワークの分野に共通の知識である、価値と倫理、知識、技術について修得し、ソーシャルワークの視点・目標・価値・倫理、構成要素、実践過程、役割、実践理論等について理解できるようになることを目指す。

自らが理解できるだけでなく協働する他の専門職に社会福祉学及び社会福祉実践についてわかりやすく説明できるようなることを目的とする。

< 到達目標 >

1. 自らの言葉で、ソーシャルワークを他者に正確に伝

えることができる。

2. 現在の日本の社会におけるソーシャルワークの役割について考察ができる。

3. ソーシャルワークが果たすべき課題について自身の考えを述べるができる。

< 授業のキーワード >

ソーシャルワークの役割と機能、価値と倫理、技術、実践理論

< 授業の進め方 >

4名の教員によるオムニバス授業であり、各教員の講義とディスカッションにより行う。

< 履修するにあたって >

各担当教員の指示により予習と復習を行うことに加え、ソーシャルワークの価値・倫理、知識、技術の基礎的な知識が前提となる。

< 授業時間外に必要な学修 >

各講師の指示に従い、文献を読みレポートにまとめるなどの課題が課せられる。課題の達成に3時間程度の学習が必要である。

< 提出課題など >

適宜講師が課題レポートを課すが、その評価については授業中にコメントを行う。

< 成績評価方法・基準 >

課題レポート70%、授業中の発言内容30%で評価する。

< テキスト >

必要に応じて授業中に紹介、あるいは資料を配布する。

< 授業計画 >

第1回 ソーシャルワークの課題(対象)

ミクロ・メゾ・マクロの対象把握について学ぶ。

第2回 ソーシャルワーク実践と理論の歴史

実践の理念と役割について歴史的な変遷とも含めて学ぶ。

第3回 ソーシャルワークの価値と倫理

ソーシャルワークの使命・目的・価値について学ぶ。

第4回 コミュニケーション技法

バーバルコミュニケーションとノンバーバルコミュニケーションの内容と応用を学ぶ。

第5回 面接技法

面接技法の実際についてロールプレイを通して習得する。

第6回 ソーシャルワーク(個別援助)の展開過程

インテークを学ぶ

第7回 ソーシャルワーク(個別援助)の展開過程

アセスメント(マッピング技法を含む)を学ぶ。

第8回 ソーシャルワーク(個別援助)の展開過程

プランニング・インターベンション・モニタリング・エバリュエーション・ターミネーションを学ぶ

第9回 グループワークの展開過程

実践例をとおして理解する。

第10回 コミュニティワークにおけるアセスメント

事例をとおして理解する。

第11回 ジェネラリスト・ソーシャルワーク

ジェネラリスト・ソーシャルワークについて概観する。

第12回 ソーシャルワークの理論と実践
エンパワーメントアプローチについて学ぶ。

第13回 ソーシャルワークの理論と実践
ソーシャルワークの評価について学ぶ。

第14回 ソーシャルワークの理論と実践
スーパービジョンについて学ぶ。

第15回 ソーシャルワークの理論と実践
社会福祉実践の中でのソーシャルワークの価値について学ぶ。

2022年度 前期

1.0単位

地域福祉特論

橋本 力

< 授業の方法 >

講義

< 授業の目的 >

本科目では、地域福祉領域における多様な福祉課題およびその支援方法について理解することを目的とする。この科目は学部DPの4を達成することを目指しており、地域社会における多様な課題の理解、およびその解決にむけて総合的かつ多角的な視点から提言できるようになることを目的とする。

< 到達目標 >

地域福祉の視座から捉えた福祉ニーズについて説明できる。(知識)

地域福祉実践におけるソーシャル・サポートの理論と実際について説明できる。(知識)

コミュニティソーシャルワークの理論と実際について説明できる。(知識)

地域包括ケアシステムの展開方法と実際について説明できる。(知識)

上記 ~ の知識を習得することで、地域福祉実践に求められる取り組みについて、自らの見解を多角的に示すことができる(態度・習慣、技能)。

< 授業のキーワード >

地域福祉、ソーシャル・サポート、コミュニティソーシャルワーク、地域包括ケアシステム

< 授業の進め方 >

授業計画に基づき、講義および論文の講読、またディスカッションを行うことで、授業を進めていく。

< 履修するにあたって >

授業では、講義に加え、課題の発表、ディスカッション等を行いながら進めるため、地域福祉領域に関する多様なテーマについて、問題意識をもって取り組んでもらいたい。

< 授業時間外に必要な学修 >

講義において紹介する文献等を事前に読んでおくこと。

(目安として1時間)

< 提出課題など >

講義時に課題を指示する。課題の講評は後日授業中に行う。

< 成績評価方法・基準 >

講義時の課題(発表課題の内容、ディスカッションへの参加)50%、レポート50%

< 参考図書 >

講義において適宜紹介する。

< 授業計画 >

第1回 地域福祉の視座から捉えた福祉ニーズの実際
地域福祉の視点から捉えた福祉ニーズの多様性について理解する。

第2回 地域福祉の視座から捉えた福祉ニーズの実際
地域において潜在化したニーズの現状、またそれらのニーズの把握における課題等について理解する。

第3回 地域福祉実践におけるソーシャル・サポートの理論と実際
フォーマル・サービス、インフォーマル・サポートを含んだソーシャル・サポートの構造や機能について理解する。

第4回 地域福祉実践におけるソーシャル・サポートの理論と実際

地域福祉実践とソーシャル・サポートとの関係性およびソーシャル・サポートの実際や課題について理解する。

第5回 コミュニティソーシャルワークの理論と実際
コミュニティソーシャルワークの理論や展開方法を整理するとともに、地域福祉実践とコミュニティソーシャルワークの関係性について理解する。

第6回 コミュニティソーシャルワークの理論と実際
コミュニティソーシャルワークの実際およびその課題について理解する。

第7回 地域包括ケアシステムの構築と実際
地域包括ケアシステムの理論と展開方法について整理するとともに、地域福祉実践との関係性について理解する。

第8回 地域包括ケアシステムの構築と実際
地域包括ケアシステムの実際とその課題について理解する。

2022年度 前期

1.0単位

データサイエンス

齋藤 政彦

< 授業の方法 >

遠隔授業

< 授業の目的 >

インターネットやコンピュータサイエンスの発達におい

て、様々な分野において計算機科学、統計学などをベースとしてデータから有意義な情報を引き出すことができるようになった。各専攻で学ぶ大学院生にとって、データサイエンスを学ぶと、各自の研究範囲を拡げ、社会の課題を解決することのできる可能性を引き出すものである。

< 到達目標 >

社会におけるデータ・AI利活用を理解し、データを扱う上での基礎を身につけ、データに関する留意点・情報セキュリティに関して必要な知識・考え方を身につける。

< 授業のキーワード >

インターネット、ビッグデータ、データサイエンス、AI、統計学、データ利活用

< 授業の進め方 >

遠隔授業

< 履修するにあたって >

社会におけるデータ・AI利活用を理解し、データを扱う上での基礎を身につけ、データに関する留意点・情報セキュリティに関して必要な知識・考え方を身につけるとともに、パソコンを使って実際のデータ解析についても解説するので、パソコンを使って復習できる事が望ましい。

< 授業時間外に必要な学修 >

各回の講義の復習としてエクセル等を使った実際のデータ解析を行ってもらおう。また、データの取得方法等について各自学んでもらおう。

< 提出課題など >

毎回の授業後にコミュニケーションシートを提出する。最終課題に関するレポートを提出する。

< 成績評価方法・基準 >

毎回のコミュニケーションシートによる評価50%、最終レポートが50%で評価する。

< テキスト >

『データサイエンス講座1 データサイエンス基礎』

齋藤政彦・小澤誠一・羽森茂之・南知恵子 編
培風館

ISBN:978-4-563-01610-4

< 参考図書 >

特に指定なし

< 授業計画 >

第1回(4/13) 社会におけるデータ・AI活用1
データサイエンスの必要性、ビッグデータ、IoT、AI活用について学ぶ

第2回(4/20) 社会におけるデータ・AI活用2
社会で活用されているデータ、データ・AIの活用領域、データの可視化について学ぶ

第3回(4/27) データを読む
データの種類、データの分布、データのばらつき、相関関係について学ぶ

第4回(5/11) データを説明する
データの表現、グラフによる可視化、データの比較につ

いて学ぶ

第5回(5/18) データを扱う

データ解析ツールによるデータ解析を学ぶ

第6回(5/25) データを扱う上での留意事項

データやAIを扱う上で、法規、倫理的側面、個人の権利保護について学ぶ

第7回(6/1) 統計的データ解析

新薬の治験や健康データにおける統計的推定、仮説検定について学ぶ

第8回(6/8) 最終課題

与えられたデータセットに対して課題を設定し、その課題の解決を提案する。

2022年度 後期

2.0単位

統計学特論

森谷 義哉

< 授業の方法 >

講義(対面授業)

遠隔授業に変更された場合

Zoomのミーティング情報を最下段の「遠隔授業情報」の欄に記載している。

< 授業の目的 >

DPの1番目である「人と社会を見据える広く深い学識を備え、教育・研究・職を担うための知識や技能を身につけている」に関連して、まず、保健・医療・福祉の専門家や研究者にとって必要不可欠な統計学の知識と実際のデータを分析するスキルを身に付ける。

その上で、DPの2番目である「DPの1番目で示した学識をもとに、自ら課題を発見し、その解決方法を見出すことができる」に関連して、保健・医療・福祉の分野において、自分が直面する課題を明確にし、データ解析を行うことによって解決できるようになることを目指す。

そのために、統計学の基本的な知識を習得すると同時に、統計解析ソフトウェアを用いて必要なデータ解析を行うことができるようになることを目的とする。

< 到達目標 >

1. 統計学の基本的な知識について説明できる(知識)。
2. 統計解析ソフトウェアを操作して、多変量解析の代表的な方法を実行することができる(技能)。
3. 保健・医療・福祉の分野における現象を考察するために、自ら課題を設定して、データを収集し、分析することができる(思考・判断・表現)。

< 授業のキーワード >

確率、推定、仮説検定、分散分析、回帰分析、多変量解析

< 授業の進め方 >

1. スライドを中心に使用して板書も併用した講義形式で進めるが、授業内容の理解を深めるために受講生から

の意見や質問、または受講生間の議論を随時取り入れた対話型の授業形式を重視する。

2. 必要な知識を習得した後は、受講生のスキルに合わせて統計解析ソフトウェアを用いた演習を行う。

< 履修するにあたって >

数学や統計学に関する知識、及びPCやソフトウェアの操作に関するスキルは前提としないが、それらを習得するための積極的な姿勢や受講生全体がレベルアップするために他の受講生と協力し合う姿勢を期待する。

< 授業時間外に必要な学修 >

・事前学習：授業の進捗状況に応じて、次回の授業内容の理解できない部分を明らかにしておく等の予習を行って授業に臨むこと(1時間程度)。

・事後学習：配布したプリント資料を読み返したり、参考書で確認したり、授業で残った演習問題を解いたり、授業中に行ったデータ解析を再度行う等の復習を行うこと(2時間程度)。理解を深めるのに役立つので、レポート課題があるときは積極的に取り組んで欲しい。授業内容の理解度を確認するために、次回の授業中に小テストを行うことがある。

< 提出課題など >

1. 対話型の授業形式を重視しているので、授業内容について自由な意見や質問を期待する。
2. 授業内容の理解を深めるために、計算やデータ解析を伴うレポート課題を出すことがある。提出されたレポートについては、次回の授業中に解答例を提示し、解説や講評を行うとともに、受講生と議論する。

< 成績評価方法・基準 >

・成績評価方法

授業中の発表50%・小テスト・レポート50%を基準として総合的に評価する。

・成績評価基準

1. 授業中の発表では、毎回の授業の基本的な知識の理解度と各自の課題の発見・解決に対する意識の程度を評価する。
2. 小テストとレポートでは、授業内容に関する知識の理解度と分析方法の習得度を評価する。
3. 1と2の評価に基づいて、到達目標をどの程度達成しているかに応じて、秀・優・良・可・不可を判断する。

< テキスト >

プリント資料を配布する。

< 参考図書 >

授業中に適宜指示する。

< 授業計画 >

第1回 統計学の基本的な考え方

簡単な事例を取り上げながら、統計学の基本的な考え方について学ぶ。

第2回 統計学の基礎

データの整理(1次元データ)

1次元データの基本的な知識(度数分布表、ヒストグラ

ム、平均値、中央値、最頻値、分散、標準偏差、標準化等)を習得する。

第3回 統計学の基礎

データの整理(2次元データ)

2次元データの基本的な知識(散布図、共分散、相関係数等)を習得する。

第4回 統計学の基礎

確率・確率変数・確率分布

最初に、確率の基本的な知識(確率、密度関数、期待値、分散等)を習得し、代表的な確率分布(正規分布、t分布、カイ2乗分布、F分布等)について学ぶ。

第5回 推定

推定の考え方

推定の基本的な考え方を理解する。

第6回 推定

点推定・区間推定

点推定と区間推定について学ぶ。

第7回 仮説検定

検定の考え方

検定の基本的な考え方を理解する。

第8回 仮説検定

検定(1標本問題)

母平均の検定や母分散の検定等について学ぶ。

第9回 仮説検定

検定(2標本問題)

母平均の差の検定や母分散の比の検定等について学ぶ。

第10回 仮説検定

分割表の検定

分割表の検定について学ぶ。

第11回 分散分析

一元配置分散分析

一元配置分散分析の基礎を理解する。

第12回 分散分析

二元配置分散分析

二元配置分散分析の基礎を理解する。

第13回 多変量解析

回帰分析

回帰分析の基礎となる単回帰分析と重回帰分析を理解する。

第14回 多変量解析

回帰分析

回帰分析の応用として、ロジスティック回帰分析について学ぶ。

第15回 多変量解析

回帰分析以外の分析

回帰分析以外の多変量解析の手法として、因子分析、主成分分析、判別分析、クラスター分析等について学ぶ。

2022年度 前期

1.0単位

脳・精神・神経機能解析学特論A

阪井 一雄、中前 智通

<授業の方法>

阪井担当分、中前担当分共に、on demand の遠隔講義とします。

4月及び5月の木曜日に時間割上講義を張り付けているが、その日に登校しても対面の講義は無いので、注意するように。

<授業の目的>

この講義では、ディプロマポリシー 人と社会を見据える広く深い学識を備え、教育・研究・職を担うための知識や技能を身につけている。(知識・技能)、の基礎的能力として、先行研究や文献を広く学び、その上で考察を進めるという研究方法を身につけている。(思考・判断・表現)ことを実現するために、脳の障害に起因する、精神障害、運動機能障害、認知機能障害等について、学士過程において習得すべき知識は、完全に理解することを前提とする。これらの知識を前提にして、精神症状、運動症状、認知機能障害の脳局在、薬理学的治療、非薬理学的治療について現在進行中の議論を批判的に理解し、今後の研究において、現在前提となっていること、現在明らかになっていないことを峻別する。

<到達目標>

脳機能障害について、その原因や要因、神経病理・精神病理過程、種々の症状の出現の原因や要因、その生物学的あるいは非生物学的治療法について、現在までに明らかになっている知見と、現在の議論の焦点を理解し、自らの研究が答えようとしている疑問を明確化詳細化し、それに基づいて研究計画を立てることを目標とする。

<授業のキーワード>

精神医学 認知症 リハビリテーション

<授業の進め方>

講義形式で行う。

<履修するにあたって>

講義時間以外に、レポート提出など1時間程度の自習時間を想定している。

<授業時間外に必要な学修>

講義内容について予習復習各60分程度

各講師の担当分に対し、講義で学習したことを、A4 1枚に40字×40行(wordの設定(半角)で40字)のページ設定で、各教員に電子メールで提出すること。(阪井分1枚、中前分1枚)

<提出課題など>

講義内容についてのレポート提出を課題とする。

<成績評価方法・基準>

レポートの内容で評価する。

その他、教員への質問の内容などに評価すべき点があれば加点する。

<テキスト>

指定図書は特になし。

必要であれば資料はその都度配布する。

<授業計画>

第1回 認知症の概念とその分類

第1回～4回まで、担当 阪井 一雄

認知症の定義、認知症と軽度認知障害Mild Cognitive Impairment 等の周辺概念との関連について学びます。

第2回 アルツハイマー病の概念、症状、診断、評価と治療

アルツハイマー病の定義、臨床診断の方法、検査結果、症状、治療について学びます。

第3回 アルツハイマー病以外の変性性認知症の原因、診断、治療

レビー小体型認知症、前頭側頭変性症、等のアルツハイマー病以外の変性性認知症の定義、症状、診断、治療等について学びます。

第4回 続発性認知症の原因、症状、診断と治療

血管性認知症を始めとした、続発性認知症の定義、症状、診断や治療について学びます。

第5回 統合失調症に対するリハビリテーション(1)

第5回から8回 担当 中前 智通

統合失調症の概念、症状、行動特性及びそのリハビリテーションの概要について学びます。

第6回 統合失調症に対するリハビリテーション(2)

統合失調症の状態像を、動画とその解説を通して理解します。

第7回 うつ病に対するリハビリテーション

うつ病の概念、症状、行動特性及びそのリハビリテーションの概要について、解説や動画を通して学びます。

第8回 神経症圏の疾患に対するリハビリテーション

神経症圏の疾患(不安障害、摂食障害、強迫障害など)の概念、症状、行動特性及びそのリハビリテーションの概要について、解説や動画を通して学びます。

2022年度 前期

1.0単位

脳・精神・神経機能解析学特論B

坂本 年將、森川 孝子

<授業の方法>

対面で行います。

<授業の目的>

修士論文を完成するために必要な脳、精神、神経機能の解析に関わる基礎的、専門的知識を習得します。

科目担当者は理学療法士または作業療法士としての実務・研究経験を有する者である。

<到達目標>

講義で習得した知識を自らの研究能力または実務能力を高めるために使えるようになること。

<授業のキーワード>

脳科学、心理学、精神医学、神経科学

<授業の進め方>

論文を講読し、その内容に関して担当教員と議論しながら進めていきます。

<履修するにあたって>

教科内容についての問題意識を持ち、能動的な姿勢で講義に臨んで下さい。

<授業時間外に必要な学修>

講義内容を整理するために、週1時間程度の学修が必要です。

<成績評価方法・基準>

レポート課題や講義中のプレゼンテーション課題の成績をもって評価します。

各担当教員がそれぞれ100点満点で評価し、その総合点を本科目の成績とします。

<授業計画>

第1回 脳科学研究の現状

脳科学研究の現状について学びます(坂本)

第2回 脳科学研究法

脳科学研究のさまざまな方法について学びます(坂本)

第3回 脳科学研究とリハビリテーションの実践(1)

脳科学研究とその知見を活用したリハビリテーションの現状について学びます(坂本)

第4回 脳科学研究とリハビリテーションの実践(2)

脳科学研究とその知見を活用したリハビリテーションの現状について学びます(坂本)

第5回 フィジカルヘルスとメンタルヘルス

身体と精神の繋がりから、最適な心身の在り方を構築するための介入方法について考察する。(森川)

第6回 認知行動理論、認知行動療法とメンタルヘルス

ひとの感情に影響を与える、ものごとのとらえ方としての認知について考察し、認知行動療法により、心身を健康に保つための介入方法について考察する。(森川)

第7回 メンタルヘルスの評価尺度

精神心理系の評価尺度について紹介し、研究でどのような使い方ができるかについて考察する。(森川)

第8回 評価尺度の分析

精神心理系の評価尺度の解釈、統計手法などについて考察する。(森川)

2022年度 前期

1.0単位

脳・精神・神経機能解析学特論C

藤原 瑞穂、小川 真寛

<授業の方法>

講義と演習

< 授業の目的 >

私たちの日常は作業によって満たされている。どのような作業をどのように行うかによって、私たちは自分自身をつくりあげてゆく。この授業は、人々の作業と健康の関係を探求するための基礎となる関連理論の概要を理解し、各種研究方法を学修することを目的としている。この科目は、作業療法士としての実務経験がある教員が担当する。

< 到達目標 >

1. 人々の作業に焦点をあてた研究への取り組みについて、自らの見解をもち、論じることができる。関連論文を読み、自ら計画する研究課題に応用することができる。
2. 脳・精神・神経機能関連領域、特に精神疾患に関する先行研究を読み解き、自己の研究内容との関連性について言及することができる。
3. 先行研究や文献で専門分野に関わる知識を広く学び、その上で研究に関する考察を深める方法を身につけることができる。

< 授業のキーワード >

作業，作業活動，認知機能

< 授業の進め方 >

各教員のテーマに沿った講義形式と事前学修のプレゼンテーションで進めるが、授業内容を理解を深めるために、受講者との討論を重視している。e-learning（ドット・キャンパス）、Zoomを用いる予定。

特別警報（すべての特別警報）または暴風警報発令の場合（大雨、洪水警報等は対象外）の本科目の取扱いについて 授業を実施します。ただし、避難指示、避難勧告が発令されている場合はご自身の安全を最優先にし、自治体の指示に従って行動してください。

< 履修するにあたって >

履修者にはdotcampsを通じて講義資料を配布します

< 授業時間外に必要な学修 >

各回の内容について1時間程度の予習と復習が必要

< 提出課題など >

レポートやプレゼンテーション課題があります。授業のなかでフィードバックします。

< 成績評価方法・基準 >

授業中の課題80%，レポート20%

< 授業計画 >

第1回 人と作業

人，作業，環境の相互作用についての知識を得る 遠隔（藤原）

第2回 人と作業

作業遂行における主観的経験を捉えるための研究を紹介する オンデマンド（藤原）

第3回 人と作業

作業遂行における主観的経験を捉えるための研究手法を紹介する オンデマンド（藤原）

第4回 作業と研究

主観的経験に焦点をあてた研究論文を読み、討論する 遠隔でのディスカッションを予定（藤原）

第5回 作業療法とそのアイデンティティ

作業療法について知る機会とし、そのアイデンティティと臨床現場の変遷につ

いて学ぶ。（オンデマンド配信を予定）（小川）

第6回 自職種のアイデンティティ

受講生が自職種のアイデンティティについてディスカッションを通じて考え、

相互の理解、知見を深める。（遠隔でのディスカッションをメインとした授業予定）（小川）

第7回 事例研究からの研究展開

臨床での事例の疑問を研究に結び付ける、拡大する方法を紹介し、研究疑問の

育て方を具体例から学ぶ。（オンデマンド配信を予定）（小川）

第8回 事例研究からの研究展開

各受講生が各自の臨床経験等を通じて考えた研究計画を発表し議論をする。

（遠隔でのディスカッションをメインとした授業予定）（小川）

2022年度 後期

1.0単位

発展途上国福祉特論

佐野 光彦

< 授業の方法 >

対面授業を予定しています。

学生の報告をもとに、ディスカッションにより進めていきます。

特別警報（すべての特別警報）または暴風警報発令の場合（大雨、洪水警報等は対象外）

の本科目の取扱いについて

通常授業時の取扱いと同様に、休講とします。

解除・発令時刻と授業・試験開始時限等、取扱いの詳細については大学ホームページの

以下の場所に記載されているので、ご確認ください。

大学ホームページで確認

< 授業の目的 >

この講義は、大学院DP1の人と社会を見据える広く深い学識を備え、教育・研究・職を担うための知識や技能を身につける、DP2の自ら課題を発見し、その解決方法を見出すことができることを、目指しています。発展途上国における福祉レジャー構築の未整備の原因と、その改善に向けての新しいアイデアを考えることができるようになる。

担当者は、国内外のNGOや社会福祉協議会の理事やアドバイザーを20年以上勤めており、国際会議などの運営にも携わった実務経験がある。これらの経験は、発展途上国のNGOや社会福祉協議会の具体的な動きを学生にタイムリーに伝えることができる。また、学外からNGOや社会福祉協議会などの職員をゲストスピーカーとして招き、講義に活かしている。

<到達目標>

発展途上国の福祉問題を考えるために必要な様々な知識を身に付ける。

発展途上国の福祉政策に関する文献を深く読み込めるようになる。

途上国の福祉に関する法律、制度、政策のみならず、社会全体のしくみを理解できるようになる。

NGO、様々な職場やコミュニティで福祉マインドを持ったリーダーになる。

発展途上国のあたらしい福祉政策を考えることができるようになる。

<授業のキーワード>

発展途上国、差別、社会的排除、包摂、障がい者、マイノリティー

<授業の進め方>

本や論文を読み、その内容を発表してもらいます。そして、議論を中心に講義を展開して行きます。

災害関連

(1) 特別警報または暴風警報発令の場合の取扱い

遠隔授業のため、原則として予定どおり授業実施をお願いいたします。ただし、自宅等の学外において通信環境が整わないなどやむを得ない事情に限り、休講を認めるものとします。

つきましては、授業毎に発令時の対応が異なりますため、シラバス「授業の方法」欄の

最下部に授業実施の有無についてご記入いただきますようお願いいたします。

文例を作成しましたので、以下の文例を参考にさせていただきますよう、お願いいたします。

自治体より避難指示、避難勧告が発令されている場合は、その都度授業の休講、中断を判断し、ご自身の安全を最優先に考えて対応してください。

警報発令時も授業を実施する場合（基準を適用しない場合）の文例

特別警報（すべての特別警報）または暴風警報発令の場合（大雨、洪水警報等は対象外）

の本科目の取扱いについて

授業を実施します。

ただし、避難指示、避難勧告が発令されている場合はご自身の安全を最優先にし、自治

体の指示に従って行動してください。

警報発令時に休講とする場合（基準を適用する場合）の文例

特別警報（すべての特別警報）または暴風警報発令の場合（大雨、洪水警報等は対象外）

の本科目の取扱いについて

通常授業時の取扱いと同様に、休講とします。

解除・発令時刻と授業・試験開始時限等、取扱いの詳細については大学ホームページの

以下の場所に記載されているので、ご確認ください。

(2) 公共交通機関運休の場合の授業の取扱い

こちらの取扱いについては、原則として学生は自宅から受講することとなりますので、

休講の取扱いは行わず、授業を実施するものとします（シラバス追加の必要はございません）。

ただし、先生が研究室等から遠隔授業を行う場合など運休時に授業が実施できない場

合は、教務センターにご連絡いただけましたら、休講となる旨を学生に周知いたします。

(3) 緊急事態が発生した場合の取扱い

教務センター所長の判断により措置するものとし、その内容を速やかに大学ホームペ

ージ（学内情報サービス）に掲示することで、周知するものとします。

<履修するにあたって>

世の中の動きを知るためにも、新聞、雑誌、ニュースなどを見ておいて下さい。授業中に論文や本の紹介を行います。できるだけ読んでください。

<授業時間外に必要な学修>

次週の内容についてのプリントを配布した場合は、必ず読んで講義に望んでください。（60分程度）

<提出課題など>

毎回、課題を決めて発表してもらいます。また、レポート作成も予定しています。（内容は、講義の中で発表します）課題例：発展途上国に関する福祉問題には、どのようなものがありますか？事前にレポートの書き方などを伝え、提出してもらったレポートは、評価をし返却する。

<成績評価方法・基準>

講義中の質疑・発表（70%）、講義内での意見（10%）、レポート（20%）として評価します。

<テキスト>

使用しません。配布プリントやビデオを教材に用います。

<参考図書>

授業中で適宜紹介する。

<授業計画>

第1回 先進国と発展途上国

第1回は、オリエンテーションとして講義の進め方などを説明する。国際関係など主題と関係する文献を読んで

発表、ディスカッションを行う。

第2回 発展途上国の置かれた現状

発展途上国は、なぜ貧しいのかなど主題と関係する文献を読んで発表、ディスカッションを行う。

第3回 発展途上国と福祉問題

発展途上国の高齢者問題など主題と関係する文献を読んで発表、ディスカッションを行う。

第4回 発展途上国と福祉問題

発展途上国の障がい者問題などの主題と関係する文献を読んで発表、ディスカッションを行う。

第5回 バングラデシュの貧困

絶対的貧困問題など主題と関係する文献を読んで発表、ディスカッションを行う。

第6回 バングラデシュの差別

バングラデシュの清掃労働者への差別など主題と関係する文献を読んで発表、ディスカッションを行う。

第7回 バングラデシュの福祉問題

バングラデシュの高齢者問題など主題と関係する文献を読んで発表、ディスカッションを行う。

第8回 バングラデシュの福祉問題に

バングラデシュの障がい者問題などの主題と関係する文献を読んで発表、ディスカッションを行う。最終講義は、まとめを行う。

2022年度 後期

1.0単位

福祉文化特論

小坂 享子、KHAN MD MEHEDI HASAN

< 授業の方法 >

講義を中心とする。

< 授業の目的 >

この講義は、大学院DP1の人と社会を見据える広く深い学識を備え、教育・研究・職を担うための知識や技能を身につける、DP2の自ら課題を発見し、その解決方法を見出すことができることを目指している。福祉文化の概念には、福祉サービスの文化的質の向上を目指す要素と、社会福祉が今まで培ってきた価値観を一般社会に浸透させ社会のありようを変えていこうという二つの要素が含まれているが、この授業では、福祉文化とは何かについて理解したうえで、福祉文化の醸成に向けた社会的・地域的取り組みについて考察する。

< 到達目標 >

人々が生活課題を抱える背景について説明できる。

福祉文化とは何かについて表現できる。

福祉文化醸成に向けて必要とされる能力を身につける。

< 授業のキーワード >

生活課題 社会変革 福祉文化の醸成

< 授業の進め方 >

講義とディスカッションを中心に進める。

受講生がもつテーマに応じた内容を取り入れながら福祉文化に関わる理解を深めていく。

< 授業時間外に必要な学修 >

福祉文化の醸成に向けた実践をするために、授業内容を整理する学習時間を毎回確保する（1時間程度）。

< 提出課題など >

講義中に、課題についての指示を行う。提出された課題については、講義のなかで講評を行う。

< 成績評価方法・基準 >

講義における討論内容（60%）、課題の内容（40%）で評価する。

< テキスト >

講義時に資料を配布する。

< 参考図書 >

講義中に、適宜提示する。

< 授業計画 >

第1回 オリエンテーション

「福祉」さらには「文化」という多義的な語について理解を深める。

第2回 福祉文化とは(1)

生活課題を解決していく営みという視点から、福祉文化とは何かについて学ぶ。

第3回 福祉文化とは(2)

専門職化が進む現代社会という視点から、福祉文化とは何かについて学ぶ。

第4回 福祉文化とは(3)

社会変革の視点から福祉文化とは何かについて学ぶ。

第5回 福祉文化活動の実際(1)

例えば、余暇や遊びを通して、福祉文化活動の実際を学ぶ。

第6回 福祉文化活動の実際(2)

当事者主権・参画に向けた取り組みを通して、福祉文化活動の実際を学ぶ。

第7回 福祉文化の醸成に向けて(1)

福祉文化を軸にしたどのような地域づくりが可能かの議論を行う。

第8回 福祉文化の醸成に向けて(2)

福祉文化の展開に向けた課題を社会学の視点から検討する。

2022年度 後期

1.0単位

保健医療福祉特論

宮崎 清恵

< 授業の方法 >

原則対面授業（講義と演習）

< 授業の目的 >

保健医療福祉特論は福祉領域における教育・研究者・高度な専門職養成の課程として専門科目に位置づけられて

おり（DP）、保健医療分野における専門福祉実践を行うための基盤となる知識を学ぶ。授業の目的は、一つ目は保健医療福祉サービスを自らの生活課題にチャレンジしていくために利用する利用者(人)と、取り巻く環境(社会)についての広く深い学識を備えることを目的としている（DP1）。二つ目はそれらの学識をもとに、傷病や障がいを抱えて生活を営んでいる本人やその家族の生活の全体状況全体を視野に入れ、社会生活を営むことに困難が生じている人たちと環境との間の調整や、環境そのものの整備・改善を図るための知識や技能を理解することを目的としている（DP1）。三つ目は、専門福祉実践を行う際に、自ら取り組むべき課題を発見し解決方法を見出すことができるようになることを目的としている（DP2）。

<到達目標>

- ・保健医療福祉に関連する概念について、論理的に説明することができる。
- ・保健医療福祉の歴史について理解し現代につながるポイントを説明することができる。
- ・人が生活困難に陥る原因や現在行われている対策と課題を説明することができる。
- ・保健医療分野での専門的福祉実践に必要な知識と技術を理解し説明することができる。
- ・専門社会福祉実践を行う場合の自らの取り組むべき課題について言語化することができその対処方法について挙げることができる。

<授業のキーワード>

保健医療福祉サービス、生活課題、保健医療ソーシャルワーク

<授業の進め方>

- ・講義とディスカッション中心に行う。
- ・問題意識を持って積極的な姿勢で臨み質問を積極的に行うことが望まれる。

<履修するにあたって>

- ・講義では必要に応じてノートを取り、配布資料を含めて、復習すること。
- ・課題を出すので、それについて1時間ほど時間をかけて学習し、次の授業で質問を積極的に行うこと。

<授業時間外に必要な学修>

予習課題など 講義中に指示するのでその作成に1時間程度必要である。復習には配布資料の見直しも含め各回30分程度を要する。

<提出課題など>

予習・復習を促す目的で課題を出す。課題については授業の中で評価を行う。

<成績評価方法・基準>

教員の評価（講義における討論内容[60%]、提出課題の内容[40%]）の合計で評価する。

<テキスト>

講義時に資料を配布する。

<授業計画>

第1回 概念と定義

保健医療サービスと社会福祉実践に関連する概念と定義を確認する。

第2回 日本における保健・医療・福祉サービス

日本における保健・医療・福祉サービスの歴史の変遷を整理し理解する。

第3回 生活課題へのチャレンジ事例

事例を通して、生活課題にチャレンジする傷病者・障がいの状況について学ぶ。

第4回 生活課題・生活不安・生活困難

生活課題・生活不安・生活困難などの概念と発生するメカニズムについて理解する。

第5回 保健医療ソーシャルワークの概念と歴史

保健医療ソーシャルワークの概念と保健医療ソーシャルワークの英国、米国、日本等の歴史について学ぶ。

第6回 保健医療ソーシャルワークにおいて必要な価値

・知識・技術

保健医療ソーシャルワークにおいて必要な価値・知識・技術とは何かについて学ぶ。

第7回 事例学習

保健医療ソーシャルワークの実践事例から必要となる価値・知識・技術がどのように活用されているか学ぶ。

第8回 自身の課題

保健医療ソーシャルワークを行う際の自身の課題について挙げその解決方法について考える。

2022年度 後期

2.0単位

医療教育学特講

岩井 信彦、秋川 陽一、大山 摩希子、藤原 瑞穂、堀 寛史、間瀬 教史、吉川 ひろみ

<授業の方法>

「講義」遠隔授業。 院生との討論を重視する。

<授業の目的>

本研究科では、人と社会を見据える広く深い学識を備え、高度な専門知識や技能を身につけることをその目的に人材育成を行っている（DP1）。リハビリテーション医学教育においては教育学に関して体系的に学ぶ機会はありませんにも関わらず、臨床現場では後進の卒後教育や臨床実習生に対する卒前教育など教育にも関わることが多い。

対象者の能力を引き出し、生活活動を自立させていくことを主眼としているリハビリテーション医学では、教育学に関する知見を臨床活動に大いに活かすことによって、効果的な帰結を得る可能性が拡大する。また、実質的な教育活動も求められるので、医療をベースにした教育学とその実践方法を学ぶことはリハビリテーション専門職にとって意義のあることと思われる。

本科目の講師陣は教育学の専門家と臨床実習指導、卒業教育に実績のある理学療法士、作業療法士で構成される。具体的なテーマを設定し講義を中心としながらも、院生との討論を交えながらこの授業を進めていく。また、「医療教育学特講演習」とも歩調を併せながら進めていく。

<到達目標>

本科目では医療教育学（教育学、教育方法、教育カリキュラム、臨床実習教育評価など）に関し、教育原理、教育心理学、人間関係論等を基礎としながら、養成校教育、臨床実習教育、卒業教育に焦点をあて、効果的な教育法に関する知識を培い、知見を広めることを目的とする。

<授業のキーワード>

専門職教育 臨床実習教育 生涯教育

<授業の進め方>

講義を中心としながら、院生との質疑応答、院生同士の討議を交えながらこの授業を進めていく。

<履修するにあたって>

教員を交えて院生同士で討議し、望ましい医療リハビリテーション教育は何かを考えていきたい。積極的に参加して欲しい。

<授業時間外に必要な学修>

今まで受けてきた医療専門教育やこれから実践していきたい医療教育について予習すること（1時間程度）。自分の考えをまとめてから授業に臨んで下さい。

<成績評価方法・基準>

発言・討議への参加状況80%、レポート20% とし総合的に判断する。

<テキスト>

各教員が授業時に紹介または配布

<授業計画>

第1回

秋川 教育学概説1

「教育」とは何か？ - その多角的考察

第2回

秋川 教育学概説2

「教育」の原理を踏まえた、教育実践（とくに大学における教育実践）の検討

第3回

大山 教育心理学

認知科学のフレームワークから「教育心理学」の役割を考える

第4回 吉川 人間関係論について 1

目的のある社会交流の質を構成する要素を学修する

第5回 吉川 人間関係論について 2

集団における人間関係の形成について学修する

第6回 吉川 教育設計 1

集団を対象とした研修における導入法を学修する

第7回 吉川 教育設計 2

集団を対象とした研修における展開法を学修する

第8回 藤原 教育方法論

省察的実践者の教育と方法について学修する

第9回

藤原 臨床教育論 実習前評価

客観的臨床技能評価と共用試験について学修する

第10回 岩井 臨床教育論 実習評価1

教育評価の概要ーポートフォリオ評価とパフォーマンス評価ー

第11回 岩井 臨床教育論 実習評価2

パフォーマンス評価ールーブリック評価に着目してー

第12回

堀 臨床推論教育学1

論理的思考実践 トールミンモデルを利用した論証モデル

第13回 堀 臨床推論教育学2

批判的思考実践 哲学的批判と心理的批判

第14回 間瀬 臨床実習の教育水準 1

臨床実習の到達目標設定の背景

第15回 間瀬 臨床実習の教育水準 2

臨床実習の到達目標とその基準

2022年度 後期

2.0単位

医療教育学特講演習

村尾 浩

<授業の方法>

オンデマンド形式で行う。

<授業の目的>

理学療法士・作業療法士を養成する指導的立場にある学習者が、医療リハビリテーション教育に必要な知識・技能・態度を身につける。DPのうち保健・医療・福祉領域における教育・研究者・高度な専門職としての知識・技能・意欲・態度を身につけることに該当する。

この科目を担当する教員は、1988年に医師の資格を取得し、2009年に異動するまで常勤臨床医の実務経験を有しています。日本整形外科学会専門医・日本リハビリテーション医学会指導責任者の資格および臨床経験を活かし、臨床場面での知識の使い方を交えながらの教育を行います。

<到達目標>

医学教育の現状と課題を説明できる。

コア・カリキュラムとカリキュラムプランニングを説明できる。

リハビリテーション医学実習を立案できる。

e-Learningシステムを説明できる。

PBL (problem based learning) を説明できる。

CBT (computer based testing) を説明できる。

OSCE (objective structured clinical examination

)を説明できる。
 クリニカル・クラークシップを説明できる。
 理学療法・作業療法教育の現状と課題を説明できる。
 教育目標の定義と立案を説明できる。
 学習方略の種類と選択について説明できる。
 学習評価の種類とその評価の仕方について説明できる。
 シラバスの作成手順とその目的を説明できる。
 臨床実習における教育について説明できる。
 生涯学習について説明できる。

< 授業の進め方 >

オンデマンド形式で行います。

資料や論文を読んでいただき、レポートを課します。

< 履修するにあたって >

望ましい医療リハビリテーション教育は何かを考えてください。

< 授業時間外に必要な学修 >

各回の講義で実施される内容について、予習と復習行うこと(各60分程度)。

< 提出課題など >

資料および、学習記録 one drive をアップします。

レポート課題は6つです。

1. 教員と学生について
2. カリキュラムについて
3. 教授目標について
4. 教授-学習方法について
5. 教育評価について
6. 参考文献 JAHS 9(2)90-95,2018 について600~800字程度でレポートを作成して担当教員までメールで提出してください。

後期終了後、学習記録を提出してください。

レポート課題の締め切りは、2022.01.20 ですが、余裕をもって作成するようにしてください。

< 成績評価方法・基準 >

レポート課題(100%)

< 参考図書 >

大西弘高：新医学教育学入門 教育者中心から学習者中心へ。医学書院，2005。

医学教育マニュアル 1 医学教育の原理と進め方。篠原出版，1991。

< 授業計画 >

第1回

村尾 各論

医学教育の現状と課題

第2回

村尾 各論

コア・カリキュラムとカリキュラムプランニング

第3回

村尾 各論

リハビリテーション医学実習について

第4回

村尾 各論

e-Learningシステム

第5回

村尾 各論

PBL

第6回

村尾 各論

CBT

第7回

村尾 各論

OSCE

第8回

村尾 各論

クリニカル・クラークシップ

第9回

村尾 各論

理学療法・作業療法教育の現状と課題

第10回

村尾 各論

教育目標の定義と立案

第11回

村尾 各論

学習方略の種類と選択

第12回

村尾 各論

学習評価の種類とその手法そして開発

第13回

村尾 各論

シラバスの作成手順とその目的

第14回

村尾 各論

臨床実習における教育

第15回

村尾 各論

生涯学習

 2022年度 前期

1.0単位

英語科学論文の構成と書き方

野口 ジュディー 津多江

 < 授業の方法 >

インタラクティブなリモート授業です。リアルタイムでの参加型のワークショップ授業を4回実施します： 5月14日、21日と6月11日、18日の土曜日、1&2限
 Google Driveを利用してファイル(ワード、エクセルやPowerPointなど)の提出をします。このGoogle Driveの使用にはgmail住所が必要です。あらかじめ取得してください。

< 授業の目的 >

この授業では、ディプロマポリシーの中でも、1.「研究者として自立して研究活動を行い、または高度な専門性を必要とする職業を担うため高度な専門知識や技能を

身につけている。」と4.「独創的な研究課題について、柔軟な思考や研究方法をもとに、優れた研究論文を作成することができる。」を目標とします。研究者として研究成果を公表し、専門知識の構築に貢献する義務を果たすためには科学コミュニケーションの在り方を理解する必要があります。また、研究論文作成のために英文ジャンルの学び方を身につけます。

<到達目標>

自分の研究を英文論文としてまとめて、専門誌へ投稿する準備をするが、修士課程の学生等、自分の研究がまだ決まっていない場合も、関心があれば歓迎します。

<授業のキーワード>

ESP (English for specific purposes、専門英語の学び方)、ジャンル(文書の種類)、ディスコースコミュニティ(目標オーディエンスの集合体)

<授業の進め方>

レクチャー、テキスト分析、専門文書の作成

<履修するにあたって>

積極的に参加すること。自分の研究が進んでいない場合、出版済みのものを利用はOKその場合、(引用文献を明示する)。

<授業時間外に必要な学修>

講義の対象となる教科書の箇所を読み込んで、授業中に説明のあった課題に取り組む(目安として1時間)

<提出課題など>

授業中に説明

<成績評価方法・基準>

授業参加(QA, discussion等) 30%、課題提出 30%、ポートフォリオ提出 40%

<テキスト>

Judy先生の英語科学論文の書き方 野口ジュディー・松浦克美・春田伸(著) 講談社 ISBN 978-4-06-153156-7

<授業計画>

第1回 Orientation

Self-introduction

Start corpus collection

オリエンテーション: ESP (English for specific purposes)

自己紹介

パーソナルコーパスの構築

第2回 Analyze title and abstract

Learn how to use concordance software

英語論文のタイトルと要旨のジャンル分析

コンコーダンスソフトの使い方

第3回 Make a corpus discovery and share it

コーパスディスカバリーと応用

第4回 Analyze Introduction and write own with references

イントロダクションのジャンル分析と応用

引用文献の書き方

第5回 Examine Materials and Methods and prepare own

研究方法の書き方

第6回 Prepare one section of Results

Examine figures, tables and other visuals

Examine and prepare cover letter to Editor

結果の書き方

図表の作成

Editorへの手紙の書き方

第7回 Examine Discussion and Conclusion

Examine Acknowledgments

ディスカッションと結論の構造

謝辞の情報

第8回 Share your work and learning experience

Turn in Portfolios

自分の研究テーマ(興味のあること)の紹介

ポートフォリオの提出(作成した論文と授業内のタスクのまとめ)

2022年度 前期

0.5単位

神経・運動機能リハビリテーション学特別研究

藤原 瑞穂

<授業の方法>

演習

<授業の目的>

この科目は、学生の進行状況に合わせて、博士論文作成のための研究に必要な知識と技能を学修できるように計画して行う。

博士後期課程DP3に関連して、これからの神経・運動機能リハビリテーション学に役立つ知識を修得することを目指す。作業療法の理論的背景を究明し、人と作業と環境に対する作業遂行上の主要な問題と研究方法について理解する。

この科目は、作業療法士の実務経験のある教員が担当する。

<到達目標>

各自の研究課題とその目的・意義を明確化したのち、それぞれの実践で学んだ事柄を基盤とした上で、研究のデザインを決定し、研究計画書を作成し、研究を行う。

問題意識、研究目的と意義を明確化する

研究課題に適した研究デザインを決定し、研究方法を具体化する

研究課題に関連する過去の研究のレビュー論文を執筆する

データを分析する

学位論文を執筆する

<授業のキーワード>

作業

< 授業の進め方 >

以下についてプレゼンテーションと討議を行う

研究課題に関連する先行研究のレビュー

研究デザインの選択とその妥当性の検討

具体的方法論の検討（対象，方法，評価指標など）

データ分析

< 履修するにあたって >

感染状況によって大学に方針に変更があれば、改めてお知らせします。

特別警報（すべての特別警報）または暴風警報発令の場合（大雨、洪水警報等は対象外）の本科目の取扱いについて 通常授業時の取扱いと同様に、休講とします。解除・発令時刻と授業・試験開始時限等、取扱いの詳細については大学ホームページの以下の場所に記載されているので、ご確認ください。

< 授業時間外に必要な学修 >

各回の演習で実施される内容について、予習と復習行うこと（各60分程度）。

< 提出課題など >

授業中に指示し、授業中もしくはメールでフィードバックする

< 成績評価方法・基準 >

プレゼンテーション50%，課題レポート50%

< 授業計画 >

第1回 オリエンテーション

本科目の概要について説明する。

第2回 文献の批判的吟味

研究課題に関連する先行研究の批判的吟味 発表と討論

第3回 文献の批判的吟味

研究課題に関連する先行研究の批判的吟味 発表と討論

第4回 文献の批判的吟味

研究課題に関連する先行研究の批判的吟味 発表と討論

第5回 文献の批判的吟味

研究課題に関連する先行研究の批判的吟味 発表と討論

第6回 文献の批判的吟味

研究課題に関連する先行研究の批判的吟味 発表と討論

第7回 博士論文準備

発表と討論

第8回 博士論文準備

発表と討論

第9回 博士論文準備

発表と討論

第10回 博士論文準備

発表と討論

第11回 博士論文準備

発表と討論

第12回 博士論文準備

発表と討論

第13回 博士論文準備

発表と討論

第14回 博士論文準備

発表と討論

第15回 博士論文準備

発表と討論

2022年度 後期

0.5単位

神経・運動機能リハビリテーション学特別研究

藤原 瑞穂

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

この科目は、学生の進行状況に合わせて、博士論文作成のための研究に必要な知識と技能を学修できるように計画して行う。

博士後期課程DP3に関連して、これからの神経・運動機能リハビリテーション学に役立つ知識を修得することを目指す。作業療法の理論的背景を究明し、人と作業と環境に対する作業遂行上の主要な問題と研究方法について理解する。

この科目は、作業療法士の実務経験のある教員が担当する。

< 到達目標 >

各自の研究課題とその目的・意義を明確化したのち、それぞれの実践で学んだ事柄を基盤とした上で、研究のデザインを決定し、研究計画書を作成し、研究を行う。

問題意識，研究目的と意義を明確化する

研究課題に適した研究デザインを決定し，研究方法を具体化する

研究課題に関連する過去の研究のレビュー論文を執筆する

データを分析する

学位論文を執筆する

< 授業のキーワード >

作業

< 授業の進め方 >

以下についてプレゼンテーションと討議を行う

研究課題に関連する先行研究のレビュー

研究デザインの選択とその妥当性の検討

具体的方法論の検討（対象，方法，評価指標など）

データ分析

< 履修するにあたって >

感染状況によって大学に方針に変更があれば、改めてお知らせします。

特別警報（すべての特別警報）または暴風警報発令の場

合（大雨、洪水警報等は対象外）の本科目の取扱いについて 通常授業時の取扱いと同様に、休講とします。解除・発令時刻と授業・試験開始時限等、取扱いの詳細については大学ホームページの以下の場所に記載されているので、ご確認ください。

< 授業時間外に必要な学修 >

各回の演習で実施される内容について、予習と復習行うこと（各60分程度）。

< 提出課題など >

授業中に指示し、授業中もしくはメールでフィードバックする

< 成績評価方法・基準 >

プレゼンテーション50%、課題レポート50%

< 授業計画 >

第1回 オリエンテーション

本科目の概要について説明する。

第2回 文献の批判的吟味

研究課題に関連する先行研究の批判的吟味 発表と討論

第3回 文献の批判的吟味

研究課題に関連する先行研究の批判的吟味 発表と討論

第4回 文献の批判的吟味

研究課題に関連する先行研究の批判的吟味 発表と討論

第5回 文献の批判的吟味

研究課題に関連する先行研究の批判的吟味 発表と討論

第6回 文献の批判的吟味

研究課題に関連する先行研究の批判的吟味 発表と討論

第7回 博士論文準備

発表と討論

第8回 博士論文準備

発表と討論

第9回 博士論文準備

発表と討論

第10回 博士論文準備

発表と討論

第11回 博士論文準備

発表と討論

第12回 博士論文準備

発表と討論

第13回 博士論文準備

発表と討論

第14回 博士論文準備

発表と討論

第15回 博士論文準備

発表と討論

2022年度 前期

1.0単位

データサイエンス

齋藤 政彦

< 授業の方法 >

遠隔授業

< 授業の目的 >

インターネットやコンピュータサイエンスの発達において、様々な分野において計算機科学、統計学などをベースとしてデータから有意義な情報を引き出すことができるようになった。各専攻で学ぶ大学院生にとって、データサイエンスを学ぶと、各自の研究範囲を拡げ、社会の課題を解決することのできる可能性を引き出すものである。

< 到達目標 >

社会におけるデータ・AI利活用を理解し、データを扱う上での基礎を身につけ、データに関する留意点・情報セキュリティに関して必要な知識・考え方を身につける。

< 授業のキーワード >

インターネット、ビッグデータ、データサイエンス、AI、統計学、データ利活用

< 授業の進め方 >

遠隔授業

< 履修するにあたって >

社会におけるデータ・AI利活用を理解し、データを扱う上での基礎を身につけ、データに関する留意点・情報セキュリティに関して必要な知識・考え方を身につけるとともに、パソコンを使って実際のデータ解析についても解説するので、パソコンを使って復習できる事が望ましい。

< 授業時間外に必要な学修 >

各回の講義の復習としてエクセル等を使った実際のデータ解析を行ってもらおう。また、データの取得方法等について各自学んでもらおう。

< 提出課題など >

毎回の授業後にコミュニケーションシートを提出する。最終課題に関するレポートを提出する。

< 成績評価方法・基準 >

毎回のコミュニケーションシートによる評価50%、最終レポートが50%で評価する。

< テキスト >

『データサイエンス講座 1 データサイエンス基礎』

齋藤政彦・小澤誠一・羽森茂之・南知恵子 編

培風館

ISBN:978-4-563-01610-4

< 参考図書 >

特に指定なし

< 授業計画 >

第1回（4/13） 社会におけるデータ・AI活用 1

データサイエンスの必要性、ビッグデータ、IoT、AI活用について学ぶ

第2回(4/20) 社会におけるデータ・AI活用2

社会で活用されているデータ、データ・AIの活用領域、データの可視化について学ぶ

第3回(4/27) データを読む

データの種類、データの分布、データのばらつき、相関関係について学ぶ

第4回(5/11) データを説明する

データの表現、グラフによる可視化、データの比較について学ぶ

第5回(5/18) データを扱う

データ解析ツールによるデータ解析を学ぶ

第6回(5/25) データを扱う上での留意事項

データやAIを扱う上で、法規、倫理的側面、個人の権利保護について学ぶ

第7回(6/1) 統計的データ解析

新薬の治験や健康データにおける統計的推定、仮説検定について学ぶ

第8回(6/8) 最終課題

与えられたデータセットに対して課題を設定し、その課題の解決を提案する。

2022年度 前期

1.0単位

リハビリテーション科学特別研究

坂本 年将

< 授業の方法 >

実験・研究

< 授業の目的 >

生体の構造と機能、さらにそれらの障害や疾病、特に疼痛に関するup-to-dataな最新知見や課題を、個体レベルから組織・細胞レベル、さらに分子レベルに至る種々の段階で評価・解析する研究課題について、その課題の妥当性の検討、倫理的配慮、研究計画の立案、実験ならびに得られた結果に対する考察を行う(論文作成に関する指導も含む)。この科目は、研究科修士課程DP1、DP2、DP3及びDP4に掲げる知識・技能及び意欲・態度・思考・判断・表現を修得することを目指している。

また、この科目の担当者は、理学療法士として30年の経験があり、大学教員となった後も非常勤で定期的に臨床に携わる、実務経験のある教員であるため、生体の正常機能だけでなく病態の解析手法や知見についても言及しながら、研究の幅と深さを拡げる。

< 到達目標 >

1. 研究倫理を身につける。
2. 当該研究分野の論文を読み、論文の主旨を説明できる。
3. 上記論文の新規性、問題点、さらに必要・参考となる

実験を指摘できる。

4. 博士論文や国内外学術誌へ投稿する学術論文を作成できる。

5. 博士論文発表会(学内)及び学会にて口述発表を行い、質疑応答に答えることができる。

6. 国外学術誌へ学術論文を投稿し、受理されるまでリバイスやり取りができる。

7. 博士論文審査委員会で論文内容について説明し、質疑応答に答えることができる。

< 授業のキーワード >

疼痛学、研究倫理、論文抄読、研究計画、学術論文、博士論文、口述発表

< 授業の進め方 >

1. 研究倫理、2. 論文抄読、3. 研究テーマ・デザインの検討・決定、4. 研究計画書の作成、5. 実験およびデータ収集・解析、6. 学術論文・博士論文作成、7. 学会や学内研究発表会での口述発表、等を研究の進捗状況に合わせて指導する。定期的(週1~2回)に研究室のミーティングに出席・討論し、他の教員や大学院生、及び研究員、学部生らとの質疑応答を繰り返してブラッシュアップするとともに、データの透明性を担保する。

< 履修するにあたって >

定期的開催する研究室のプログレスレポート・ミーティング以外にも、指導教員との報告・連絡・相談を適宜行うこと。修士論文及び各種報告書や書類の提出期限を厳守すること。

< 授業時間外に必要な学修 >

先行研究調査や関連する分野の英語論文抄読に努め、事前に配布された論文や参考資料等の該当部分に目を通してから講義に臨むこと(60分程度)。講義後は、講義内容を整理し、他の科目との関連も含めて整理しておくこと(60分程度)。

< 提出課題など >

適時指示する。

提出された課題やデータ報告に対しては、対面またはWebを通して個別にフィードバックを行う。

< 成績評価方法・基準 >

博士後期課程に相応しい水準の研究活動および成果公表を評価する。

< テキスト >

特に指定しない。

< 参考図書 >

個別に指導・紹介する。

2022年度 前期

1.0単位

リハビリテーション科学特別研究

藤原 瑞穂

< 授業の方法 >

演習（対面授業および遠隔授業併用）

< 授業の目的 >

博士論文の作成のために、各自の研究テーマに基づき、研究を行うための準備を行う。作業と健康に関する最新知見や課題を整理し、それを探求していくための研究の方法論を学び実践する。

< 到達目標 >

インタビュー調査法の基礎を理解する。インタビューと観察の方法を身につける。これらに基づいて、自らの研究テーマに関する調査計画を立てることができるようになる。

< 授業のキーワード >

作業 質的研究

< 授業の進め方 >

論文抄読ならびに履修者とのディスカッションを中心に行う

作業療法、作業科学の基本文献の読解を通して作業に焦点をあてた実践・研究に必要な発想を学ぶ

この科目は、学生の進行状況に合わせて、博士論文作成のための研究に必要な知識と技能を学修できるように計画して行う。博士後期課程DP3に関連して、これからのリハビリテーション科学に役立つ知識を修得することを目指す。この科目は、作業療法士の実務経験のある教員が担当する。

< 授業時間外に必要な学修 >

1時間程度の学習が必要

< 提出課題など >

適時指示する。提出された課題に対しては、対面またはWebを通して個別にフィードバックを行う。

< 成績評価方法・基準 >

課題発表（50%）、レポート（50%）

< 参考図書 >

授業中に紹介する

2022年度 前期

1.0単位

リハビリテーション科学特別研究

松原 貴子

< 授業の方法 >

実験・研究

< 授業の目的 >

生体の構造と機能、さらにそれらの障害や疾病、特に疼痛に関するup-to-dateな最新知見や課題を、個体レベルから組織・細胞レベル、さらに分子レベルに至る種々の段階で評価・解析する研究課題について、その課題の妥当性の検討、倫理的配慮、研究計画の立案、実験ならびに得られた結果に対する考察を行う（論文作成に関する指導も含む）。この科目は、研究科修士課程DP1、DP2、DP3及びDP4に掲げる知識・技能及び意欲・態度・思考・

判断・表現を修得することを目指している。

また、この科目の担当者は、理学療法士として30年以上の経験があり、大学教員となった後も非常勤で定期的な臨床に携わる、実務経験のある教員であるため、生体の正常機能だけでなく病態の解析手法や知見についても言及しながら、研究の幅と深さを広げる。

< 到達目標 >

1. 研究倫理を身につける。

2. 当該研究分野の論文を読み、論文の主旨を説明できる。

3. 上記論文の新規性、問題点、さらに必要・参考となる実験を指摘できる。

4. 博士論文や国内外学術誌へ投稿する学術論文を作成できる。

5. 博士論文発表会（学内）及び学会にて口述発表を行い、質疑応答に答えることができる。

6. 国外学術誌へ学術論文を投稿し、受理されるまでリバイスやり取りができる。

7. 博士論文審査委員会で論文内容について説明し、質疑応答に答えることができる。

< 授業のキーワード >

疼痛学、研究倫理、論文抄読、研究計画、学術論文、博士論文、口述発表

< 授業の進め方 >

1. 研究倫理、2. 論文抄読、3. 研究テーマ・デザインの検討・決定、4. 研究計画書の作成、5. 実験およびデータ収集・解析、6. 学術論文・博士論文作成、7. 学会や学内研究発表会での口述発表、等を研究の進捗状況に合わせて指導する。定期的（週1~2回）に研究室のミーティングに出席・討論し、他の教員や大学院生、及び研究員、学部生らとの質疑応答を繰り返してブラッシュアップするとともに、データの透明性を担保する。

< 履修するにあたって >

定期的開催する研究室のプログレスレポート・ミーティング以外にも、指導教員との報告・連絡・相談を適宜行うこと。博士論文及び各種報告書や書類の提出期限を厳守すること。

< 授業時間外に必要な学修 >

先行研究調査や関連する分野の英語論文抄読に努め、事前に配布された論文や参考資料等の該当部分を目を通してから講義に臨むこと（60分程度）。講義後は、講義内容を整理し、他の科目との関連も含めて整理しておくこと（60分程度）。

< 提出課題など >

適時指示する。

提出された課題やデータ報告に対しては、対面またはWebを通して個別にフィードバックを行う。

< 成績評価方法・基準 >

博士後期課程に相応しい水準の研究活動および成果公表を評価する。

<テキスト>

特に指定しない。

<参考図書>

個別に指導・紹介する。

2022年度 後期

1.0単位

リハビリテーション科学特別研究

坂本 年将

<授業の方法>

実験・実習（対面授業および遠隔授業併用）

<授業の目的>

生体の構造と機能、さらにそれらの障害や疾病、特に疼痛に関するup-to-dateな最新知見や課題を、個体レベルから組織・細胞レベル、さらに分子レベルに至る種々の段階で評価・解析する研究課題について、その課題の妥当性の検討、倫理的配慮、研究計画の立案、実験ならびに得られた結果に対する考察を行う（論文作成に関する指導も含む）。この科目は、研究科修士課程DP1、DP2、DP3及びDP4に掲げる知識・技能及び意欲・態度・思考・判断・表現を修得することを目指している。

また、この科目の担当者は、理学療法士として30年の経験があり、大学教員となった後も非常勤で定期的に臨床に携わる、実務経験のある教員であるため、生体の正常機能だけでなく病態の解析手法や知見についても言及しながら、研究の幅と深さを広げる。

<到達目標>

1. 研究倫理を身につける。
2. 当該研究分野の論文を読み、論文の主旨を説明できる。
3. 上記論文の新規性、問題点、さらに必要・参考となる実験を指摘できる。
4. 博士論文や国内外学術誌へ投稿する学術論文を作成できる。
5. 博士論文発表会（学内）及び学会にて口述発表を行い、質疑応答に答えることができる。
6. 国外学術誌へ学術論文を投稿し、受理されるまでリバイスやり取りができる。
7. 博士論文審査委員会で論文内容について説明し、質疑応答に答えることができる。

<授業のキーワード>

疼痛学、研究倫理、論文抄読、研究計画、学術論文、博士論文、口述発表

<授業の進め方>

1. 研究倫理、2. 論文抄読、3. 研究テーマ・デザインの検討・決定、4. 研究計画書の作成、5. 実験およびデータ収集・解析、6. 学術論文・博士論文作成、7. 学会や学内研究発表会での口述発表、等を研究の進捗状況に合わせて指導する。定期的（週1～2回）に研究室のミー

ティングに出席・討論し、他の教員や大学院生、及び研究員、学部生らとの質疑応答を繰り返してブラッシュアップするとともに、データの透明性を担保する。

<履修するにあたって>

定期的開催する研究室のプログレスレポート・ミーティング以外にも、指導教員との報告・連絡・相談を適宜行うこと。修士論文及び各種報告書や書類の提出期限を厳守すること。

<授業時間外に必要な学修>

先行研究調査や関連する分野の英語論文抄読に努め、事前に配布された論文や参考資料等の該当部分に通してからミーティングに臨むこと（60分程度）。ミーティング後は、指摘された内容について調べ、他の科目との関連も含めて整理しておくこと（60分程度）。また、必要に応じ各自、学会発表の準備、学術誌へ投稿する論文の執筆を進める。

<提出課題など>

適時指示する。

提出された課題やデータ報告に対しては、対面またはWebを通して、プログレスミーティング時または個別にフィードバックを行う。

<成績評価方法・基準>

博士後期課程に相応しい水準の研究活動および成果公表を評価する。

<テキスト>

特に指定しない。

<参考図書>

個別に指導・紹介する。

2022年度 後期

1.0単位

リハビリテーション科学特別研究

藤原 瑞穂

<授業の方法>

演習（対面授業および遠隔授業併用）

<授業の目的>

博士論文の作成のために、各自の研究テーマに基づき、研究を行うための準備を行う。作業と健康に関する最新知見や課題を整理し、それを探求していくための研究の方法論を学び実践する。

<到達目標>

インタビュー調査法の基礎を理解する。インタビューと観察の方法を身につける。これらに基づいて、自らの研究テーマに関する調査計画を立て、開始することができる

<授業のキーワード>

作業 質的研究

<授業の進め方>

論文抄読ならびに履修者とのディスカッションを中心に

行う

作業療法、作業科学の基本文献の読解を通して作業に焦点をあてた実践・研究に必要な発想を学ぶ

この科目は、学生の進行状況に合わせて、博士論文作成のための研究に必要な知識と技能を学修できるように計画して行う。博士後期課程DP3に関連して、これからのリハビリテーション科学に役立つ知識を修得することを目指す。この科目は、作業療法士の実務経験のある教員が担当する。

< 授業時間外に必要な学修 >

データ収集（インタビュー、参与観察など）の実行とデータの分析 1時間程度の学習が必要

< 提出課題など >

研究計画書、倫理申請書一式、文献レビューなど

提出された課題に対しては、対面またはWebを通して個別にフィードバックを行う。

< 成績評価方法・基準 >

課題発表（50%）、レポート（50%）

< 参考図書 >

授業中に紹介する

2022年度 後期

1.0単位

リハビリテーション科学特別研究

松原 貴子

< 授業の方法 >

実験・実習（対面授業および遠隔授業併用）

< 授業の目的 >

生体の構造と機能、さらにそれらの障害や疾病、特に疼痛に関するup-to-dataな最新知見や課題を、個体レベルから組織・細胞レベル、さらに分子レベルに至る種々の段階で評価・解析する研究課題について、その課題の妥当性の検討、倫理的配慮、研究計画の立案、実験ならびに得られた結果に対する考察を行う（論文作成に関する指導も含む）。この科目は、研究科修士課程DP1、DP2、DP3及びDP4に掲げる知識・技能及び意欲・態度・思考・判断・表現を修得することを目指している。

また、この科目の担当者は、理学療法士として30年以上の経験があり、大学教員となった後も非常勤で定期的に臨床に携わる、実務経験のある教員であるため、生体の正常機能だけでなく病態の解析手法や知見についても言及しながら、研究の幅と深さを広げる。

< 到達目標 >

1．研究倫理を身につける。

2．当該研究分野の論文を読み、論文の主旨を説明できる。

3．上記論文の新規性、問題点、さらに必要・参考となる実験を指摘できる。

4．博士論文や国内外学術誌へ投稿する学術論文を作成できる。

5．博士論文発表会（学内）及び学会にて口述発表を行い、質疑応答に答えることができる。

6．国外学術誌へ学術論文を投稿し、受理されるまでリバイスやり取りができる。

7．博士論文審査委員会で論文内容について説明し、質疑応答に答えることができる。

< 授業のキーワード >

疼痛学、研究倫理、論文抄読、研究計画、学術論文、博士論文、口述発表

< 授業の進め方 >

1．研究倫理、2．論文抄読、3．研究テーマ・デザインの検討・決定、4．研究計画書の作成、5．実験およびデータ収集・解析、6．学術論文・博士論文作成、7．学会や学内研究発表会での口述発表、等を研究の進捗状況に合わせて指導する。定期的（週1～2回）に研究室のミーティングに出席・討論し、他の教員や大学院生、及び研究員、学部生らとの質疑応答を繰り返してブラッシュアップするとともに、データの透明性を担保する。

< 履修するにあたって >

定期的開催する研究室のプログレスレポート・ミーティング以外にも、指導教員との報告・連絡・相談を適宜行うこと。博士論文及び各種報告書や書類の提出期限を厳守すること。

< 授業時間外に必要な学修 >

先行研究調査や関連する分野の英語論文抄読に努め、事前に配布された論文や参考資料等の該当部分を目を通してからミーティングに臨むこと（60分程度）。ミーティング後は、指摘された内容について調べ、他の科目との関連も含めて整理しておくこと（60分程度）。また、必要に応じ各自、学会発表の準備、学術誌へ投稿する論文の執筆を進める。

< 提出課題など >

適時指示する。

提出された課題やデータ報告に対しては、対面またはWebを通して、プログレスミーティング時または個別にフィードバックを行う。

< 成績評価方法・基準 >

博士後期課程に相応しい水準の研究活動および成果公表を評価する。

< テキスト >

特に指定しない。

< 参考図書 >

個別に指導・紹介する。

2022年度 前期

1.0単位

リハビリテーション科学特別研究

松原 貴子

< 授業の方法 >

実験・実習（対面授業および遠隔授業併用）

< 授業の目的 >

生体の構造と機能、さらにそれらの障害や疾病、特に疼痛に関するup-to-dateな最新知見や課題を、個体レベルから組織・細胞レベル、さらに分子レベルに至る種々の段階で評価・解析する研究課題について、その課題の妥当性の検討、倫理的配慮、研究計画の立案、実験ならびに得られた結果に対する考察を行う（論文作成に関する指導も含む）。この科目は、研究科修士課程DP1、DP2、DP3及びDP4に掲げる知識・技能及び意欲・態度・思考・判断・表現を修得することを目指している。

また、この科目の担当者は、理学療法士として30年以上の経験があり、大学教員となった後も非常勤で定期的に臨床に携わる、実務経験のある教員であるため、生体の正常機能だけでなく病態の解析手法や知見についても言及しながら、研究の幅と深さを広げる。

< 到達目標 >

1. 研究倫理を身につける。
2. 当該研究分野の論文を読み、論文の主旨を説明できる。
3. 上記論文の新規性、問題点、さらに必要・参考となる実験を指摘できる。
4. 博士論文や国内外学術誌へ投稿する学術論文を作成できる。
5. 博士論文発表会（学内）及び学会にて口述発表を行い、質疑応答に答えることができる。
6. 国外学術誌へ学術論文を投稿し、受理されるまでリバイスやり取りができる。
7. 博士論文審査委員会で論文内容について説明し、質疑応答に答えることができる。

< 授業のキーワード >

疼痛学、研究倫理、論文抄読、研究計画、学術論文、博士論文、口述発表

< 授業の進め方 >

1. 研究倫理、2. 論文抄読、3. 研究テーマ・デザインの検討・決定、4. 研究計画書の作成、5. 実験およびデータ収集・解析、6. 学術論文・博士論文作成、7. 学会や学内研究発表会での口述発表、等を研究の進捗状況に合わせて指導する。定期的（週1～2回）に研究室のミーティングに出席・討論し、他の教員や大学院生、及び研究員、学部生らとの質疑応答を繰り返してブラッシュアップするとともに、データの透明性を担保する。

< 履修するにあたって >

定期的を開催する研究室のプログレスレポート・ミーティング以外にも、指導教員との報告・連絡・相談を適宜行うこと。博士論文及び各種報告書や書類の提出期限を厳守すること。

< 授業時間外に必要な学修 >

先行研究調査や関連する分野の英語論文抄読に努め、事前に配布された論文や参考資料等の該当部分に通してからミーティングに臨むこと（60分程度）。ミーティング後は、指摘された内容について調べ、他の科目との関連も含めて整理しておくこと（60分程度）。また、必要に応じ各自、学会発表の準備、学術誌へ投稿する論文の執筆を進める。

< 提出課題など >

適時指示する。

提出された課題やデータ報告に対しては、対面またはWebを通して、プログレスミーティング時または個別にフィードバックを行う。

< 成績評価方法・基準 >

博士後期課程に相応しい水準の研究活動および成果公表を評価する。

< テキスト >

特に指定しない。

< 参考図書 >

個別に指導・紹介する。

2022年度 前期

1.0単位

リハビリテーション科学特別研究

村尾 浩

< 授業の方法 >

オンデマンド講義を中心に行います。

< 授業の目的 >

博士課程の学生が、神経・運動機能リハビリテーション学についての適切な論文を作成することを目的とする。研究科ディプロマポリシーの1～4に該当する。

この科目を担当する教員は1988年に医師の資格を取得し、2009年に異動するまで常勤臨床医の実務経験を有しています。日本整形外科学会専門医・日本リハビリテーション医学会指導責任者の資格および臨床経験を活かし、指導を行います。

< 到達目標 >

医療・保健・福祉に関わる分野から、適切な課題を設定し、論文執筆の準備を行う

< 授業の進め方 >

保健・医療・福祉に関する文献の探索や詳読を行う。

< 授業時間外に必要な学修 >

論文を読んだり、本を読んだりしてください。

< 成績評価方法・基準 >

博士課程にふさわしい水準の研究課題と論文の仕上がり課程を評価する。

< 授業計画 >

第1回 研究の立案

研究の立案を行う。

第2回 研究計画書の作成

研究計画書を作成する。

第3回 情報の収集と解析

情報の収集と解析を行う。

第4回 論文の執筆

論文の執筆を行う。

2022年度 後期

1.0単位

リハビリテーション科学特別研究

松原 貴子

< 授業の方法 >

実験・実習（対面授業および遠隔授業併用）

< 授業の目的 >

生体の構造と機能、さらにそれらの障害や疾病、特に疼痛に関するup-to-dateな最新知見や課題を、個体レベルから組織・細胞レベル、さらに分子レベルに至る種々の段階で評価・解析する研究課題について、その課題の妥当性の検討、倫理的配慮、研究計画の立案、実験ならびに得られた結果に対する考察を行う（論文作成に関する指導も含む）。この科目は、研究科修士課程DP1、DP2、DP3及びDP4に掲げる知識・技能及び意欲・態度・思考・判断・表現を修得することを目指している。

また、この科目の担当者は、理学療法士として30年以上の経験があり、大学教員となった後も非常勤で定期的に臨床に携わる、実務経験のある教員であるため、生体の正常機能だけでなく病態の解析手法や知見についても言及しながら、研究の幅と深さを広げる。

< 到達目標 >

1. 研究倫理を身につける。
2. 当該研究分野の論文を読み、論文の主旨を説明できる。
3. 上記論文の新規性、問題点、さらに必要・参考となる実験を指摘できる。
4. 博士論文や国内外学術誌へ投稿する学術論文を作成できる。
5. 博士論文発表会（学内）及び学会にて口述発表を行い、質疑応答に答えることができる。
6. 国外学術誌へ学術論文を投稿し、受理されるまでリバイスやり取りができる。
7. 博士論文審査委員会で論文内容について説明し、質疑応答に答えることができる。

< 授業のキーワード >

疼痛学、研究倫理、論文抄読、研究計画、学術論文、博

士論文、口述発表

< 授業の進め方 >

1. 研究倫理、2. 論文抄読、3. 研究テーマ・デザインの検討・決定、4. 研究計画書の作成、5. 実験およびデータ収集・解析、6. 学術論文・博士論文作成、7. 学会や学内研究発表会での口述発表、等を研究の進捗状況に合わせて指導する。定期的（週1~2回）に研究室のミーティングに出席・討論し、他の教員や大学院生、及び研究員、学部生らとの質疑応答を繰り返してブラッシュアップするとともに、データの透明性を担保する。

< 履修するにあたって >

定期的開催する研究室のプログレスレポート・ミーティング以外にも、指導教員との報告・連絡・相談を適宜行うこと。博士論文及び各種報告書や書類の提出期限を厳守すること。

< 授業時間外に必要な学修 >

先行研究調査や関連する分野の英語論文抄読に努め、事前に配布された論文や参考資料等の該当部分に通してからミーティングに臨むこと（60分程度）。ミーティング後は、指摘された内容について調べ、他の科目との関連も含めて整理しておくこと（60分程度）。また、必要に応じ各自、学会発表の準備、学術誌へ投稿する論文の執筆を進める。

< 提出課題など >

適時指示する。

提出された課題やデータ報告に対しては、対面またはWebを通して、プログレスミーティング時または個別にフィードバックを行う。

< 成績評価方法・基準 >

博士後期課程に相応しい水準の研究活動および成果公表を評価する。

< テキスト >

特に指定しない。

< 参考図書 >

個別に指導・紹介する。

2022年度 後期

1.0単位

リハビリテーション科学特別研究

村尾 浩

< 授業の方法 >

オンデマンド講義を中心に行います。

< 授業の目的 >

博士課程の学生が、神経・運動機能リハビリテーション学についての適切な論文を作成することを目的とする。研究科ディプロマポリシーの1~4に該当する。

この科目を担当する教員は1988年に医師の資格を取得し、2009年に異動するまで常勤臨床医の実務経験を有しています。日本整形外科学会専門医・日本リハビリテ

ション医学会指導責任者の資格および臨床経験を活かし、指導を行います。

<到達目標>

医療・保健・福祉に関わる分野から、適切な課題を設定し、論文執筆の準備を行う。

<授業の進め方>

保健・医療・福祉に関する文献の探索や詳読を行う。

<授業時間外に必要な学修>

本や論文をよく読んでください。

<成績評価方法・基準>

博士課程にふさわしい水準の研究課題と論文の仕上がり課程を評価する。

<授業計画>

第1回 研究の立案

研究を立案する。

第2回 研究計画書の作成

研究計画書を作成する。

第3回 情報の収集と解析

情報の収集と解析を行う。

第4回 論文の執筆

論文を執筆する。

2022年度 前期

1.0単位

リハビリテーション科学特別研究

坂本 年将

<授業の方法>

演習形式にて行う。

<授業の目的>

リハビリテーション科学に関連した研究課題について、博士後期課程に相応しい水準の論文を作成するために必要な知識・技能を学ぶ。

科目担当者は理学療法士としての実務・研究経験を有する者である。

<到達目標>

研究テーマに関連する文献を検索することができる

研究テーマに関して明らかになっていることと解明されていないことなどを整理することができる

<授業の進め方>

学習課題を設定し、その課題を遂行する中で教員と議論し理解を深める。

<授業時間外に必要な学修>

担当教員との演習で学んだことを整理するための時間として、毎週1時間程度の学修が必要です。

<成績評価方法・基準>

研究遂行力 50% (研究成果とは別に、研究を進めるための作業を計画通りに行えたか)

研究成果 50% (到達目標にどれだけ近づけたか)

2022年度 前期

1.0単位

リハビリテーション科学特別研究

岩井 信彦

<授業の方法>

遠隔授業を基本とする。この科目は、研究科博士後期課程DPに掲げる知識・技能・思考・判断・表現を修得することを目指している。本科目の担当者は理学療法士として臨床23年の実務経験があり、その経験も踏まえ指導していく。講義と院生との討論によりこの授業を進めていく。

<授業の目的>

本科目はDPの1 高度な職業人、教育・研究者を目指すに足る意欲を備えている人。(関心・意欲)

2 高度な職業人、教育・研究者を目指すに足る基礎的知識・能力を備えている人。(知識・理解)

3 高度な職業人、教育・研究者を目指すために自ら学修・論考を進めることのできる人。(思考・判断・表現)に則ったものである。

リハビリテーション科学に関連した研究課題について、博士後期課程に相応しい水準の論文作成を指導する。とくに運動機能、活動、参加の評価に関係した技法、手法を理解する。講義で得られた知識を活かし、臨床にも広く応用できる研究が可能となるよう、その研究デザインを描き、先行研究を整理し、論文を書き進めていく技能を習得することを目的とする。

<到達目標>

リハビリテーション科学領域の評価指標の課題について、自らの考えを述べることができる。

論文作成に必要な過去の文献を検索し、その内容を理解できる。

論文の作成に際し、指導を受けながら書き進めることができる。

研究テーマに関する現状と課題を整理することができる。指導を受けながら論文を書き進めることができる。

<授業のキーワード>

運動機能 日常生活活動 障害構造

<授業の進め方>

研究テーマに関する文献の探索や読み込みを演習形式で行う。

<履修するにあたって>

博士論文の提出期限の厳守と進行状況の報告と確認および申請書類の期限厳守

<授業時間外に必要な学修>

論文のテーマに関した先行研究の探索(1回の授業につき60分)

<提出課題など>

必要に応じ大学院生が検索し、同時に教員が紹介する。

< 成績評価方法・基準 >

博士後期課程に相応しい水準の研究課題（70%）と論文の仕上がり（30%）を評価する。

< テキスト >

その都度、紹介する。

< 授業計画 >

研究領域の探索

特別研究 = 興味のある研究領域の先行研究やトピックを集め、その内容を理解していく。1年前半

研究のスケジュール立案

特別研究 = 研究テーマを決め、研究方法、分析の対象の特定、タイムスケジュール等を決める。1年後半。

研究計画書の作成

特別研究 = 研究計画に沿って、研究計画書を作成する。倫理委員会に提出する。2年目前半。

データの収集、類似研究、先行研究の探索

特別研究 = 研究計画に沿って、データを収集する。先行研究や類似研究に関する文献を読み、研究テーマに関連した研究がどこまで分かっているか、何が明らかにされていないのかを知る。2年目後半。

論文の執筆

特別研究 = この時期に今までの進捗状況の確認も含め、研究中間報告を行う。特別研究 = 収集したデータの結果をまとめる。博士論文の執筆を始める。担当教員のアドバイスを受けながら、修正を重ねていく。3年目前半。

論文の完成

特別研究 = おおむね書き上げた論文を推敲し、最終的な修正を行う。3年目後半

2022年度 後期

1.0単位

リハビリテーション科学特別研究

坂本 年将

< 授業の方法 >

演習形式にて行う。

< 授業の目的 >

リハビリテーション科学に関わる研究領域を俯瞰した上で、受講生自らが研究課題を設定し、仮説を検証するための調査・実験計画を作成・実行することで博士論文の完成を目指す。

この科目は以下のDPと関連している。

1. 自ら課題を発見し、その解決方法を見出すことができる（思考・判断・表現）
2. 先行研究や文献を広く学び、その上で考察を進めるといった研究方法を身につけている（思考・判断・表現）

この科目は理学療法士としての実務・研究経験のある教員が担当する。

< 到達目標 >

博士論文執筆、発表までの長期計画を立案することができる

受講者が取り組む研究テーマに関連したこれまでの研究知見を説明することができる（知識）

受講者が取り組む研究テーマにおける最適な研究方法を習得することができる（知識、技能）

研究計画書を作成し、それに基づき研究を進めることができる

< 授業の進め方 >

受講者と相談しながらPDCAサイクルに基づき実施する。研究計画の立案(plan, P)、データの収集・整理・分析(do, D)、研究成果の確認・点検・検証(check, C)、研究計画の改善・修正(act, A)を繰り返し行う。

< 授業時間外に必要な学修 >

担当教員との演習で学んだことを整理するための時間として、毎週1時間程度の学修が必要です。

< 成績評価方法・基準 >

研究遂行力 50%（研究成果とは別に、研究を進めるための作業を計画通りに行えたか）

研究成果 50%（到達目標にどれだけ近づけたか）

2022年度 後期

1.0単位

リハビリテーション科学特別研究

岩井 信彦

< 授業の方法 >

遠隔授業を基本とする。この科目は、研究科博士後期課程DPに掲げる知識・技能・思考・判断・表現を修得することを目指している。本科目の担当者は理学療法士として臨床23年の実務経験があり、その経験も踏まえ指導していく。講義と院生との討論によりこの授業を進めていく。

< 授業の目的 >

本科目はDOPの1 高度な職業人、教育・研究者を目指すに足る意欲を備えている人。（関心・意欲）2 高度な職業人、教育・研究者を目指すに足る基礎的知識・能力を備えている人。（知識・理解）3 高度な職業人、教育・研究者を目指すために自ら学修・論考を進めることのできる人。（思考・判断・表現）に則ったものである。リハビリテーション科学に関連した研究課題について、博士後期課程に相応しい水準の論文作成を指導する。とくに運動機能、活動、参加の評価に関係した技法、手法を理解する。講義で得られた知識を活かし、臨床にも広く応用できる研究が可能となるよう、その研究デザインを描き、先行研究を整理し、論文を書き進めていく技能を習得することを目的とする。

<到達目標>

リハビリテーション科学領域の評価指標の課題について、自らの考えを述べるができる。

論文作成に必要な過去の文献を検索し、その内容を理解できる。

論文の作成に際し、指導を受けながら書き進めることができる。

研究テーマに関する現状と課題を整理することができる。

指導を受けながら論文を書き進めることができる。

<授業のキーワード>

運動機能 日常生活活動 障害構造

<授業の進め方>

研究テーマに関する文献の探索や読み込みを演習形式で行う。

<履修するにあたって>

博士論文の提出期限の厳守と進行状況の報告と確認および申請書類の期限厳守

<授業時間外に必要な学修>

論文のテーマに関した先行研究の探索（1回の授業につき60分）

<提出課題など>

必要に応じ大学院生が検索し、同時に教員が紹介する。

<成績評価方法・基準>

博士課程に相応しい水準の研究課題（70%）と論文の仕上がり（30%）を評価する。

<テキスト>

その都度、紹介する。

<授業計画>

研究領域の探索

特別研究 =興味のある研究領域の先行研究やトピックを集め、その内容を理解していく。1年前半

研究のスケジュール立案

特別研究 =研究テーマを決め、研究方法、分析の対象の特定、タイムスケジュール等を決める。1年後半。

研究計画書の作成

特別研究 =研究計画に沿って、研究計画書を作成する。倫理委員会に提出する。2年目前半。

データの収集、類似研究、先行研究の探索

特別研究 =研究計画に沿って、データを収集する。先行研究や類似研究に関する文献を読み、研究テーマに関連した研究がどこまで分かっているか、何が明らかにされていないのかを知る。2年目後半。

論文の執筆

特別研究 =この時期に今までの進捗状況の確認も含め、研究中間報告を行う。特別研究 =収集したデータの結果をまとめる。博士論文の執筆を始める。担当教員のアドバイスを受けながら、修正を重ねていく。3年目前半。

論文の完成

特別研究 =おおむね書き上げた論文を推敲し、最終的

な修正を行う。3年目後半

2022年度 前期

2.0単位

リハビリテーション科学特講

藤原 瑞穂、岩井 信彦、大庭 潤平、小川 真寛、阪井 一雄、坂本 年将、春藤 久人、中前 智通、西尾

久英、備酒 伸彦、古田 恒輔、松原 貴子、村尾

浩、森本 陽介

<授業の方法>

講義

<授業の目的>

リハビリテーション科学における様々な視点・領域から講義形式の授業を行う。各領域におけるリハビリテーションの最新の研究動向を理解し、今後の課題について討論することで、各自の実践能力の習得につなげる(知識・技能・思考・判断・意欲・態度)。

DPのうち保健・医療・福祉領域における教育・研究者・高度な専門職としての知識・技能・意欲・態度を身につけることに該当する。

この科目を担当する教員は、医師、理学療法士、作業療法士としての実務経験を有しています。臨床場面での経験を活かし講義を行います。

<到達目標>

リハビリテーション科学に関する知識を修得し、最新の研究動向を理解する

<授業のキーワード>

リハビリテーション 健康 科学

<授業の進め方>

講義中心に進めるが、授業内容の理解を深めるために受講者間の討論を重視する。

各回の詳細についてはdotCampus等を通じて担当教員より連絡します。

特別警報（すべての特別警報）または暴風警報発令の場合（大雨、洪水警報等は対象外）の本科目の取扱いについて 授業を実施します。ただし、避難指示、避難勧告が発令されている場合はご自身の安全を最優先にし、自治体の指示に従って行動してください。

<履修するにあたって>

自らの研究テーマへの応用をイメージしながら積極的に授業に参加して欲しい。

履修者にはメールもしくはdotcampsを通じて講義資料を配布します

<授業時間外に必要な学修>

各回の講義で実施される内容について、予習と復習行うこと（各60分程度）。

<提出課題など>

各担当教員が授業中に指示する。課題へのフィードバック

クは個別に行う。

<成績評価方法・基準>

各担当教員がそれぞれ、次の項目について評価を行い、科目担当責任教員が集計し、最終評価を行う。レポート50%、ディスカッションの参加度50%

<テキスト>

必要に応じて資料を配布する

<授業計画>

第1回 ナラティブ・アプローチ

人々の主観的経験を捉える研究とその手法に関する知識を身につけることができる(藤原)

第2回 精神領域のリハビリテーション

統合失調症や抑うつ障害とそれらリハビリテーションに関する

研究動向を把握し、知識を身につけることができる(中前)

第3回 認知機能障害とリハビリテーション

加齢や各種疾患により引き起こされる認知機能障害について概説し、そのリハビリテーションについて学ぶ(小川)

第4回 脊髄性筋萎縮症

新規薬剤治療とリハビリテーションを組み合わせた診療体系について説明し、議論できるようになる(西尾)

第5回 疼痛医療学

疼痛リハビリテーションの研究動向を理解し専門知識を身につけることができる(松原)

第6回 疼痛医療学

疼痛リハビリテーションの研究動向を理解し専門知識を身につけることができる(松原)

第7回 認知症研究の動向

最近の認知症研究について、講師の最近の研究を元に解説する(阪井)

第8回 代償のリハビリテーション 義肢装具領域の研究について

義肢装具領域のトピックスを知り、研究手法について議論する(大庭)

第9回 福祉用具の開発動向とロボット技術の導入

福祉用具の開発時に求められる技術情報などの在り方と具体的な機器開発を例に開発プロセスについて解説する(古田)

第10回 薬物治療学

リハビリテーション領域において必要な薬物療法の知識を身につけることができる(春藤)

第11回

(坂本)

第12回 内部障害リハビリテーション特論

内部障害における最新の知見と臨床現場の課題を考えていく(森本)

第13回 リハビリテーション医学について

リハビリテーション医学の現状と課題(村尾)

第14回 超高齢・縮小社会での高齢者ケア

主題について国内外の状況を見ながら検討する(備酒)

第15回 ADL構造論

ADLの二面性を明らかにし、その発生要因について考えていく(岩井)

2022年度 前期

1.0単位

リハビリテーション科学特講演習

坂本 年将

<授業の方法>

演習(対面授業および遠隔授業併用)

<授業の目的>

生体の構造と機能、さらにそれらの障害や疾病、特に疼痛に関するup-to-dataな最新知見や課題を、個体レベルから組織・細胞レベル、さらに分子レベルに至る種々の段階で評価・解析する研究課題について、その課題の妥当性の検討及び倫理的配慮を踏まえ、研究計画の立案ならびに実験の準備を進める。その過程において、基礎研究から臨床応用へと幅広い研究に対応できるような知識を得ることを目標とする。この科目は、研究科博士後期課程DP1、DP3及びDP4に掲げる知識・技能、意欲・態度・思考・判断・表現を修得することを目指している。

また、この科目の担当者は、理学療法士として30年の経験があり、大学教員となった後も非常勤で定期的に臨床に携わる、実務経験のある教員であるため、生体の正常機能だけでなく病態の解析手法や知見についても言及しながら、研究の幅と深さを広げる。

<到達目標>

「リハビリテーション科学特講」で得られた知識及び疼痛学を基盤として、基礎研究から臨床応用へと幅広い研究に対応できるように知識を深め説明することができる。

<授業のキーワード>

疼痛学、研究倫理、論文抄読、研究計画

<授業の進め方>

研究倫理の研修と論文抄読と並行し、研究テーマ・デザインの検討を進め、そのために必要な予備の実験を含めながら、実験について指導・準備を進める。定期的(週1~2回)に研究室のミーティングに出席し、論文抄読を通して、他の教員や大学院生、及び研究員、学部生らとの質疑応答のなかで、研究計画をブラッシュアップする。

<履修するにあたって>

定期的開催する研究室のプログレスレポート・ミーティング以外にも、指導教員との報告・連絡・相談を適宜行うこと。論文抄読レジュメ等の課題の提出期限を厳守すること。

<授業時間外に必要な学修>

先行研究調査や関連する分野にて必要な論文を検索しその論文抄読に努め、さらに事前に配布された参考資料等

について十分に理解してから演習に臨むこと（60分程度）。演習後は、指摘や質問を受けた内容について調べ、取りまとめて重要事項を整理しておくこと（60分程度）。

< 提出課題など >

適時指示する。

提出された課題に対しては、対面またはWebを通して個別にフィードバックを行う。

< 成績評価方法・基準 >

提出された課題及び演習・ミーティング時のプレゼンテーション，質疑応答を評価する。

< テキスト >

特に指定しない。

< 参考図書 >

個別に指導・紹介する。

2022年度 前期

1.0単位

リハビリテーション科学特講演習

藤原 瑞穂

< 授業の方法 >

演習（対面授業および遠隔授業併用）

< 授業の目的 >

博士論文の作成のために、各自の研究テーマに基づき、研究を行うための準備を行う。作業と健康に関する最新知見や課題を整理し、それを探求していくための研究の方法論を学び実践する。

< 到達目標 >

インタビュー調査法の基礎を理解する。インタビューと観察の方法を身につける。これらに基づいて、自らの研究テーマに関する調査計画を立てることができるようになる。

< 授業のキーワード >

作業 質的研究

< 授業の進め方 >

論文抄読ならびに履修者とのディスカッションを中心に行う

作業療法、作業科学の基本文献の読解を通して作業に焦点をあてた実践・研究に必要な発想を学ぶ

この科目は、学生の進行状況に合わせて、博士論文作成のための研究に必要な知識と技能を学修できるように計画して行う。博士後期課程DP3に関連して、これからのリハビリテーション科学に役立つ知識を修得することを目指す。この科目は、作業療法士の実務経験のある教員が担当する。

< 授業時間外に必要な学修 >

1時間程度の学習が必要

< 提出課題など >

適時指示する。提出された課題に対しては、対面またはWebを通して個別にフィードバックを行う。

< 成績評価方法・基準 >

課題発表（50%）、レポート（50%）

< 参考図書 >

授業中に紹介する

2022年度 前期

1.0単位

リハビリテーション科学特講演習

松原 貴子

< 授業の方法 >

演習（対面授業および遠隔授業併用）

< 授業の目的 >

生体の構造と機能、さらにそれらの障害や疾病、特に疼痛に関するup-to-dateな最新知見や課題を、個体レベルから組織・細胞レベル、さらに分子レベルに至る種々の段階で評価・解析する研究課題について、その課題の妥当性の検討及び倫理的配慮を踏まえ、研究計画の立案ならびに実験の準備を進める。その過程において、基礎研究から臨床応用へと幅広い研究に対応できるような知識を得ることを目標とする。この科目は、研究科博士後期課程DP1、DP3及びDP4に掲げる知識・技能、意欲・態度・思考・判断・表現を修得することを目指している。

また、この科目の担当者は、理学療法士として30年以上の経験があり、大学教員となった後も非常勤で定期的に臨床に携わる、実務経験のある教員であるため、生体の正常機能だけでなく病態の解析手法や知見についても言及しながら、研究の幅と深さを広げる。

< 到達目標 >

「リハビリテーション科学特講」で得られた知識及び疼痛学を基盤として、基礎研究から臨床応用へと幅広い研究に対応できるように知識を深め説明することができる。

< 授業のキーワード >

疼痛学、研究倫理、論文抄読、研究計画

< 授業の進め方 >

研究倫理の研修と論文抄読と並行し、研究テーマ・デザインの検討を進め、そのために必要な予備の実験を含めながら、実験について指導・準備を進める。定期的（週1~2回）に研究室のミーティングに出席し、論文抄読を通して、他の教員や大学院生、及び研究員、学部生らとの質疑応答のなかで、研究計画をブラッシュアップする。

< 履修するにあたって >

定期的開催する研究室のプログレスレポート・ミーティング以外にも、指導教員との報告・連絡・相談を適宜行うこと。論文抄読レジュメ等の課題の提出期限を厳守すること。

< 授業時間外に必要な学修 >

先行研究調査や関連する分野にて必要な論文を検索しその論文抄読に努め、さらに事前に配布された参考資料等について十分に理解してから演習に臨むこと（60分程度

）。演習後は、指摘や質問を受けた内容について調べ、取りまとめ重要事項を整理しておくこと（60分程度）。

< 提出課題など >

適時指示する。

提出された課題に対しては、対面またはWebを通して個別にフィードバックを行う。

< 成績評価方法・基準 >

提出された課題及び演習・ミーティング時のプレゼンテーション、質疑応答を評価する。

< テキスト >

特に指定しない。

< 参考図書 >

個別に指導・紹介する。

2022年度 後期

1.0単位

リハビリテーション科学特講演習

坂本 年将

< 授業の方法 >

演習（対面授業および遠隔授業併用）

< 授業の目的 >

生体の構造と機能、さらにそれらの障害や疾病、特に疼痛に関するup-to-dataな最新知見や課題を、個体レベルから組織・細胞レベル、さらに分子レベルに至る種々の段階で評価・解析する研究課題について、その課題の妥当性の検討及び倫理的配慮を踏まえ、研究計画の立案ならびに実験の準備を進める。その過程において、基礎研究から臨床応用へと幅広い研究に対応できるような知識を得ることを目標とする。この科目は、研究科博士後期課程DP1、DP3及びDP4に掲げる知識・技能、意欲・態度・思考・判断・表現を修得することを目指している。

また、この科目の担当者は、理学療法士として30年の経験があり、大学教員となった後も非常勤で定期的に臨床に携わる、実務経験のある教員であるため、生体の正常機能だけでなく病態の解析手法や知見についても言及しながら、研究の幅と深さを広げる。

< 到達目標 >

「リハビリテーション科学特講」、「リハビリテーション科学特講演習」で得られた知識及び疼痛学を基盤として、基礎研究から臨床応用へと幅広い研究に対応できるように知識を深め説明することができる。

< 授業のキーワード >

疼痛学、研究倫理、論文抄読、研究計画、データ解析

< 授業の進め方 >

研究倫理の研修と論文抄読と並行し、研究テーマ・デザインの検討を繰り返し、個々の実験・調査研究を指導する。定期的（週1～2回）に研究室のミーティングに出席し、論文抄読を通して、他の教員や大学院生、及び研究員、学部生らとの質疑応答のなかで、研究計画をブラッ

シュアアップする。

< 履修するにあたって >

定期的開催する研究室のプログレスレポート・ミーティング以外にも、指導教員との報告・連絡・相談を適宜行うこと。論文抄読レジュメ等の課題の提出期限を厳守すること。

< 授業時間外に必要な学修 >

先行研究調査や関連する分野にて必要な論文を検索しその論文抄読に努め、さらに事前に配布された参考資料等について十分に理解してから演習に臨むこと（60分程度）。演習後は、指摘や質問を受けた内容について調べ、取りまとめ重要事項を整理しておくこと（60分程度）。

< 提出課題など >

適時指示する。

提出された課題やデータ報告に対しては、対面またはWebを通して、プログレスミーティング時または個別にフィードバックを行う。

< 成績評価方法・基準 >

提出された課題及び演習・ミーティング時のプレゼンテーション、質疑応答を評価する。

< テキスト >

特に指定しない。

< 参考図書 >

個別に指導・紹介する。

2022年度 後期

1.0単位

リハビリテーション科学特講演習

藤原 瑞穂

< 授業の方法 >

演習（対面授業および遠隔授業併用）

< 授業の目的 >

博士論文の作成のために、各自の研究テーマに基づき、研究を行うための準備を行う。作業と健康に関する最新知見や課題を整理し、それを探求していくための研究の方法論を学び実践する。

< 到達目標 >

インタビュー調査法の基礎を理解する。インタビューと観察の方法を身につける。これらに基づいて、自らの研究テーマに関する調査計画を立て、開始することができる

< 授業のキーワード >

作業 質的研究

< 授業の進め方 >

論文抄読ならびに履修者とのディスカッションを中心に行う

作業療法、作業科学の基本文献の読解を通して作業に焦点をあてた実践・研究に必要な発想を学ぶ

この科目は、学生の進行状況に合わせて、博士論文作成

のための研究に必要な知識と技能を学修できるように計画して行う。博士後期課程DP3に関連して、これからのリハビリテーション科学に役立つ知識を修得することを目指す。この科目は、作業療法士の実務経験のある教員が担当する。

< 授業時間外に必要な学修 >

データ収集（インタビュー、参与観察など）の実行とデータの分析 1時間程度の学習が必要

< 提出課題など >

研究計画書、倫理申請書一式、文献レビューなど

提出された課題に対しては、対面またはWebを通して個別にフィードバックを行う。

< 成績評価方法・基準 >

課題発表（50%）、レポート（50%）

< 参考図書 >

授業中に紹介する

2022年度 後期

1.0単位

リハビリテーション科学特講演習

松原 貴子

< 授業の方法 >

演習（対面授業および遠隔授業併用）

< 授業の目的 >

生体の構造と機能、さらにそれらの障害や疾病、特に疼痛に関するup-to-dataな最新知見や課題を、個体レベルから組織・細胞レベル、さらに分子レベルに至る種々の段階で評価・解析する研究課題について、その課題の妥当性の検討及び倫理的配慮を踏まえ、研究計画の立案、実験ならびに得られた結果の解析と考察について指導する。その過程を基盤にして、基礎研究から臨床応用へと幅広い研究に対応できるような知識を得ることを目標とする。この科目は、研究科博士後期課程DP1、DP3及びDP4に掲げる知識・技能、意欲・態度・思考・判断・表現を修得することを目指している。

また、この科目の担当者は、理学療法士として30年以上の経験があり、大学教員となった後も非常勤で定期的に臨床に携わる、実務経験のある教員であるため、生体の正常機能だけでなく病態の解析手法や知見についても言及しながら、研究の幅と深さを広げる。

< 到達目標 >

「リハビリテーション科学特講」、「リハビリテーション科学特講演習」で得られた知識及び疼痛学を基盤として、基礎研究から臨床応用へと幅広い研究に対応できるように知識を深め説明することができる。

< 授業のキーワード >

疼痛学、研究倫理、論文抄読、研究計画、データ解析

< 授業の進め方 >

研究倫理の研修と論文抄読と並行し、研究テーマ・デザ

インの検討を繰り返し、個々の実験・調査研究を指導する。定期的（週1～2回）に研究室のミーティングに出席し、論文抄読を通して、他の教員や大学院生、及び研究員、学部生らとの質疑応答のなかで、研究計画をブラッシュアップする。

< 履修するにあたって >

定期的開催する研究室のプログレスレポート・ミーティング以外にも、指導教員との報告・連絡・相談を適宜行うこと。論文抄読レジュメ等の課題の提出期限を厳守すること。

< 授業時間外に必要な学修 >

先行研究調査や関連する分野にて必要な論文を検索しその論文抄読に努め、さらに事前に配布された参考資料等について十分に理解してから演習に臨むこと（60分程度）。演習後は、指摘や質問を受けた内容について調べ、取りまとめて重要事項を整理しておくこと（60分程度）。

< 提出課題など >

適時指示する。

提出された課題やデータ報告に対しては、対面またはWebを通して、プログレスミーティング時または個別にフィードバックを行う。

< 成績評価方法・基準 >

提出された課題及び演習・ミーティング時のプレゼンテーション、質疑応答を評価する。

< テキスト >

特に指定しない。

< 参考図書 >

個別に指導・紹介する。

2022年度 前期

1.0単位

リハビリテーション科学特講演習

松原 貴子

< 授業の方法 >

演習（対面授業および遠隔授業併用）

< 授業の目的 >

生体の構造と機能、さらにそれらの障害や疾病、特に疼痛に関するup-to-dataな最新知見や課題を、個体レベルから組織・細胞レベル、さらに分子レベルに至る種々の段階で評価・解析する研究課題について、その課題の妥当性の検討及び倫理的配慮を踏まえ、研究計画の立案、実験ならびに得られた結果の解析と考察について指導する。その過程を基盤にして、基礎研究から臨床応用へと幅広い研究に対応できるような知識を得ることを目標とする。この科目は、研究科博士後期課程DP1、DP3及びDP4に掲げる知識・技能、意欲・態度・思考・判断・表現を修得することを目指している。

また、この科目の担当者は、理学療法士として30年以上の経験があり、大学教員となった後も非常勤で定期的

臨床に携わる、実務経験のある教員であるため、生体の正常機能だけでなく病態の解析手法や知見についても言及しながら、研究の幅と深さを広げる。

<到達目標>

「リハビリテーション科学特講」、「リハビリテーション科学特講演習」、「リハビリテーション科学特講演習」で得られた知識及び疼痛学を基盤として、基礎研究から臨床応用へと幅広い研究に対応できるように知識を深め説明することができる。

<授業のキーワード>

疼痛学、研究倫理、論文抄読、研究計画、データ解析、論文構成

<授業の進め方>

研究倫理の研修と論文抄読と並行し、研究テーマ・デザインの検討を繰り返し、個々の実験・調査研究を指導する。定期的（週1～2回）に研究室のミーティングに出席し、論文抄読を通して、他の教員や大学院生、及び研究員、学部生らとの質疑応答のなかで、研究内容をブラッシュアップする。

<履修するにあたって>

定期的開催する研究室のプログレスレポート・ミーティング以外にも、指導教員との報告・連絡・相談を適宜行うこと。論文抄読レジュメ等の課題の提出期限を厳守すること。

<授業時間外に必要な学修>

先行研究調査や関連する分野にて必要な論文を検索しその論文抄読に努め、さらに事前に配布された参考資料等について十分に理解してから演習に臨むこと（60分程度）。演習後は、指摘や質問を受けた内容について調べ、取りまとめ重要事項を整理しておくこと（60分程度）。

<提出課題など>

適時指示する。

提出された課題やデータ報告に対しては、対面またはWebを通して、プログレスミーティング時または個別にフィードバックを行う。

<成績評価方法・基準>

提出された課題及び演習・ミーティング時のプレゼンテーション、質疑応答を評価する。

<テキスト>

特に指定しない。

<参考図書>

個別に指導・紹介する。

2022年度 前期

1.0単位

リハビリテーション科学特講演習

村尾 浩

<授業の方法>

オンデマンド講義を中心に行います。

<授業の目的>

博士課程の学生が、神経・運動機能リハビリテーション学についての適切な論文作成を補助することを目的とする。研究科ディプロマポリシーの1～4に該当する。

この科目を担当する教員は1988年に医師の資格を取得し、2009年に異動するまで常勤臨床医の実務経験を有しています。日本整形外科学会専門医・日本リハビリテーション医学会指導責任者の資格および臨床経験を活かし、指導を行います。

<到達目標>

医療・保健・福祉に関わる分野から、適切な課題を設定し、論文執筆の準備を行う。

<授業の進め方>

保健・医療・福祉に関する文献の探索や詳読を行う。

<授業時間外に必要な学修>

論文を読んだり本を読んだりしてください。

<成績評価方法・基準>

博士課程にふさわしい水準の論文作成準備が行えているかを評価する。

<授業計画>

第1回 研究の立案準備

研究立案の準備をする。

第2回 研究計画書の作成準備

研究計画書の作成準備をする。

第3回 情報の収集と解析準備

情報の収集と解析準備を行う。

第4回 論文の執筆準備

論文の執筆準備を行う。

2022年度 後期

1.0単位

リハビリテーション科学特講演習

松原 貴子

<授業の方法>

演習（対面授業および遠隔授業併用）

<授業の目的>

生体の構造と機能、さらにそれらの障害や疾病、特に疼痛に関するup-to-dateな最新知見や課題を、個体レベルから組織・細胞レベル、さらに分子レベルに至る種々の段階で評価・解析する研究課題について、その課題の妥当性の検討及び倫理的配慮を踏まえ、研究計画の立案、実験ならびに得られた結果の解析と考察について指導する。その過程を基盤にして、基礎研究から臨床応用へと幅広い研究に対応できるような知識を得ることを目標とする。この科目は、研究科博士後期課程DP1、DP3及びDP4に掲げる知識・技能、意欲・態度・思考・判断・表現を修得することを目指している。

また、この科目の担当者は、理学療法士として30年以上の経験があり、大学教員となった後も非常勤で定期的

臨床に携わる、実務経験のある教員であるため、生体の正常機能だけでなく病態の解析手法や知見についても言及しながら、研究の幅と深さを広げる。

<到達目標>

「リハビリテーション科学特講」、「リハビリテーション科学特講演習」、「リハビリテーション科学特講演習」で得られた知識及び疼痛学を基盤として、基礎研究から臨床応用へと幅広い研究に対応できるように知識を深め説明することができる。

<授業のキーワード>

疼痛学、研究倫理、論文抄読、研究計画、データ解析、論文構成

<授業の進め方>

研究倫理の研修と論文抄読と並行し、研究テーマ・デザインの検討を繰り返し、個々の実験・調査研究を指導する。定期的（週1～2回）に研究室のミーティングに出席し、論文抄読を通して、他の教員や大学院生、及び研究員、学部生らとの質疑応答のなかで、研究内容をブラッシュアップする。

<履修するにあたって>

定期的開催する研究室のプログレスレポート・ミーティング以外にも、指導教員との報告・連絡・相談を適宜行うこと。論文抄読レジュメ等の課題の提出期限を厳守すること。

<授業時間外に必要な学修>

先行研究調査や関連する分野にて必要な論文を検索しその論文抄読に努め、さらに事前に配布された参考資料等について十分に理解してから演習に臨むこと（60分程度）。演習後は、指摘や質問を受けた内容について調べ、取りまとめ重要事項を整理しておくこと（60分程度）。

<提出課題など>

適時指示する。

提出された課題やデータ報告に対しては、対面またはWebを通して、プログレスミーティング時または個別にフィードバックを行う。

<成績評価方法・基準>

提出された課題及び演習・ミーティング時のプレゼンテーション、質疑応答を評価する。

<テキスト>

特に指定しない。

<参考図書>

個別に指導・紹介する。

2022年度 後期

1.0単位

リハビリテーション科学特講演習

村尾 浩

<授業の方法>

オンデマンド講義を中心に行います。

<授業の目的>

博士課程の学生が、神経・運動機能リハビリテーション学についての適切な論文作成を補助することを目的とする。DPのうち保健・医療・福祉領域における教育・研究者・高度な専門職としての知識・技能・意欲・態度を身につけることに該当する。

この科目を担当する教員は1988年に医師の資格を取得し、2009年に異動するまで常勤臨床医の実務経験を有しています。日本整形外科学会専門医・日本リハビリテーション医学会指導責任者の資格および臨床経験を活かし、指導を行います。

<到達目標>

医療・保健・福祉に関わる分野から、適切な課題を設定し、論文執筆の準備を行う。

<授業の進め方>

保健・医療・福祉に関する文献の探索や詳読を行う。

<授業時間外に必要な学修>

論文や本をよく読んでください。

<成績評価方法・基準>

博士課程にふさわしい水準の研究課題と論文作成準備が行えているかを評価する。

<授業計画>

第1回 研究の立案準備

研究立案の準備を行う。

第2回 研究計画書作成準備

研究計画書作成の準備を行う。

第3回 情報の収集と解析準備

情報の収集と解析準備を行う。

第4回 論文の執筆準備

論文の執筆準備を行う。